

機動戦士ガンダム

MS-06S ZAKU II

MS-06ズーザ
新・MS-06解体新書

冬三



新・MS-06 解体新書
ジオン軍機+ガンダム+モビルスーツの軌跡
MS-06 ZAKU
NEW MS-06 ZAKU



MS-06 ARCHIVES

新・MS-06解体新書
ザクⅡの発展とその軌跡





ルウム戦役

U.C.0079.01.15、ラグランジュポイント1に置かれたサイド5「ルウム」宙域において、地球連邦軍艦隊とジオン公国軍艦隊が砲火を交えた。後にルウ

ム戦役と呼ばれるこの戦いは、再度のコロニー落としを目指すジオン公国軍と、それを阻止するために進出した地球連邦軍との間で行われた戦いである。

一週間戦争で宇宙艦隊に大打撃を受けていたとはいえ、地球連邦軍はまだ相当の宇宙艦艇を要しており、ジオン公国軍の劣勢は明らかであった。事実、当初の艦隊戦では、ジオン公国軍もかなりの被害を受けていたのである。しかし、この状況はあるひと





つの兵器によって覆された。

MS-06 ザクⅡ。これがその兵器の名称である。

戦線に投入されたザクⅡは、次々と地球連邦軍艦艇を撃破。ミノフスキー粒子によって索敵手段を封じられた地球連邦軍艦艇はなす術もなく、敵の攻撃を受け沈んでいったのである。この結果、当初の予想とは異なり、ルウム戦役はジオン公国軍の勝利に終わった。この勝利はザクⅡによってもたらされた

ものであり、存在を知りながらもその性能を予測できなかった地球連邦軍が敗北するのも無理からぬことであった。

ルウム戦役において、ザクⅡ、つまりはMSの戦略的、戦術的な価値は決定付けられた。こうしてザクⅡは、ジオン公国軍の中核を成す兵器として認知され、以降、一年戦争を通じて、戦線に投入されていくこととなる。





地球降下作戦

U.C.0079.03.01から順次行われた地球降下作戦においても、ザクⅡはジオン公国軍の主力として運用された。HLVから出現した全高18mの機動兵器は、地球連邦軍の兵士の戦意を喪失させ、各地で勝利を重ねていった。地球降下作戦におけるジオン公

国軍の快進撃は背景には、先のコロニー落としやルウム戦役での勝利と、それに伴う地球連邦軍将兵の士気の低下も理由として挙げられる。しかし、何よりもザクⅡが既存の兵器を遥かに凌駕する性能を有していたことが最大の要因と言える。





しかし、高い戦闘力と汎用性を有していたザクであったが、多様な環境を有する地球での運用においては限界が見え始めていた。それを解決するために、ザクⅡには改修が施された重量下仕僚機や砲撃戦仕僚機、砂漠専用機など、様々なバリエーションが開発された。また、後に開発される水陸両用MSの母体となるなど、ザクⅡは新型MS開発のベースとしても運用されたのである。

一方の地球連邦軍もジオン公国軍の快速撃に、ただ手をこまねいていたわけではない。遅ればせながらMSの重要性を認識した地球連邦軍は、独自にMS開発をスタートさせると同時に、鹵獲したザクⅡを用いMSの運用法などを模索していた。

戦線が膠着するなか、両軍ともに戦力の拡充を進めてはいたが、この時点で既にザクⅡには運用性の限界が見え始めてもいたのである。





ア・バオア・クー攻防戦

一年戦争後期になると、ザクⅡの旧式化は顕著となっていた。新型主力MSの選定において、さらなる主力化を目指した改修が進められた。この過程で開発された高機動型などは確かにザクⅡを遙かに凌駕し、新型主力MSに匹敵する性能を有してはいたが、コストや運用性の面ではゲルググなどの新型MSに劣っており、制式採用されることはなかった。ザクⅡは登場からわずか一年余りで旧式化していたのである。

しかし、逼迫する戦局はザクⅡを戦場に留めていた。戦線の後退により、新型

MSの配備もままならない部隊では未だにザクⅡが使用されていたのである。これは一年戦争後期に行われたふたつの大規模戦闘——ソロモン攻防戦とア・バオア・クー攻防戦——でも同じであった。この時期既にジオン公国軍は、リック・ドクやゲルググといった新型機を配備していたが、ザクⅡも第一線に投入されていた。さらに地球連邦軍もMSを運用しており、ザクⅡはこれまで以上の苦戦を強いられたのである。しかし、ザクⅡは後退する戦線を支える貴重な戦力であったことは間違いない。





戦後も各地に潜伏したジオン公国軍残
党がザクⅡを用いており、アクシズ（ネ
オ・ジオン）では、ザクⅢなどが開発さ
れるなど、ジオンの象徴としても認識さ
れていたのである。そういった意味にお
いて、ザクⅡは戦史のみならず、MS開
発史に大きな功績を残したMSといえる
だろう。





MSL



MS-06 ARCHIVES

CONTENTS



02 MS-06 GALLERY

11 CHAPTER 01 MSの開発と、ザクの誕生

- 013 COLUMN 01 狭義、広義におけるザク系MSの位置付け
- 019 COLUMN 02 試作競合に敗れたEMS-04 ツダのその後
- 020 COLUMN 03 ザク・シリーズに投入されたジオン公国系MSの基礎技術
- 026 COLUMN 04 ザク・シリーズおよび戦後のザク系MSの開発、生産拠点
- 030 COLUMN 05 マルチスレドアンテナのバリエーション
- 042 COLUMN 06 特殊仕様に改装されたザク・マシンガンとザク・バズーカ
- 048 COLUMN 07 ザク・シリーズに関与した企業と組織

49 CHAPTER 02 一年戦争におけるザク・シリーズの活躍

- 055 COLUMN 08 MSの位置付けを巡って分裂した宇宙攻撃軍と突撃機動軍
- 059 COLUMN 09 ルウム戦役で名を馳せたスペシャル・カラーのザク
- 070 COLUMN 10 地球連邦軍に鹵獲されたザクIIと一年戦争中、戦後の運用

71 CHAPTER 03 ザク・バリエーションの開発

- 077 COLUMN 11 ザクIIのランドセル換装機構とそれを利用したバリエーション機
- 080 COLUMN 12 MSの運用限界を押し上げた大気圏内用支援システム
- 084 COLUMN 13 S型とほぼ同時期に開発された特殊用途型のザクII派生機
- 090 COLUMN 14 MS-06R系の枠を超えた高機動仕様のザク
- 094 COLUMN 15 ザクのパーツを流用した機動兵器や特殊機器
- 098 COLUMN 16 MS-06シリーズ開発系統図

99 CHAPTER 04 一年戦争後のザク・シリーズ

- 110 COLUMN 17 ハイザックとマラサイのバリエーション機
- 114 COLUMN 18 原型機以上の高性能を達成したザクIIIのバリエーション機
- 118 COLUMN 19 ギラ・ドーガのバリエーションと後継の新型主力MS

119 ザク・シリーズカタログ



MSL

CHAPTER 01

MSの開発と、ザクの誕生



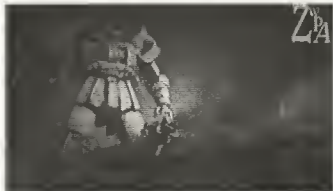


モビルスーツの代名詞「ザク」と 広義、狭義のザク・シリーズ

▼絶対兵器「ザク」の威力▲

巨大人型兵器モビルスーツ（以下MS）ザク。地球圏の人口の約半分が失われた一年戦争において、ジオン公国軍の主力MSとして活躍した名機である。その特徴的な姿——緑系で統一された機体色、曲面を多用した滑らかなライン、露出したパイプ類、頭部中央に燦々と輝く単眼式カメラ、そして全高18mに迫る「巨人」のシルエット——は今も資料映像や各種メディアで取り上げられている。

一年戦争開戦と共に秘密のヴェールを脱いだザクは、電波障害や精密電子機器の誤動作を引き起こすミノフスキー粒子の影響下に対応した兵器であり、MSを持たなかった地球連邦軍に対する軍事的アドバンテージは圧倒的なものだった。ミノフスキー粒子によって通信網を寸断され、得意の誘導兵器や長距離精密攻撃を封じられた地球連邦軍は、「白兵戦」と呼ばれるほどの近距離戦闘を得意とするザクの前に大敗を喫した。さらにザクは、巨大機関砲やロケット・ランチャーなどの多様なオプションを使いこなし、コロニーのハッチ類の開閉操作すら可能な器用さだけでなく、1G環境においても全備重量70tを超える巨体を疾走、跳躍させる脚部を持ち、人間のそれと同じ拳動を可能としていた。また、高度な機動性を発揮する熱核ロケット・エンジンや、戦車砲弾にも耐える超硬スチール合金製の装甲、優れた視認性を示す複合型カメラアイ「モノアイ」、そして小型かつ高出力なミノフスキー・イオネスコ型核反応炉などの最新テクノロジーが惜しみなく投入されており、既存の兵器を遙かに凌駕する性能を発揮した。こうした革



▲ジオン公国軍は、MS-06 ザクIIを積極的にプロバガンダに用いた。そのためか、地球圏におけるザクIIの認知度は一年戦争中からも高かったようである。

新的かつ強力なギミックを持つザクは、宇宙戦においては地球連邦軍が威信をかけて編制した宇宙艦隊を破り、地上戦でも主力戦車や巨大大陸戦艇をはじめとする地球連邦軍陸上部隊を蹂躪したのである。宇宙、地上を問わず投入されたザクに対し、当初の地球連邦軍は効果的な対抗手段を持たず、苦肉の策として投入された対MS特技兵（対MSミサイルを装備した歩兵）も、ザクの巨体を利用した蹂躪攻撃や口径120mmの重砲、そして機体各部に装備された対人兵器によって返り討ちにすることがほとんどだった。こうしてMSの驚異的性能とザクの名は、ジオン国営放送ZwPA（Zeon War establishment Propaganda Association）などの戦争報道、戦後に製作された映像作品、そしてその威力を体感させられた地球連邦軍将兵などの口を通じて一般にも知られるようになった。こうしてザクは、MSの代名詞的存在として認知されるようになったのである。



▼サイド3のコロニー、タイガーバウムに飾られていたMS-05 ザクI。ザク系の機体はコレクターにも人気のある機体で、レストア機やレプリカを保有する者もいた。

▼「真のザク」とは？▲

地球連邦軍の伝説的ハイスpek試作MSガンダムと共に認知度が高いザクであるが、名称に「ザク」という文字を含むMSや、素人目にはザクとしか思えないMSも多く存在する。その大半は専門家からもザクのバリエーションや系列機と見做されている機体である。つまり「広義のザク」が多数存在しているのだ。これに対し、「狭義のザク」「真のザク」とは何かというと、明確な答えは出ていない。実は、そのものずばり「ザク」という名称を持つMSは存在しないのだ（正確には、かつては存在した）。

冒頭で記した「滑らかなシルエットにパイプ類を露出させた緑のMS」こそザクであると言えなくもない。確かにそのMSは一般的にザクとして知られるMS——MS-06 ザクII、中でもF型と呼ばれるMS-06F ザクII F型——であろう。だが、その外見的特

徴を満たすMSはザクⅡF型だけではない。後期生産型のMS-06F-2 ザクⅡF2型や統合整備計画準拠の最終生産型MS-06FZ ザクⅡ改、または陸戦仕様のMS-06J 陸戦用ザクⅡもそうであり、F型以前の核兵器運用仕様のMS-06C ザクⅡC型も外見の特徴という条件は満たしている。さらに、戦後も含めて同様のスタイルを採用したMSが数多く存在することも問題を複雑にしている。では、バリエーションや酷似したシルエットを持つ後発機が多いザクⅡではなく、「ザクⅠ」が真のザクかという、これも違うと言わざるを得ない。

ザクⅡの原型機となったMS-05は、かつて確かに「ザク」と呼ばれた。だが、ザクⅡの登場に伴いザクⅠと呼ばれるようになっただけで、系列上初めての「ザク」であるMS-04も今日ではプロトタイプ・ザク（同型式番号のアーリー・ザクも存在）と呼称されている。何よりもザクⅠやプロトタイプ・ザクは、いわゆる動力パイプが露出してないほか、カラーリングもザクⅡとは異なっており、一般にザクと呼ぶには違和感があるかもしれない。

このように現在におけるザクという言葉は、MSの一カテゴリーを指すと言ってもいいだろう。それで

もやはりMS-06 ザクⅡシリーズが、一般に広く「ザク」と認識されているのは間違いなく、ザクⅡの開発と発展を追うことは、MS開発黎明期と宇宙世紀戦史を紐解くことに他ならない。そこで本稿では、MS-04 プロトタイプ・ザクに始まる系列機や派生機を「広義のザク」、MS-06 ザクⅡ、特にザクⅡの決定版と呼ばれるMS-06F ザクⅡF型を「狭義のザク」とし、ザクⅡを中心としたMSの開発過程や機能、装備や運用実績などを解説していく。第一章は「狭義のザク」を取り上げ、ザクⅡの決定版と呼ばれるザクⅡF型の誕生までを、政治的背景や技術開発を含めて解説していく。



▲一年戦争後、ジオン公国軍の技術を受け継いだ地球連邦軍が開発したRMS-106ハイザック。ザクⅡと似た外観から、ジオン側の技術陣が参加していたことが分かる。

MS-06 REPORT

狭義、広義における ザク系MSの位置付け

COLUMN 01

ザクⅡF型を「狭義のザク」とすることに異論は少ないだろう。地球侵襲作戦の主力となったザクⅡJ型や、F型の総合性能向上型であるザクⅡS型も一年戦争で勇名を馳せたザクⅡのバリエーションであり、メディアや戦記での露出も多いためF型に次ぐ「狭義のザク」と定義して問題ない。しかし、他のザクⅡシリーズとなると「狭義のザク」から徐々に離れていき、一年戦争後の系列機に至っては技術融合が進んだこともあって



◀ 機体ビーム砲を撃つAMX-110ザクⅢ。ネオ・ジオン製のMSで、かつてのザクⅡをモチーフに開発されているが、ゲルググの影響も受けている。

「広義のザク」に分類される。ここに付した表は、ザクの系列機をおおまかに「狭義」「広義」に位置付けしたものである。ただし絶対的な区分ではなく、本書の分類に合わせたものである。

■ザク系MSの位置付け

狭義のザク

MS-06F ザクⅡF型 / MS-06J ザクⅡJ型
MS-06S ザクⅡS型 / MS-06F-2 ザクⅡF2型
MS-06FZ ザクⅡ改、MS-06FS ザクⅡFS型
MS-06C ザクⅡC型 / MS-06R 高機動型ザク
MS-06F ザク・マインレリヤー / MS-08A ザクⅡA型
MS-05 ザクⅠ / 上記以外のMS-06ナンバード
MS-04 プロトタイプ・ザク
MSG-01 高機動サイコミュ試験用ザク
MS-11 アクト・ザク / RMS-192M ザク・マリナー
RMS-188MD ザク・ダイバー

広義のザク

AMS-119 ギャ・ドーガ
AMX-011 ザクⅢ
AMX-011S ザクⅢ改
RMS-106 ハイザック
RMS-108 マラサイ



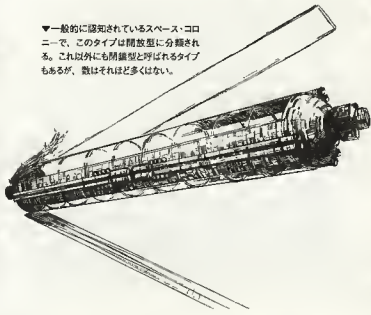
宇宙移民時代の到来と MS開発への道

■スペースノイドの間に広がる不満■

MSはミノフスキー粒子散布環境下に対応した兵器であり、一年戦争開戦時、ジオン公国軍だけがこれの戦力化に成功していた。地球連邦軍でもジオン公国軍のMS開発を察知し、研究を進めてはいたが兵器開発の本流とはいえず、独自のミノフスキー粒子散布環境下対応兵器も開発されていなかった。つまり、当時、ミノフスキー粒子の影響下で運用可能な兵器を保有していたのはジオン公国軍だけだったのだ。これは公国が、MSを必要とする国家戦略を探っていたということである。その国家戦略とは宇宙居住者の独立国家樹立であり、この手段として軍事力による地球連邦の打倒という国是が存在していた。ジオン公国がこのような先鋭的とも言える国家戦略を採った背景には、宇宙世紀の政治状況が関係している。

西暦期末期、人口増加や環境汚染による地球の衰退を危惧した人類は、この解決方法として宇宙への大規模移民を考案した。そして、宇宙移民を地球規模の政策として推進するため、既存の国家を統合する形で地球連邦が組織された。地球連邦は月軌道上の重力安定宙域ラグランジュ・ポイントに、スペース・コロニーと呼ばれる人工島（数十基のコロニーから構成される自治体が「サイド」と呼ばれる）を建設すると共に、半強制的に宇宙移民を開始した。年号

▼一般的に認知されているスペース・コロニーで、このタイプは開放型に分類される。これ以外にも閉鎖型と呼ばれるタイプもあるが、数はそれほど多くはない。



も、宇宙移民の開始をもって西暦から宇宙世紀=ユニバーサル・センチュリーに移行するなど、その変革は劇的なものであり、人類史上最大のパラダイムシフトだったことは間違いない。

移民開始から半世紀後のU.C.(ユニバーサル・センチュリー)の略) 0050には地球圏人口110億人の内、90億人の移民が完了し、宇宙移民は順調に進んでいた。だがU.C.0051、地球連邦政府は新規コロニー開発計画の凍結、つまり事実上の宇宙移民政策中止を発表した。移民者たちが宇宙に棄てられた民に過ぎないことが言外に語られたのである。また、自治体であるはずのサイドに自治権が存在しないこと、多数派である宇宙居住者の民意が地球連邦の政治に反映されない「絶対民主主義」も、宇宙移民者たちの不満を加速させる原因となった。ここに地球居住者「アースノイド」と宇宙居住者「スペースノイド」という新たな人類の区別が明確化し、紛争の火種となっていたのである。



◀地球周辺にあるラグランジュポイント上にはサイド1からサイド7まで、計7つのサイドが建設され、人類の新たな生活の場となった。

■サイド3独立運動とジオン公国の誕生■

こうして、自発的とは言えない形で移民した者が多かったスペースノイドの間で、反連邦機運が高まる中、宇宙世紀最大の思想家と呼ばれるジオン・ズム・ダイクンが歴史の表舞台に姿を現した。U.C.0052、地球から最も遠いコロニー群サイド3に移住したダイクンは、サイドの独立国家化を柱とするコントリズムを唱え、サイド3住民を中心としてスペースノイドの求心力となっていく。なお、コントリズムは後に、地球の不可侵を語るエレズムと、宇宙時代に対応した新人類——ニュータイプ——という概念が加えられ、ジオニズムへと発展した。

このような流れの中、ダイクンはU.C.0058に独立宣言を行ったサイド3、つまり歴史的名称でいう「ジオン共和国」の首相に就任し、地球連邦政府にサ

イド独立を働きかけた。しかし交渉は進展を見ないまま長期化し、U.C.0067にはサイド独立に重要な意味を持つ「コロニー自治権整備法案」が、地球連邦政府によって廃案に追い込まれた。ここでサイド3の実権を掌握し始めたのが、軍事面や経済面でサイド3を支えていたザビ家である。翌U.C.0068にダイクンが死去すると、ザビ家の頭目デギン・ソド・ザビが首相に就任し、ダイクン派との政争を本格化させると、肅清など行い権力を手中に収めた。ザビ家



◀ジオン公国の総帥であったギレン・ザビ。「優秀人類生存説」を著すなど、派閥思想をジオン国民の間に植えつけた。



▼ジオン公国公王であるデギン・ザビ。ジオン・ダイクン暗殺の首謀者とされており、ダイクンの死去後、政治と軍事の主導権を握った。

は外交によるサイド3独立を目指したダイクンと異なり、軍力による独立を志向しており、国防隊の整備や重工業の促進において大きな役割を担っていた。そしてU.C.0069.8.15の公国宣言により、サイド3はデギンを公王とする「ジオン公国」として再編されたのである。

地球連邦との軍事衝突を不可避とするザビ家主導のジオン公国では、軍備の急速な拡充が進められた。だが、30倍もの国力差がある地球連邦が相手では、奇跡でも起こらない限り勝利することは不可能であった。そこで公国軍が目付けたのが、公国宣言の同年に存在が実証されたミノフスキー粒子であった。

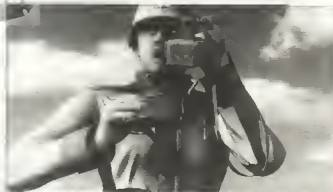


◀サイド3は、地球連邦の圧力に対抗するため、MS開発以前から宇宙艦隊を整備するなど、軍備の拡張を進めていた。

▼ミノフスキー粒子の発見とMSの開発着手▲

ミノフスキー粒子の存在が実証されたのはU.C.0069であるが、それ以前から研究は進められていた。ミノフスキー粒子は、元々トレンフ・Y・ミノフスキー博士が大統一理論（自然界に存在する重力、電磁力、強い力、弱い力という4つの力を統一的に記述する理論）を完成させるために仮定した粒子であった。このように学問上の存在であったミノフスキー粒子だが、電子機器や通信時に発生する原因不明のノイズなどが研究される中、その存在が確実視されるようになっていった。そしてU.C.0045のミノフスキー物理学会の設立、U.C.0047のM & Y（ミノフスキー・イヨネスコ）公社設立およびミノフスキー・イヨネスコ型核反応炉の開発が開始されるなど、ミノフスキー粒子を取り巻く環境は加速していった。

研究の進展に伴い、負の電荷を持つ正粒子と正の電荷を持つ反粒子が対となって存在し、不可視の立方格子を形成していること、強い透過性を持つこと、静止質量がほぼゼロであることなどのミノフスキー粒子の特性が発見された。この中でも注目を集めたのが、立方格子の特性と強い透過性であった。1フィールドと呼ばれるミノフスキー粒子の立方格子は、短波から超長波までの大半の電磁波を減衰させる特



ミノフスキー粒子の影響を受けないようにするには大型の防護装置が必要であった。そのため、これまでは小型だった通信装置なども大型化を余儀なくされた。



地球連邦軍でも、メガ粒子砲や反応炉など、ミノフスキー粒子を利用した兵器や機體を採用していた。

性（特殊電磁波効果）があり、この効果は強い透過性と合わせ、堅固にパッケージングされた精密電子機器にも誤動作を誘発したのである。

当然、空間にミノフスキー粒子が大量に存在すれば、電磁波による通信手段は無効化され、遠距離精密攻撃や誘導兵器、レーダーなどに依存した既存の戦術は有効性を喪失する。つまり、ミノフスキー粒子の影響下ではミサイルなどの遠距離誘導兵器は効果が低くなり、第二次世界大戦以前のような有視界戦闘を余儀なくされるのだ。更にミノフスキー粒子の特性を利用すれば、小型かつ高出力の新型核反応炉（ミノフスキー・イオネスコ型核反応炉）や高効率の粒子ビーム砲（メガ粒子砲）が開発可能である点も見逃せなかった。

地球連邦軍がミノフスキー粒子の軍事利用に積極的でない中、ジオン公国軍は精密電子機器に依存する地球連邦軍に対して優位に立ち得るミノフスキー粒子を重視し、研究を進めた。この結果、U.C. 0070.03にミノフスキー効果の公開確証実験に成功し、同年5月にはメガ粒子砲を完成させた（U.C. 0069.10.13にミノフスキー粒子散布技術を確立したとの説もある）。そしてU.C. 0071、遂にジオン公国軍はミノフスキー粒子散布環境下に対応した新兵器——後のMS——の開発に着手したのであった。



ミノフスキー粒子対応兵器の 模索とMSの誕生

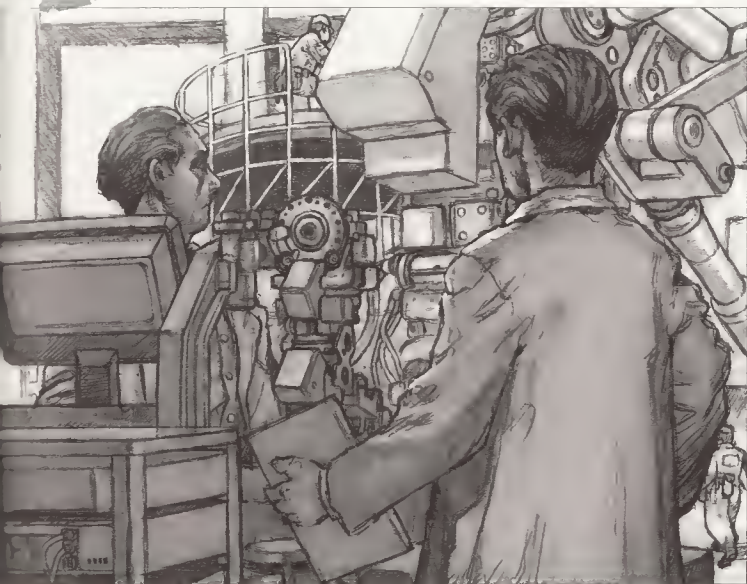
■ MS-01からプロトタイプ・ザクへ ■

ミノフスキー粒子散布環境対応兵器は「次期主力汎用戦術兵器」と仮称され、その開発は公国系重工業メーカーであるZEONIC（ジオニック）社、ZIMMAD（ツイマッド）社、MIP（エムイーペー）社の3社に委託された。そして2年後のU.C. 0073、新兵器の試作機として、MIP社のMIP-X1とZEONIC社のZI-XA3が提示された。MIP-X1とZI-XA3は、ミノフスキー粒子散布環境下での兵器運用の実態が不明な状況で開発されたことや両社の得意分野の違いもあって、方向性が異なる機体だった。MIP-X1は空間作業機と宇宙戦闘機を融合したような妥当かつ堅実な機体で、移動手段はロケット・エンジンとコロニー内用のホバークラフトだったとされる。これに対してZI-XA3は、視察に訪れたギレン・ザビ総帥が一目見るや冷笑を浮かべたと言われるほど奇抜な機体であった。何とZI-XA3は、四肢を持った人型ロボットだったのだ。

玩具のようなスタイルを持つZI-XA3であったが、実はZEONIC社が「S.U.I.T計画」と呼ばれる社内プロジェクト（「汎用宇宙機器」と称し、作業宇宙服開発を偽装）を立ち上げて開発した画期的マシンだった。当然宇宙での機動性ではMIP-X1に劣ったが、作業性に優れた腕部マニピュレーターや、二足歩行による高度な行動力を持つ脚部、そして燃料を消費せず、四肢を動かした反作用で姿勢を制御するAMBAC（Active Mass Balance Auto Control、能動的質量移動による自動姿勢制御）システムを備えていた。これらの機構は、デッドウェイトの塊にも思えたZI-X3が合理的な機体であり、高度の汎用性と機動性を合わせ持つことの証明となっていた。この競合試作は、斬新な機構を備え、汎用性にも秀でるZI-X3に軍配が上がった。そして、ZI-X3にはモビルスーツという呼称とMS-01の型式番号が与えられたのである。戦術汎用宇宙機器こそ「モビルスーツ＝Mobile S.U.I.T（Space Utility Instruments Tactical）」が誕生した瞬間だった。

こうして誕生したMS-01は、公国系MSの標準的





■ MS-01 からプロトタイプ・ザクまでの変遷 ■

機体名	動力	前身機からの主な変更点	補記
ZI-XA3 (MS-01)	不明 (核分裂反応炉、電池類、外部動力とも)	—	後に「クラブマン」と命名 (洗練された人型ではない) 180度旋回の所要時間3秒
MS-02	不明 (核分裂反応炉、電池類とも)	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 冷却機構の改善 ▶ 燃料消費の改善 ▶ 機動性向上 	開発スタッフ拡充。開発拠点が公団軍工廠に移転
MS-03 (改修後)	不明 (核分裂反応炉、電池類とも)	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 人型フォルムの強調 ▶ 装甲強化 ▶ 機動性向上 (実態には重量増大に伴い4割低下) ▶ 耐G性能の向上 	生産数4 (各機、用途別に仕様が異なる)
MS-03 (改修後)	不明 (核分裂反応炉、電池類とも)	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 脱出コックピットの廃止 (軽量化目的) ▶ ボディのモノコック化 (軽量化目的) 	コスト、乗降性、整備性を抑えれば実用レベル
MS-04 プロトタイプ・ザク	ミノフスキー・イオネスコ型熱核反応炉	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 燃料の交換による多用強化 ▶ 機動性向上 (MS-03の2倍とされる) 	コスト面などの問題から制式採用されず

駆動システムである流体内パルス・システムや、最初期型ながら新型カメラアイであるモノアイが採用されており、間違いなくMSの始祖といえる画期的機体だった。だが、あくまでMSの在り様や基礎技術研究のための試作機であり、実戦に耐え得るものではなかった。この後、冷却機構や燃料消費の改善

と機動性向上を図ったMS-02、更なる機動性向上と装甲強化、耐G能力の改善を目指したMS-03が開発された。MS-03は重量増加に伴う機動性低下により、パイロット脱出機構の廃止や胴体のモノコック化といった軽量化が行われたが、それでも実験機に過ぎなかった。そして何よりも、MS用にまでコンパクト

化されたミノフスキー・イオネスコ型核反応炉の実用化が遅延していたのだ。そして、ようやくミノフスキー・イオネスコ型核反応炉（ZAS社のZAS-X7型とされる）の搭載を果たしたMSこそ、MS-04 プロトタイプ・ザクであった。



▶ 卓越した戦術感を持つゼレン艦師であったが、ジオニク社が提示した新兵器の姿に思わず冷笑を浮かべたと言われる。

■ ザク I の開発と機能 ■

初めてミノフスキー・イオネスコ型核反応炉を搭載したMS-04 プロトタイプ・ザクは、953kWもの出力を得て、MS-03の2倍といわれる機動性を発揮した。兵装として100mm口径のZXM-1試製マシンガンも開発され、戦力化間近と思われたが、コスト面などの問題があったらしく制式採用は見送られた。マニピュレーター作業半径の狭さや、対艦攻撃力の不足も不採用の理由だったようである。

この後、プロトタイプ・ザクを改良する形で誕生した機体こそ、史上初の実戦用MSとなったMS-05 ザク I である。ザク I の試作1号機（YSM-05A）がロールアウトしたのは、「次期主力汎用戦術兵器」の開発着手からわずか3年後、U.C.0074.02のことであった。ザク I を開発したZEONIC社は、月面・コロニー内向けを含む汎用民生重作業機の生産していたメーカーであり、その技術を転用改良し、短期間の内にMS-01をザク I に昇華させたのだった。

ザク I はプロトタイプ・ザクと比べてジェネレー

ター出力が低下したほか重量も増えているが、各部の張り出しが無くなり生産性が向上したと言われる。また射撃兵装として、発射時の反動を制御しやすいZMP-47D 105mm/120mm ザク・マシンガンと、大口径弾を発射するH&L-SB21K/280mm A-N ザク・バズーカおよびサイロ型のザク・バズーカ、格闘兵装としてMS用の斧であるヒート・ホークが実用化されるなど武装面も充実していた。特に核砲弾も発射可能なザク・バズーカは、プロトタイプ・ザクで問題視された対艦攻撃力を充分以上に補う兵装であり、ザク I の制式採用を促した要素のひとつとなった。

ザク I が画期的だった点はこれらの武装を操るだけでなく、戦闘中の兵装交換やザク・マシンガンの分解と組み立てすら可能な腕部マニピュレーターを搭載していたことで、その作業性能や汎用性はプロトタイプ・ザクを大きく引き離していたのである。

このように生産性と戦闘能力、多用途性を兼ね備えたザク I だが、制式化が危ぶまれた時期もあった。



▶ 初の実戦型MSであるMS-05 ザク I。いくつかの機能的な問題を抱えていたが、様々な局面に対応可能な革新的な兵器であった。



◀ ジオン公園軍は、テスト中の写真を意図的に地球連邦軍にリークした。しかし、地球連邦軍は興味を示さなかった。

主力MSの座を巡って、ZIMMAD社のEMS-04 ツダとの競合試作が行われることになったのだ。

▼ザクIの競争試作と問題点▲

「次期主力汎用戦術兵器」の競争試作では最終選考に残らなかったZIMMAD社だが、MSの基本フォーマットを得て、得意の推進器技術を投入した試作MSツダを完成させていた。ZIMMAD社が開発したEMS-04 ツダは、重元素を推進剤とする大推力エンジン「木星」と、ザクIを遥かに上回る出力の熱核反応炉を搭載していた。対するZEONIC社はザクIの試作機であるYMS-05Aを提示し、地球から月周辺を含む宙域での近接戦闘能力と1気圧1G環境での陸戦兵器としての性能が試されることになった。試験はパワー、推力共に勝るツダが優秀な結果を残し、試作機同士の模擬戦闘もツダに軍配が上がり、ザクIは劣勢に立たされた。

こうしてザクIが不採用となる可能性が高まっていたが、ツダはザクIの1.8倍ものコストがかかったうえ、公的飛行試験中に空中分解事故を起こすという失態を演じてしまった。この結果、競合試作はコストパフォーマンスと安定性に優れたザクIの勝利に終わったのであった（その裏には、ZEONIC社の工作があったとも言われている）。

U.C.0075.07に量産化が決定し、同年8月に実戦型がロールアウトしたザクIは、A型と呼ばれるMS-05Aが27機生産された（搭載核反応炉は初期にZAS社のZAS-M18B型、後にM&Y公社とZEONIC社共同開発のMYFG-M2ES型と言われる）。パイロット養成と戦技研究に用いられた。一年戦争でもザクIは作業用や後方支援用として投入されているが、これはA型の運用データを基にコクピットや装甲材質などを改良したMS-05B ザクI B型である。793機生産されたB型の中には、局地戦用MSと並行開



◀ MS-05 ザクI B型から顔部マルチブレードアンテナが用意された。陸戦用デバイスに換装された機体も存在した。

発された陸戦用デバイス（防塵防水処理や対人兵器）が追加された機体も存在していた。

こうして生産と配備が進められたザクIだが、軍上層部はその性能に満足していなかった。ザクIの出力は作戦運用上必要とされた数値に届かず、連続稼働時間も軍部の要求値より短かったのである。これに加えて、設計余裕の少なさによる低い発展性と整備性が指摘された。その結果、ジオン公国軍はこれらの問題をクリアした新型MSの開発を指示した。それこそが、公国軍のワークホースとして一年戦争を戦い抜いたMS-06 ザクIIであった。

MS-06 REPORT

試作競合に敗れた EMS-04 ツダのその後

COLUMN 02

ザクIとの試作競合に敗れたツダは、そのエンジンの技術がドムやリック・ドムに用いられた。しかし、空中分解の危険性のある機体は実戦には使えず、EMS-04 ツダは試作機のままで終わるはずであった、だが、逼迫する戦況によりツダはEMS-10と形式番号を改め、戦場に投入されたのである。

▶ EMS-10の形式番号を与えられたツダ。かつての欠点は解決したと言われたが、実際はEMS-04から形式番号を変えただけであった。



▲ EMS-10 ツダは、第603技術試験隊で運用され、プロバガンダにも利用された。

MS-08
REPORT

ザク・シリーズに投入されたジオン公国系MSの基礎技術

MS開発における新技術の模索

ZI-XA3 (MS-01) に始まるMSの開発は、ミノフスキー粒子散布環境下対応兵器という前代未聞の新兵器の実用化を意味した。このためZEONIC社を中心とした公国系企業群や軍技術部は、MSを成り立たせるための様々な基礎技術を生み出した。それが公国軍系MSの根本構造となったモノコック構造や、外部映像認識装置のモノアイ、ミノフスキー物理学の応用によって誕生した、コンパクトかつ高出力の超小型ミノフスキー・イオネスコ型熱核反応炉を代表とする様々な新テクノロジーであり、ザク・シリーズの開発進行と共に成熟の度合いを深めていったのである。

ミノフスキー・イオネスコ型熱核反応炉

ミノフスキー物理学を応用した熱核反応炉で、旧来の反応炉より小型かつ高出力である。原子核反応が行われる炉心内は強力なフィールドが展開されており、反応エネルギーを直接電気として取り出すことができる。ミノフスキー・イオネスコ型反応炉が「ジェネレーター=発電機」と呼ばれるのは、このような特性に因っている。MSに搭載されるのは超小型モデルであり、プロトタイプ・ザク開発時によりやく実用化された。開発生産にはM&Y公社とZEONIC社のほか、ZAS社が関与していた。

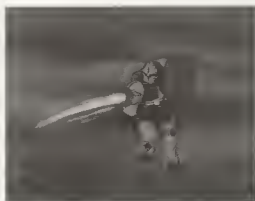


▲熱核反応炉の開発に貢献したため、プロトタイプ・ザク以前に開発された機動兵器は大型化を余儀なくされた。

流体内パルス・システム

流体内パルス・システムとは、公国軍系MSの関節部に組み込まれた、大パワー高レスポンスの駆動装置である。極超音速にもなる伝達速度、システム自体が小型軽

量、電力に変換して伝達するよりエネルギーロスが少ない、わずかなエネルギーで高トルクが得られるといった特徴を持つ。その仕組みは、反応炉で発生したエネルギーをパルスコンバーターでパルス状の圧力に変換した後、数千本の極微細管によって流体パイプに導き、関節駆動用ロータリーシリンダーに伝達するものだった。ザクII S型用と推測される、ハイスピード/ハイパワーモーター(アクチュエーター) YM-ZM210spが流体内パルス・システムのひとつと考えられる。



◀YMS-15ギャンには、流体パルス・システムの発展型である「流体パルス・アクチュエーター」が搭載された。

熱核ロケット・エンジン

熱核反応炉の炉心の熱を用いてプロペラントを噴射する推進システムで、MSのメインスラスターとして多用される。一般的な化学燃料ロケットより出力に優れるほか、熱源を外部に頼るため小型軽量である。そのサイズは、同出力の宇宙艇用ロケットの半分程度と言われている。大気圏内用の熱核ジェット・エンジン、熱核ロケットと熱核ジェットの複合型である熱核ハイブリッド・エンジン、水中用の熱核水流ジェット・エンジンなども熱核ロケット・エンジンの一種である。



▲熱核ロケット・エンジンにはいくつかのタイプがあったようで、EMS-10プラの「土星エンジン」は重元素を推進剤とした。



モノコック構造

装甲外殻によって機体荷重を支える構造。機器は装甲外殻の内部に搭載するため「外骨格式」とも呼ばれる。軽量で機体各部のモジュール化が容易なほか、技術上のハードルが比較的低いといった特徴を持つ。当初は駆動内骨格ことムーバブル・フレームに近い構造も検討されたようだが、当時の技術力では重量問題を解決できず、MS-03から軽量化策として採り入れられたと言われている。地球連邦軍系MSに採用されたセミ・モノコック構造も、モノコック構造の一種であった。



▲スゴックのバグヘッド構造もモノコック構造の一種であり、壁面製や拡張性に優れていた。

超硬スチール合金

公国軍系MSの装甲材に多用された、スチール素材の合金。当時最新のルナ・チタニウム合金と比べて軽量性や剛性に劣るが、コストパフォーマンスに秀でていた。MSの装甲に用いられる場合は基材として使用され、発泡金属、カーボン・セラミック、ボロン複合材、チタン・セラミック複合材などを積層化した構造となる。少なくともプロトタイプ・ザクから装甲材に採用されており、ザクIやザクIIでは61式戦車の150mm連装砲を想定した防御力を得ていた。



▲MS用の火器や砲の直撃以外で撃破されるケースは稀である。内部機器が損傷しても装甲は舞事なケースもあった。

モノアイ

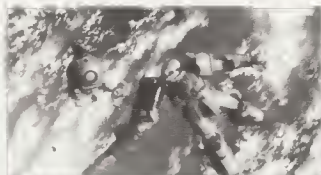
ジオン公国軍系MSに採用された外部認識装置である「MSの目」。外見こそ単一レンズだが、光学カメラを中心に赤外線センサーやレーザーセンサーなどが集束配置された複合センサーシステムで、有視界戦闘を強要されるミノフスキー粒子散布環境では特に有用である。ライトシグナルやレーザー通信装置としても機能も併設されており、受動と能動の双方で使用可能である点も画期的だった。U.C.0030年代後半に開発された機動重機用カメラ・システムを原型とする。

AMC (アクティブ・ミッション・コントロール)

ZEONIC社が開発した、MS用の基本動作を司るシステム。MSの全動作をマニュアル操縦で再現するのは困難なため、状況やパイロットの選択に合わせて、特定動作を自動で行う。これにより兵装の使い分けや、マニピュレーターを用いた作業の難易度が格段に低下した。後に学習機能を追加されたAAMC (アドバンスド・アクティブ・ミッション・コントロール) が開発され、ドム系MSや水陸両用MSに搭載されたと言われる。

AMBACシステム

手脚ユニットを動作させた反作用で、機体の姿勢を制御するシステム。プロペラントを消費しない点が特徴だが、速度を重視する実戦ではアポジ・モーター(姿勢制御バーニア)が併用される。また腕部は兵装を携帯することが多いため、脚部をAMBACシステムの主機として使用する。陸戦用MSでは基本的にオミットされている。



▲陸戦用の機体であるMS-06「ザクII」型の四肢は、AMBACシステムとしては利用できない。



ザクIIの開発と 「狭義のザク」F型の誕生

▼ザクIIに求められた究極の「汎用性」▼

実戦用MSとして完成したザクIは、MSの基本的能力であるミノフスキー粒子散布環境への対応能力や汎用性、五本指マニピュレーターによる高度な作業性などを持っていたが、発展余地が少なく、改良が難しいという問題を抱えていた。そこで来るべき対地球連邦戦争の主力MSとして、MS-06 ザクIIが開発された。

ザクII開発プロジェクトは「MS-05C計画」と命名されても何らかしくないので、実際にMS-05Cとして計画されていたという説も囁かれている。しかしザクI開発部門に予算が集中するのは、公国内の政治力学上問題があったため、新たな型式番号MS-06が付された別プロジェクトとして推進されることになったようである。

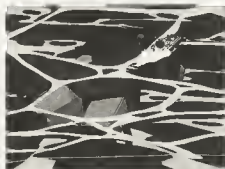
こうして政治的配慮の中で始まったザクIIの開発では、ザクIでの問題点の解決だけでなく「ザクIIならではの」仕様も提示された。このザクIIを体現する仕様こそが、極限までの汎用性追求である。

ザクIIはその外見から、ザクIの単純な性能向上型と思われるがちであるが、その設計思想や内部構造はまったくと言っていいほど異なっている。当然、核反応炉や推進器の出力向上も図られているが、運用性や発展性、汎用性の強化の方が重視されていた。

中でも汎用性への要求が大きく、その背景には公国上層部で決定事項となっていた地球侵攻作戦と、U.C.0076.12に開始された局地戦用MSの開発があった。この結果、ザクIIに求められた汎用性は「想定されうるあらゆる環境に対応する、MSの持つべき汎用性の拡大」という無謀なものだった。しかし国力に劣るジオン公国にとって、単機で多様な環境に

対応する究極の汎用MSは、必要不可欠だと考えられていた。また、当時のMSは「巨大な歩兵」と位置付けられており、人間の歩兵が投入される環境ならば、MSも運用できて然るべきと考えられた点も汎用性が追求される一因となった。汎用性の確保は、ザクIIそのものを全領域に対応させるのではなく、セッティングの変更や小改装、パーツの換装などで達成されることになったが、これはザクIIの構造と密接な繋がりがある。

その構造上の特徴とは、核反応炉を含むパーツの換装が容易なことだった。既に述べたように、ザクIは発展性や拡張性をあまり考慮していない機体であるため、近代化改修による寿命延長が難しかった。そこでザクIIでは、最初から技術発展による改良を見越して、新型部品への交換を前提とした設計が盛り込まれたのだった。これにより近代化改修が容易となったほか、派生型MSの開発も短期間で可能となった。つまり、突出した拡張性も確保されていたのである。他にも、生産地域ごとに調達可能な部品での製造が難しくないこと、代用部品での修理が可能などのメリットがあった。



▲ザクIIの高い汎用性と拡張性は仕様変更による運用地に拡大だけでなく、短期間の局地戦バリエーションの開発にも繋がった。



▼汎用性にも優れ、他機種用パーツの組み込みや試験機への転用が容易な点もザクIIの特徴のひとつであった。

▼ザクIでの問題点の解決▼

ザクIIの汎用性と拡張性を担保したパーツ交換を前提とした構造は、ザクIで指摘された拡張性の低さだけではなく、整備性の問題も一挙に解決した。そして、拡張性と整備性を更に向上させることになったのが、ザクIIとザクIを区別する外見上の特徴



▲ザクIIはザクI以上の拡張性を有しており、専用機には違わぬが、わずかな仕様変更で地球での運用にも耐えた。





である「動力パイプ」だった。

動力パイプは、文字通り動力系やエネルギーサブライヤーを内蔵した管状構造物で、ザクⅠでは内蔵式だったものを、ザクⅡは機体外に露出していた。つまり、独立した動力系が露出しているため、整備性も大きく向上したのである。また、ザクⅠで内蔵していたものを外装式にしたため機体内スペースが広くなり、拡張性も改善されることになった。そして何よりも、外装化によって動力パイプの大型化が可能となった結果、各部への大パワーの供給が可能とした。これは核反応炉やスラスターの出力向上に伴って、機動性もアップさせたのである。

しかし、動力パイプの恩恵はこれだけではない。

高出力化の弊害であり、ザクⅠの稼働時間を短くしていた熱問題も解決したのである。



▲機体外に露出した動力パイプは、弱点となりかねなかった。しかし、ザクⅡはそうした弱点を補って余りある性能を有していた。



■ザクII開発時の問題解決方法■

ザクIIへの要求性能 ザクIでの問題点	解決策
徹底した汎用性の確保	▶パーツ交換を前提とした基本構造
拡張性の向上	▶パーツ交換を前提とした基本構造 ▶動力パイプの外装化による、内部スペースの確保
整備性の向上	▶パーツ交換を前提とした基本構造 ▶動力パイプの外装化による、動力系の独立
高出力化	▶高出力反応炉の搭載 ▶動力パイプの外装化（大口径化）による、パワーサ プライの増設
機動／運動性向上	▶スラスタ・推力の増大 ▶動力パイプの外装化（大口径化）による、パワーサ プライの増設 ▶サブスラスタ、アポジ・モーター（姿勢制御パー ニア）の増設
稼働時間の延長	▶動力パイプへの冷却機構搭載による、熱問題可決

反応炉や推進器、アクチュエーターの出力向上は、機体が発生する熱の増大も意味していた。ザクIでは、推進剤と共に機体に溜まった熱を排出していたが、スラスタ使用時しか排熱できないため、稼働時間が短くなる原因となっていた。また、宇宙では熱を赤外線として放出する放射（輻射）が基本的な排熱手段となるが、これはラジエーターパネル＝放熱板のサイズが冷却性能に直結するため、ザクIでは有効活用されていなかった。

そこでザクIIでは反応炉の高出力化もあって、新たな放熱機能を追加することになった。そのひとつが動力パイプに併設された伝熱／冷却機構で、構造材を中心とした機体各部に熱を分散する手段として用いられた。動力パイプの多機能化が可能となったのは、外装化に伴うパイプの大口径化が大きな理由である。こうして、ザクIIの熱キャパシティが増加したうえ、機体全体、特に広い面積を持つ装甲板全面からの放射が可能となった結果、熱問題を解決、稼働時間の延長に成功したのだった。

■F型への発展と派生型の登場■

最初のザクIIは、U.C.0077.08に生産が開始されたMS-06A ザクII A型である。搭載反応炉は、ZAS社製だったと言われている。A型の誕生直後は、他のザクIIシリーズは存在しなかったため、型式番号の末尾に「A」を付記せず、単に「MS-06 ザクII」と呼ばれた。A型は今日我々が思い浮かべるザクIIと異なり、右肩のシールドと左肩のスパイクアーマーを装備しておらず、両肩にザクI用と同様の球形ア

ーマーを装備していた。すぐにザクII C型の生産が始まったため、84機が生産されただけであつた。

A型に次いで生産されたのが、MS-06C ザクII C型である。U.C.0079.9に先行量産が行われ、翌年1月に量産が開始された。搭載した反応炉はA型同様ZAS社製と言われる。C型は核兵器運用型で、多重空間装甲に減速材を充填するなどの放射線対策が施された結果、大重量化と機動性の低下を余儀なくされた。キシリア・ザビ大佐（当時）の命により、対MS戦を想定したシールドとスパイクアーマーが施されたのもC型で、これはF型やJ型、S型といった系列機だけでなく、一年戦争に開発されたザク系MSにも継承されていた（ザクII以前のEMS-04 ツガも肩部シールドを搭載していたため、史上初のシールド装備MSと言うわけではない）。ザクの外見的特徴が完成したのが、C型と言ってもいいだろう。また、重力下対応になったのもC型以後のことである。C型は「コロニー落とし」への投入が決まっていたこともあり、236機と比較的多数が生産されている。

C型から核兵器運用能力を取り除き、ザクIIの決定版たる汎用MSとして完成したのが、MS-06F ザクII F型である。最も意味を限定した場合の「狭義のザク」が、F型だと言える。C型からの細かい改良点として、コクピット緩衝装置の強化や腕部武器搭載システムの追加、胴体部複合装甲の採用が挙げられる。反応炉は、M & Y公社・ZEONIC社共同開発のMYFG-M-ES系が搭載されていた。生産開始は、一年戦争勃発の約一年前のU.C.0078.12で、以後ズム・シティやア・バオア・クー、グラナダなどの生産施設の80%でF型が生産された。生産数はシリーズ最多の3,000機以上とも、3,246機とも言われている。F型は、名実共にザクのスタンダードであり、宇宙を中心に長らく運用されることになった。

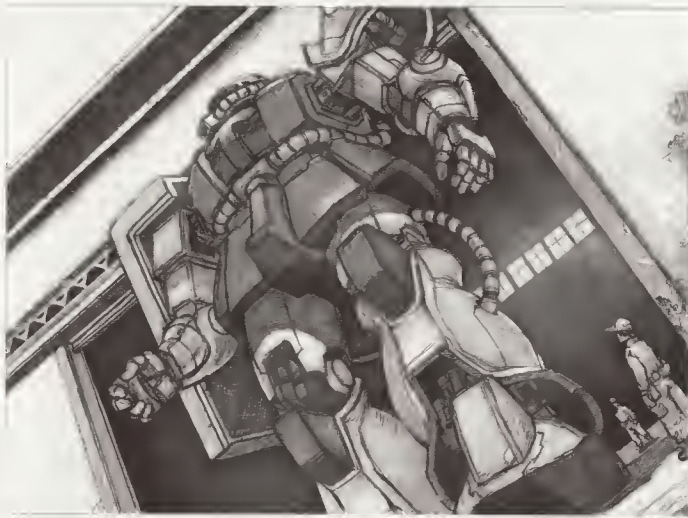
F型は後発のザク・バリエーションのベースとなった。そのバリエーション機の中でも、F型に次ぐ「狭義のザク」と言えるMS-06J ザクII J型は、外見や開発系譜の上の位置付け、配備数や戦果など、あらゆる面でF型と同列に語られるMSだった。J型は別名の「陸戦用ザクII」からも分かる通り、地球上での運用を前提とした機体であるが、F型から宙間運用装備を取り除き、大気圏内用装備を追加したに過ぎ



ない。この際、反応炉はMYFG-M-ES系の空冷型であるJ21-M3ESJ型とされた。つまり、ザクⅡの特徴であるパーツ交換による汎用性および拡張性が、最大限に活かされているのである。J型の生産数を示す資料は少なく、U.C.0078.10の時点でF型の生産ラインを使用して80機が生産されていたとする説が知られるのみである。これは地球侵攻作戦実施後、本格的に生産されたことや、F型から改装されたJ型

が多数に上ったことなどが原因と考えられる。

J型とほぼ同時期、F型を基とした総合性能向上型のMS-06S ザクⅡS型や偵察仕様のMS-06E ザクⅡ強化偵察型も開発されており、F型を中心としたザクⅡの汎用性を証明することになった。こうしてザクⅡシリーズは、シリーズ累計で8,000機以上が生産されたと伝えられている。



ニプロトタイプ・ザクからザクⅡJ型までの変遷ニ

機体名	全高	本体重量	全備重量	ジェネレーター出力	スラスター推力	前身機からの主な改修点
MS-04 プロトタイプ・ザク	17.5m	57.4t	72.5t	953kW	43,000kg	—
MS-05 ザクⅠ (B型)	17.5m	50.3t	65.0t	898kW	40,700kg	<ul style="list-style-type: none"> ▶腕部マニピュレーターの作業半径拡大 ▶火力の充実 ▶生産性の改善
MS-06A ザクⅡA型	不明	不明	不明	不明	不明	<ul style="list-style-type: none"> ▶汎用性の大幅な拡大 ▶拡張性、整備性の向上 ▶機動・運動性の向上 ▶冷却性能の向上
MS-06C ザクⅡC型	不明	不明	不明	不明	不明	<ul style="list-style-type: none"> ▶右腕部シールド、左腕部スパイク・アーマーの追加 ▶核兵器運用能力の追加 ▶重力下運用能力の追加
MS-06F ザクⅡF型	17.5m	56.2t	74.5t	976kW	43,300kg	<ul style="list-style-type: none"> ▶核兵器運用能力の撤去（軽量化と汎用性向上）
MS-06J ザクⅡJ型	17.5m	56.2t	74.5t	976kW	43,300kg	<ul style="list-style-type: none"> ▶前脚運用装備の撤去 ▶大気圏内運用装備の追加

MS-06
REPORT

ザク・シリーズおよび戦後のザク系MSの開発、生産拠点

■ ■ ■



アクシス

■アクシス

●ザクⅢ ●ギラ・ドーガ(原型機)

一年戦争直後、ザビ家の遺児シナ・ラオ・ザビを拠点とする旧ジオン公国軍残存の最大勢力が落ち延びた小惑星基地。U.C.0080年代中期まではアステロイド・ベルトに位置していた。

旧ジオン公国軍残存勢力到着後は軍事拠点として整備され、宇宙産業建造用ドックやMSの生産ラインも整えられ

た。グリプス戦後や第1次ネオ・ジオン戦争で投入されたアクシス(ネオ・ジオン)の機動兵器の多くが、ここで開発されたものだ。

第1次ネオ・ジオン戦争後は地球連邦の管理下に置かれていたが、『シャアの反乱』時にネオ・ジオンに譲渡され、質量弾として地球寒冷化作戦に使用された。結果的にアクシスは地球に落ちなかったが、地球連邦軍ロンド・ベル隊の破壊工作でふたつに分割されている。

■ソロモン(コンペイトウ)

- ザク強行偵察型／●ハイザック先行量産型／
- ハイザック・キャノン／
- バイザックTR-2 [ビッグウィング]

ラグラジュ・ポイント5に建設されたジオン公国軍の宇宙要塞で、ドルズ・ザビ中将の宇宙攻撃軍の拠点であった。ソロモン自体が小惑星転用の宇宙要塞としては比較的小型だったためか、あるいはMSより宇宙艦艇を重視した宇宙攻撃軍の意向に沿ってか、MSに対応した兵器工数はそれほど多くはなく、生産能力は高くなかったようである。

ソロモンで開発、生産されたMSとしてザク強行偵察型が知られるが、これはア・バオア・クーと並行して生産していたととも考えられる。

一年戦争末期、地球連邦軍によって制圧されたソロモンはコンペイトウと改名され、兵器工数は当初、連邦軍主力MSジムの改修などに使用された。以後、地球連邦軍の鎮守府として機能し続けたコンペイトウにも小規模な兵器工数は引き継がれ、コンペイトウで開発されたMSの型式番号には「12」のヘドナンバーが与えられることになった。ザク系MSではないが、RX-121 ガンダムTR-1 [ハイズル] やRX-121 ガンダムTR-6 [ウインドウォーク] がコンペイトウで開発されたMSである。

他にもコンペイトウで開発されたMSとして、YRMS-106 ハイザック先行量産型とその換装バリエーションが挙げられるが、これはガンダムTR-1がそうであるように改装コンペイトウで行ったという意味とも考えられる。

サイド4

L5

サイド1

ソロモン

月

L1

サイド5

地球

■グラナダ

- ザクⅡF2型／●ザクⅡ改／●高機動型ザクR-2タイプ／
- ゲルググ先行試作型／●サイコミュ試験用ザク／
- ハイザック／●マラサイ／●ギラ・ドーガ

一年戦争の終戦で公国に占領された月面基地(月面都市)で、フォン・ブラウン市に並ぶ月の準工業エリア。キシリア・ザビ少将が司令を務めたジオン公国軍突撃機動軍の拠点でもあり、ザクⅡF型直系の発展型や高機動仕様、ニュータイプ用などの高性能機種の開発地でもあった。ザク・シリーズ以外でもニュータイプ用MAやリック・ドム、ゲルググなどの新型機動兵器の開発拠点となっており、一年戦争中はサイド3以上の開発規模を持つことになった。広大な周辺地域や上空はテストエリアとしても利用されており、高機動型ザク・プロトタイプの試験が行われたことも有名である。

一年戦争後はグラナダ工廠が連邦軍の下に置かれたほか、AEの重要拠点のひとつとなっており、AEではハイザックやマラサイなどの地球連邦軍/ティターンズ向けMSや、ザビに代表されるネオ・ジオン用MSの開発、生産も行った。

なおU.C.0080年代を中心とした地球連邦軍MSの内、RMS-106やRMS-108のように型式番号の数字上二桁が「10」の機体は、グラナダで開発されたことを示している。

ア・バオア・クー

■ア・バオア・クー

●ザク強行偵察型

サイド3と同じラグラジュ・ポイント2に建設された、ジオン公国軍の宇宙要塞。MS工場も併設されており、一年戦争開始以前からF型などのザクⅡシリーズの生産ラインが稼働していた。ザク強行偵察型も、ア・バオア・クー内のザクⅡの生産ラインで製造されたと言える。ザク系MSではないが、巨大MAのMA-08 ビッグ・ザムやニュータイプ用MSのMSN-02 ジングもア・バオア・クーで開発された。

一年戦争終戦に伴う武装解除後、資源小惑星としてジオン共和国の管理下に置かれたが、グリプス戦後ではティターンズに譲渡、ルナツー宙域に移送され、宇宙要塞「ゼダンの門」として機能した。一年戦争後も兵器工場は存在しており、ここで開発された連邦軍MSの型式番号には「13」のヘドナンバーが与えられる(例 RX-139 ハンパリア)。

なお「ゼダンの門」となっていた旧ア・バオア・クーは、U.C.0088.01.18、小惑星基地アクシスと衝突、破壊されている。

サイド3

L2

■サイド3(ズム・シティ)

- プロトタイプ・ザク／●ザクⅠA、B型／●ザクⅡA、C、F、J型

MS-01以後の最初期型MSの開発が行われていたジオン公国本国。他サイドでは見られない閉鎖型コロニーとなっているため、秘密裏にMS開発を実施できたうえ、工場の確保も容易であった。

首都である1バンチのズム・シティが開発中心地だったようで、プロトタイプ・ザクからザクⅡの基本シリーズに至る初期のザク・シリーズが生み出されていた。MSの生産ラインも充実しており、ザクⅡ以後、多数の公国軍MSが製造された。

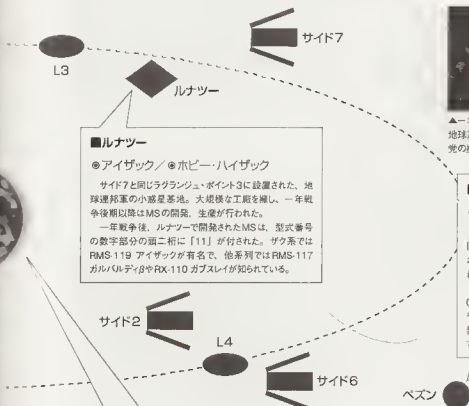
なお洋コロニー「海」は水陸両用MS開発時の重要なテスト地として使用されたほか、21バンチ「リゾンデ」がZEONIC社の兵器試験場となっているなど、MSのテスト環境も充実している。これらの兵器試験に用いられたコロニーも閉鎖型であり、情報漏洩ルートが限定されるのも利点だった。



「最初のザク」であるプロトタイプ・ザクが産声を上げたのは、ジオン公国の首都たるサイド3・11パンチ「ズム・シティ」でのことだった。以後、ズム・シティを中心に行われたザク・シリーズの開発は、一年戦争の開戦により、月面基地グラナダや地球のキャリフォルニア・ベースでも行われるようになった。生産拠点も当初のサイド3本国や宇宙要塞A・バオア・クー、グラナダから地球へと拡

大し、宇宙、地上を問わず様々な場所でザク・シリーズが生産されたのだった。

一年戦争終戦と共にザクⅡの生産も終了したが、地球連邦軍やアナハイム・エレクトロニクス社、旧公国軍残党勢力最大の拠点アクシズなどでは、ザクの系譜に属する新型MSの開発、生産が行われており、地球圏だけでなく小惑星帯でもザク系MSの開発生産が続けられた。



■ルナツー

●アイザック／●ホビー・ハイザック

サイド7と同じラグランジュ・ポイント3に設置された、地球連邦軍の小惑星基地。大規模な工廠を擁し、一年戦争後期以降はMSの開発、生産が行われた。

一年戦争後、ルナツーで開発されたMSは、型式番号の数字部分の頭二桁に「11」が付された。ザク系ではRMS-119 アイザックが有名で、他系列ではRMS-117 ガルバルディオンやRX-110 ガブレイが知られている。



▲一年戦争の終結により、ジオン公国軍の保有していた生産ラインは、地球連邦軍に接収され、生産はストップした。しかし、ジオン公国軍残党の拠点などでは一部の生産ラインが戦後も稼働していた。

■ベズン

※L4帯域に存在したが、ベズンの反乱で消滅

●アクト・ザク

ラグランジュ・ポイント4に設置された小惑星基地。ジオン公国軍が「ベズン計画」と呼ばれるMS開発プロジェクトを進めており、その中で高性能かつ生産性に優れたアクト・ザクが開発されている。

一年戦争後、地球連邦軍の手に渡ったベズンでは、U.C. 0095.03に敵連邦軍が占領されたほか、RMS-141 セク・アインやRMS-142 セク・ツグアイといった「14」ナンバーのMSが開発された。しかしU.C.0088.03.07、ニューティサイズを名乗って反乱を起こした敵連邦軍によってベズンは破壊されてしまった。

■キャリフォルニア・ベース

●ザク・デザートタイプ／●ザク・キャンノ／●ザク・スナイパータイプ

北米大陸に建設された地球連邦軍の複合軍事施設。一年戦争でジオン公国軍に制圧された後、既存の工廠がMSの生産ラインに転用された。主に陸戦用や水陸両用などの局地戦用MSが開発、生産拠点であり、ザクおよびザクⅡの「V」エディションではザク・デザートタイプやザク・キャンノ、ザクI スナイパータイプなどがキャリフォルニア・ベース製である。

■中央アジア

●一般作業用ザク

地球侵襲作戦の第1次降下作戦の舞台となった地域。地球では最も初期からMSが運用されていた地域のため、ザクIやザクⅡの倉庫パーツなどを使って一般作業用ザクが製作された。

■アフリカ (北アフリカ)

●ザク・タンク (現地改修)／●デザート・ザク (一年戦争後に現地改修)／●デザート・ザク・ロンメルカスタム (現地改修)

ジオン公国軍が欧州政府の足掛かりとした地域で、地中海沿いの乾燥・砂漠地帯には多数の局地戦用MSが送り込まれた。地球侵襲作戦で補充部隊が降下し、戦後には旧ジオン公国軍残党が潜伏、活動したエリアでもある。現地改修によって、ザク・デザートタイプの発展型やザク・タンクなどが生み出されている。

■ボルネオ

●ザク・タンク「グリーン・マカク」(現地改修)

ジオン公国軍の第3次降下作戦8ポイントの部隊が、展開した東南アジアの島々のひとつ。ジャングル地帯での移動に対応するため、長大な脚部を持つザク・タンク「グリーン・マカク」が開発されている。

■東南アジア

●ザク・タンク (ザクベース、現地改修)

第3次降下作戦のAポイントの部隊が展開したエリアのひとつ。ジャングル地帯にジオン公国軍の小規模拠点が点在していた。その小規模拠点のひとつは、ザクIを転用したザク・タンクが見られた。

■ジャバロー

●ザク・マリナー／●ザク・ダイバー

グリス戦役初期までの地球連邦軍の拠点。露城不高を誇った巨大地下基地で、RX-78 ガンダムに代表される地球連邦軍初期のMSの大半は、ここで開発された。

一年戦争後も兵器工廠は稼働しており、ジャバロー製MSには型式番号の数字部分の頭二桁に「18」か「19」が付されている。水中用ザクの発展型であるRMS-192M ザク・マリナーとRMS-198M ザク・ダイバーが、ジャバローで開発されたザク系MSとして知られる。

ザクⅡF型の構造と
兵装システム

▼F型の基本構造▼

ザクⅠで実用化された巨大人型兵器という兵器カテゴリーを、汎用性や拡張性などの面で洗練させたザクⅡは、ザクⅠに技術的な基盤を置きながらも、「想定されうるあらゆる環境に対応する、MSの持つべき汎用性の拡大」という軍部の要求に応えるため、いくつかの新機軸が盛り込まれた。この結果、ザクⅡの決定版として完成したザクⅡF型は、MS-09 ドムやMS-14 ゲルググなどの後発機と比べてカタログスペックで劣っているが、後発機に継承されたジオン公国系MSの特徴を現している。

ザクⅡの技術的特徴として、ザクⅠから継承されたジオン公国系MSの基本的テクノロジー——モノアイ、流体内パルス・システム、ミノフスキー・イオネスコ型熱核反応炉、熱核ロケット・エンジン、モノコック構造など——と、ザクⅡから導入された外装式大口径動力パイプや換装が容易な各部位のモジュール化などが挙げられる。つまり、センサー系や動力系、駆動系や推進系などの基本システムはザクⅠの時点で完成しており、ザクⅡ型ではそれをフラッシュアップすると同時に、行動時間延長や汎用性向上の面で独自設計が施されたということになる。

特に、以後のMS-06系MSの母体となったF型に顕著なザクⅡの特徴は、上述のモノコック構造と外装式動力パイプおよびモジュール化と密接な関係がある。モノコック構造とは、装甲外殻で機体荷重を支える機構のことで、支持架と装甲の機能を併せもつ「外骨格」とも換言できる。モノコック構造の長所として、技術的ハードルが比較的低いほか各部位をモジュール化し易いこと、軽量性に優れる点などが挙げられる。短所は装甲外殻のサイズで容積が決定するため外部拡張性が低くなること、装甲の破損状況が機体強度に直結してしまうことなどである。

当初からザクⅡでは、熱核反応炉やスラスタ、サブユニットなどを換装可能とすることで高度な汎用性を確保しようとしていたが、容積が先に決定されるモノコック構造の欠点は、それと相反する要素だった。そこで、エネルギーサプライヤー兼伝熱／

冷却システムである動力パイプの外装化によって装甲内部の容積を確保したうえ、技術発展による部品交換を前提とした設計などが施されることとなった。これを徹底されたF型は、小規模な改装で陸戦用のJ型や総合性能向上型のS型に改装可能となったほか、R型こ高機動型ザクなどのハイエンド機のベースにもなり得たのである。

内装式が再評価されたため、外装式動力パイプ採用の新型MSは一年戦争終戦までほとんど見られなくなったが、公国軍系特有の丸みを帯びた意匠は以後の公国軍MSにも受け継がれている。公国軍系MSの滑らかなシルエットは、復古主義的傾向が強いジオニズム文化運動の一端であるだけではなく、防御力の向上が見込める避弾径始という形状ともなっている。これは直線的ラインで構成された地球連邦軍系MSと比べて生産性に劣るとされるが、ザクⅡの頭部に命中した150mm戦車砲弾を跳弾させたというエピソードからも有効性が確実視されている。

またF型では、耐弾性の向上と対MS格闘戦能力付与のため、C型で採用された右肩部シールドと左肩部スパイクアーマーを標準装備している。F2型やFZ型、S型やJ型などのF型直系機だけでなく、戦後のザク系MSにも見られる象徴的装備となった。特にシールドは、C型からの耐放射線装甲撤去により事実上の装甲減となったF型にとって重要な装備で、内装式対物火器を搭載しないF型でもよほどのことがない限り取り外されなかった。

これらの機構を持つザクⅡは、MSに分類される兵器だが、宇宙では航空機やスペースボート、ジャンプ中やコロニー内での飛行中は航空機、陸上では地上車両という側面も持ち合わせている。このため標識灯を備えるほか、車両規格や旋回限界半径といったインシグニアが記載されるなど、国際法によって義務付けられた緊急装備や標識も施されている。非戦闘時のAFVにウィンカーや車幅灯、バックミラーはナンバープレートなどが装備されるように、戦場の新たな主となったMSも「乗り物」である以上、遵守すべきルールが存在し、ジオン公国軍がそれに則っていたというも何処か微笑ましく感じられる。

ここではこのF型をメインに、F型に次ぐ「狭義のザク」であるJ型を含め、頭部や腕部といった部位や



機器レベルの解説をしていく。

▼センサーの集合体たる頭部▲

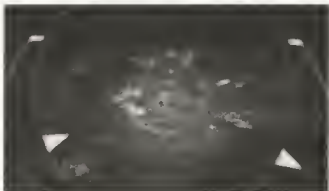
メインカメラや航法装置などのセンサー系を集中的に設置したユニットで、F型用の代表的なモデルとしてZA-H06/S.U372が知られる。

ザクⅡは、巨大戦術歩兵という位置付けから人間を模したスタイルを持つが、頭部ユニットは人間のそれとは異なる形状と機構を持っている。これは人間の脳に当たるパイロットとメインコンピューターが、胴体内に存在することなどが理由で、ザクⅡの頭部にはセンサー類やサブシステムなどが搭載されている。

ザクⅠからの改修点として、艦艇からのカタパルト射出に対応する高性能ナビゲーション・システムの追加、動力パイプ外装化による内部容積の確保と冷却性能の向上、後頭部マルチスレッドアンテナの廃止、正面プロテクティスビーム（モノアイ正面の保護バー）の撤去などが挙げられる。特にプロテクティスビームの撤去は、モノアイの性能を十全に引き出すのに役立っており、モノアイ自体の性能向上もあって優れた索敵・視認能力を獲得している。

正面プロテクティスビームがなくなったため、モノアイ周辺の耐弾性が低下したように見えるが、モノアイ用ガラスカバーの強度は極めて高くなっている。その耐弾性は、戦闘機用のバルカン砲程度の攻撃に耐えられるとされている。これに加えて、モノアイ・レール左右のプロテクティスビームは残されているため、総合的な耐弾性はザクⅠを大きく上回っていると考えていい。

このように耐弾性も考慮されたザクⅡのモノアイは、グラモニカ社製のメインフレームを中心に、カ

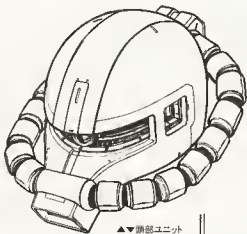


▲モノアイには光学カメラだけでなく、赤外線装置なども搭載されていた。そのため、夜視などでも有効な機器であった。

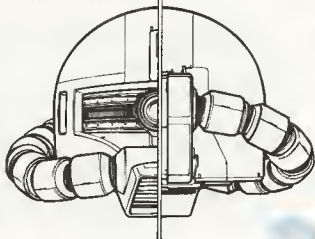
ノム精機の光学装置とフェリペ社のセンサーを組み合わせたものである。ミノフスキー粒子散布環境用外部認識装置としての機能は標準的なもので、光学カメラを中心に、赤外線センサーや光信号装置、レーザー通信にも応用できるレーザーセンサーなどが集束配置されている。MS用火器の照準機とリンクし、命中精度を向上させる機能も持ち合わせているようである。J型用頭部として知られるZA-H06/J.U011のモノアイは、これらの機能に加えて大気



▲モノアイは、ザク・マシンガンなどの火器の照準機とリンクできた。これにより、MSは高い射撃能力を確保していた。



▲▼頭部ユニット

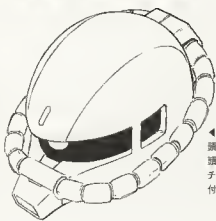


應用の調整が行われており、大気存在を前提とし、赤外線センサーも強化されている。モノアイ・レールの走査域は左右合わせて約180度に過ぎないが、首の可動範囲と機体各部のサスカメラを併用することで、理論上あらゆる方向を監視可能であった。

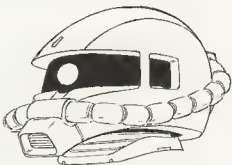
ザクⅠから継承された機構としては、頭頂部のメンテナンスハッチが挙げられる。これは後頭部の動力パイプ基部をヒンジとして、モノアイ直上の庇(ひさし)部分までが開放される機構であった。頭頂部中央左右のラインがハッチの分割線になっているが、生産拠点や生産時期の違いから、メンテナンスハッチが確認できない機体も存在する。

顔面オプションとして、ザクⅠB型から採用された指揮官機用のマルチスレードアンテナも受け継がれている。マルチスレードアンテナ装備のザクⅡはS型というイメージがあるが、F型とS型を見分けるのは難しく、アンテナ付きのF型がS型と誤認されるケースも多かった。一般にマルチスレードアンテナは通信機能強化機能を持つが、アンテナ機能のな

いモデルも存在すると言われる。これは文字通りの「角飾り」で、隊長機識別標としてのみ使用された。



◀ザクⅡ型(JC型)の頭部を斜め上から見た図。頭部中央のスリットはマルチスレードアンテナの取り付け用のものと思われる。



▶斜め前方より見た図。マルチスレードアンテナ用のスリットの横のラインから、頭部装甲が閉鎖される。

MS-06
REPORT

マルチスレードアンテナのバリエーション

COLUMN 05

マルチスレードアンテナと言うとザクⅡS型のものがあるが、F型やJ型だけでなく、ザクⅠB型やMS-14ゲルグも同タイプを装備することから、一般に一種類しか存在しないと考えられている。しかし実際には、ザク・シリーズ用だけでも多種多様なマルチスレードアンテナが存在しており、S型用と同じように見えるFS型用も、特殊なタイプとなっている。ここに付し



▲マルチスレードアンテナには幾つかのタイプがあったようである。このザクⅡ改は細長いタイプを装備しており、これは他のザクⅡには見られない。

た表は、マルチスレードアンテナのタイプとそれを搭載するザク・シリーズを記したものであるが、これ以外にも様々なタイプが確認されている。特殊タイプとして有名なものが、ザクⅡRP型の後頭部垂直型や、エリック・マンスフィールド中佐のザクⅡR1A型の左側面垂直型、マサヤ・ナカガワ中尉のザクⅡR1A型の頭頂部垂直型などで、高機動型ザク・シリーズに多く見られた。



◀マルチスレードアンテナは指揮官機を示す意匠としても引き継がれ、ネオ・ジオンのグラードンにも装備された。

■ マルチスレードアンテナの種類と搭載機種 ■

アンテナのタイプ	搭載MS、同系機(アンテナの搭載MS)
Type MC114H	ザクⅡS型、ザクⅡF型、ザクⅡJ型、ザクⅠB型など
Type F-128Z	高機動型ザク、ザクⅡFS型
Type G9HSD	ザク・デザートタイプ(単角仕様)
Type MH8-512	ザクⅡF型(ドズル・ザビ機)
Type A-01b	ザク・キャノン(単角仕様)?
Type V12sc	ザク・キャノン(ラビットタイプ)



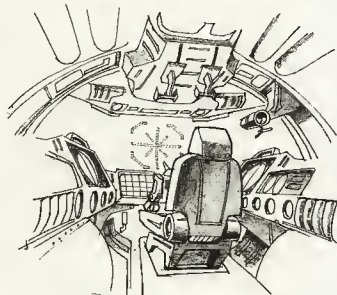
MSI ▼コクピットや動力源が集中したメインユニット▼

胴体ユニットは全高約6m、全幅約4m、前後長6m弱と比較的小型だが、小型かつ大出力のミノフスキー・イオネスコ型熱核反応炉や、科学反応ロケットを上回る推進力を発揮する熱核ロケット・エンジン、そしてパイロットが乗り込むコクピットなどが配置された中央モジュールである。F型の代表的胴体ユニットとして、ZA-B06/フ56-MYFG-M3ESというモデルが知られる。

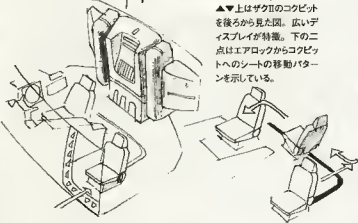
F型の胴体には、M & Y公社とZEONIC社が共同開発したMYFG-M-ES系フ56-M3ES型反応炉/ジェネレーターが搭載された。球に近い形状のミノフスキー・イオネスコ型熱核反応炉とされ、単独での発電能力を持っている。976kWの出力を発揮するこの反応炉は、メインスラスターである背部熱核ロケット・エンジンや、全備重量74.5tの巨体を駆動させる流体内パルス・システムのパワーソースであると共に、機体内で使用される電力をまかなっており、ザクⅡF型の心臓部と言えた。反応炉は下腹部に内蔵されており、余剰となった熱は動力パイプを介して機体全体に分散される。このためオーバーヒートになる可能性は低く、ザクⅠより連続稼働時間が長くなっている。

炉心で発生した熱を用いて推進剤を加速、推進力を得る熱核ロケット・エンジンは、ランドセルに2基が内蔵されている。F型が搭載するのは、一般的な二剤型ロケット・エンジンに区分されるもので、長距離巡航運用では水素やガス状の酸素などを、近接戦闘時にはアルミニウムや珪素化合物などを推進剤と

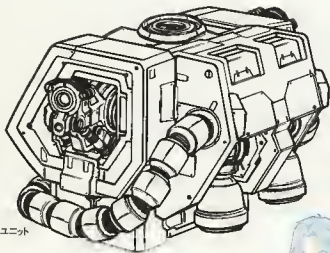
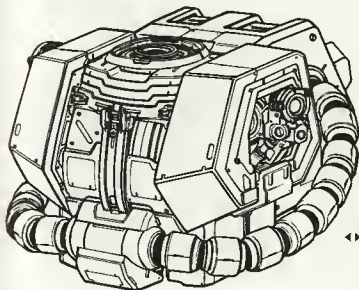
して使用する。近接戦闘用推進剤が比較的重いのは、MS戦を想定した噴射速度では、燃焼ガスが重い方が高効率なためである。なお背部熱核ロケット・エンジン用の推進剤は、ランドセル上部に内蔵されたプロペラントタンクに充填されている。こうして得られたF型のスラスター推力は43,300kgに達しており、AMBACシステムや脚部の駆動性と併用することで、宇宙空間では戦闘機に匹敵する機動性を、重



▲▼上はザクⅡのコクピットを後ろから見た図。広いディスプレイが特徴。下の二点はエアロックからコクピットへのシートの移動パターンを示している。



◀▶胴体ユニット



力下では数km級のジャンプ力を発揮した。一説には最大噴射時の旋回半径は70mで、この際の重力加速度は11.6Gと言われている。

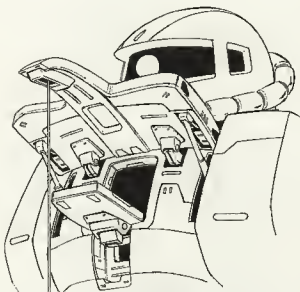
反応炉や主推進器と同等以上に重要な部位が、F型の管制を司るコクピットである。右胸に内蔵されたコクピットは、正面が装甲で覆われているうえ、覗き窓もないため直接視界を得ることはできない。このため、モノアイや機体各部のセンサーで得た情報が補正され、コクピット内壁のディスプレイに投影されるようになっている。

F型用コクピットは正面の湾曲式大型ディスプレイと複数のサブモニター、同じ基部から分枝した2本の操縦桿などから成るタイプである。統合整備計画以前のコクピットとしてはスタンダードなモデルで、コンピューターやAMC（アクティス・ミッション・コントロール）の支援により、MSを操縦するのに十分なデバイスが揃っている。むしろスタンダードでないのは、その乗降方法である。

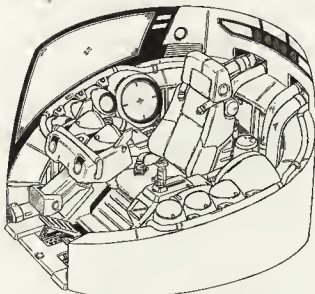
開発者の意図は不明だが、F型では乗降用として左胸部に独立したエアロックが設けられており、パイロットがシートに着くとエアロックでの加減圧後、シートごとコクピットに移動するようになっている。後発のMSには独立エアロックは採用されておらず、ザクⅡシリーズでも最終生産型のFZ型で廃止されており、F型直系機やF2型までの過渡期的なギミックだったといえる（FZ型のように直接乗降するタイプを、ダイレクトインと呼ぶ）。

ただし緊急脱出時にはエアロックは通過せず、胸部装甲の強制排除後、射出シートのロケットモーターが点火、シートごと安全距離まで撃ち出される。当初このような脱出機構は採用されておらず、一週間戦争やルウム戦役で多数のベテラン将兵を失った反省から、高機動型ザクで採り入れられたものだった。このため初期のF型に脱出装置はなく、後に射出シート式コクピットが装備されることとなった。

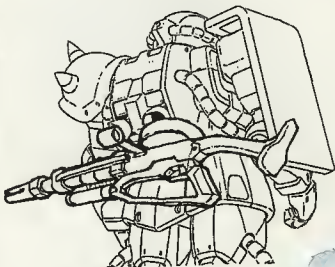
こうした改良により搭乗員の生存性を向上させたF型は、それ以前から防御面に配慮していた。F型が画期的だった点は、胴体のみとはいへ複合装甲を採用したことである。これはC型からの核兵器運用装備撤去に伴い、多重空間装甲が廃止されたことによ



▲座艀用ザクの胸部ハッチの裏には、パイロット乗降用のワイヤーが内蔵されていた。



▲ザクのコクピットにもいくつかのバージョンが存在していた。上の図は、F型をベースとしたもので、J型などに採用された。



▲腰の後部にはマウントラッチを備えており、各種兵装をマウントして携行することもあった。



る処置で、軽量性と耐弾性の両立に成功することになった。ザクⅡは超硬スチール合金を基材とする多層式装甲を採用することで、車載バルカン砲は当然のこと61式戦車の150mm砲にも耐え得る防御力を持っているが、複合装甲の採用は総合的防御力を更に向上させたのである。

胴体部の防御力を担保しているのは、複合装甲だけではなく。比較的脆弱な脚部基部を保護する、腰部スカートアーマーがそれである。また、スカートアーマーが脚部の動作を阻害しないようにするため、ヒンジ式の基部と前部2枚、側部2枚、後部1枚から構成される分割構造を採用し、さらに硬質ゴム製のモデルを開発するなどの工夫がなされた。パーツ交換が容易で、拡張性に秀でるザクⅡならではの処置と言えるだろう。また、スカートは表面積が広いこともあって、装備類を搭載するマウントラッチも設けられている。代表的なものとして、ヒート・ホークなどを搭載できる側部ラッチ、ザク・バズーカに代表される大型火器も搭載可能な後部ラッチがある。スカートアーマー表面に予備弾倉を搭載することも可能で、重装化や戦闘行動時間延長の一助となった。

J型用の胴体ユニットとして知られるZA-B06/J21-MYFG-M3ESJも、基本構造はF型用に準じている。ただし内装機器のいくつかは大気圏内専用となっており、反応炉は空冷式のMYFG-M-ES系J21-M3ESJ型となったほか、推進器も最大戦闘機動時以外はほとんど使用されないためノズルが小口径化されている。他にもインテークの内部構造や燃焼室、フィルターなどを大気圏内対応型に換装し、歩兵の肉薄攻撃を警戒して接近防御兵器が追加された。ダイレクトイン式コクピットに換装した機体も多く見られた。



▲ランドセルに内蔵されたスラスターは、主に宇宙での推進に使用された。しかし、重力下でも十分な推力を発揮し、ジャンプなどの短距離移動に用いられた。

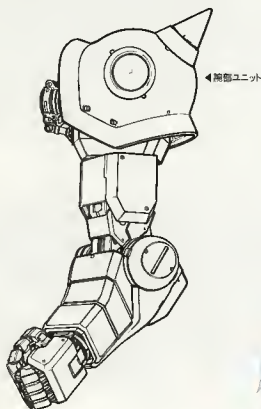
兵装の運用と作業性能を司る腕部

ザク・マシンガンに代表される兵装の使用や、スペース・コロニーのハッチ開閉用ハンドルの操作など、人間が手で行う大半の作業をこなす腕部ユニット/五本指マニピュレーターとして、F型用のZA-A06/F.U6.4/J.Cなどが知られている。

五本指マニピュレーターと前腕、上腕と肩などで構成された腕部ユニットは、ザクⅡの全部位の中でも最も人間のそれに近い部位で、その器用さは人間と同等以上とされる。ただし、腕部ユニットの人間の動作は、パイロットの腕の動きをトレースしているわけではない。基本動作はMSのメインコンピューターとAMCが司っており、パイロットはAFVや航空機、作業重機と似た感覚で操作できるのである。

F型で武器搭載システムが追加された以外、ザクⅠからの大きな変化はない。だが、ザク・マシンガンやザク・バズーカなどの仕様が異なる火器を操るだけでなく、火器とは別次元の動作を必要とするヒート・ホークすら使いこなすなど、驚異的な汎用性を誇る機器であった。

これら火器類の命中精度を維持したり、ヒート・ホークの刃を赤熱化したりできるのは、掌部に兵装とのリンクデバイスやエネルギーコネクタが設置されているためである。このシステムはビーム兵器でな



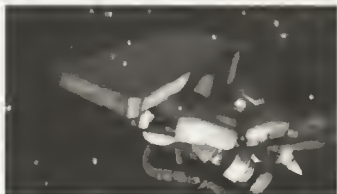
れば他機種用の兵装も流用可能で、ジャイアント・バズやビート・サーベルといったジオン公国軍MS用装備だけでなく、地球連邦軍MS用のシールドを使用できたという（性能を十分に引き出せるかは疑問が残る）。兵装の運用だけでなく、前線におけるMS用火器の分解組み立て、パワーシャベルなど重機代わりの重作業、コロニー外壁への機器設置・接続といった精密作業まで可能であり、これに匹敵する作業性能を持つマシンは存在しない。人間の腕と異なり、手首や上腕を360度旋回する点も高度な作業性を担保している。

腕部、特に手部の補助的機能として、ハンドシグナルがある。手部を中心とした動作で意思疎通を行なうハンドシグナルは、伝えられる情報量こそ限定されるが無線封鎖時や会話するまでもない情報の取り取りに有効であり、擬人化を推し進めたMSの特徴的通信手段として認知されている。

ただし、機械としての手部＝五指指マニピュレーターは、MS用機器の中で最も繊細かつ生産性が悪いユニットといえる。このため、初期には部品供給の問題から複数のバリエーションが並存していたが、F型の生産が本格化すると統一も進んだ。その後、統合整備計画仕様の統一マニピュレーターが登場する



▲MSのマニピュレーターは、火器や格闘兵装など、種別が異なる兵装を使いこなすことが可能であった。これはMSの汎用性の高さにも繋がった。

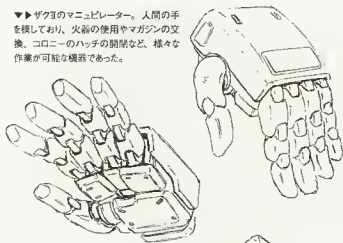


▲右肩部に装備されたシールド。数十センチもの厚さを持ちシールドは61式戦車の砲弾を跳ね返すほどの防御力を有していた。

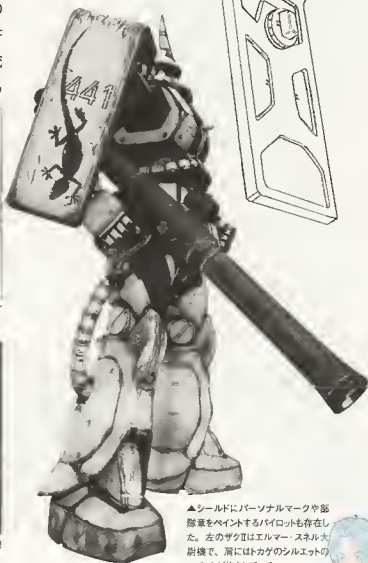
が、F型仕様のマニピュレーターはシーリング処理が施されJ型にも転用されるなど、多くのザクIIシリーズで用いられた。

このように高い機能性を持つ腕部を動作させているアクチュエーターは、ザクIから継承した流体内バルス・システムである。高レスポンスかつハイパワ

▼ザクIIのマニピュレーター。人間の手を模しており、火器の使用やマガジンの交換、コロニーのハッチの開閉など、様々な作業が可能な機構であった。



►シールドの裏面には肩との接続用のマウントが設けられている。耐弾性を向上させるため、複数の装甲材による積層構造を採用していた。



▲シールドにパーソナルマークや部隊章をペイントするパイロットも存在した。左のザクIIはエルマー・スネル大尉機で、肩にはトカゲのシルエットのペイントが施されている。



な流体内バルス・システムは、精密作業と重火器の運用を同時に行わなければならない、MS用腕部ユニットに適した駆動機構と言えるだろう。

人間の腕を模倣したザクⅡの腕部ユニットだが、独特の部位も設置されている。それがC型以後の汎用型ザクⅡに多く見られる、右肩部シールドと左肩部スパイクアーマーである。F型やJ型のシリーズにも搭載されている、ザクⅡの特徴的パーツである。共に対MS格闘戦で、地球連邦軍のMS投入を警戒して装備されたものだった。

スパイクアーマーは、ザクⅠで採用された球形肩装甲をベースに3本の円錐型の鉄杭を追加したもので、主に体当たり時の破壊力増強を意図している。ザクⅡのパワーとスピードに、全備重量70tを超える質量が加わることで想像を絶する威力を発揮するが、突進を前提とすることや、ヒート・ホークの方が、自由度が高いためか使用例は少ない。ただし熟練パイロットであれば、肉薄状態から敵MSへの突き飛ばし、さらには格闘攻撃の間合いの外から急速接近後、体当たりをしかけることなども可能であった。

右肩に懸架されたシールドは、ザクⅡ用装甲の中でも最高度の耐弾性を誇る。61式戦車の150mm砲を難なく跳ね返しただけでなく、MS用火器の誘爆からの機体を守ったというエピソードからも、その装甲防御力を窺い知ることができよう。また、地球連邦軍のRX-79[G]Ez-8 ガンダムEz-8が至近距離からマゼラ・トップ砲の直撃を受けた際、ザクⅡ用シールドを転用した胸部装甲に命中したが貫通せず、パイロットも無傷だった逸話も、ザクⅡ用シールドの性能を物語っている。

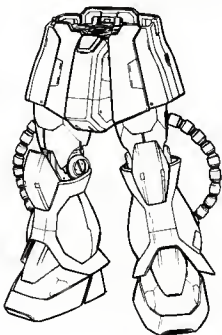
ザクⅡ用シールドの副次的な使用方法として、表面に部隊章や部隊／機体ナンバー、パーソナルマークや標語などが描かれることも多かった。これは軍の正式なものだけでなく、部隊や将兵個人の判断で行われたケースも少なくないと言われる。

▼AMBAC肢兼重力下用歩行機構の脚部▲

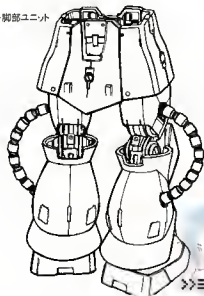
重力下で艦艇デッキ内での歩行用、メインのAMBACシステムとして機能するユニットで、代表的なF型用としてZA-L06/F.U8.2が知られる。

最初から高度な汎用性を要求されていたMSは、

宇宙とコロニー内の双方に対応する必要があった。このため、ZEONIC社はMSに重力下での歩行と宇宙空間でのAMBACシステムを司る脚部を採用していた。ザクⅡの脚部は、駆動システムに流体内バルス・システムを採用し、大腿部と腰部、足部に分割された構造を持つなど、腕部ユニットと似た構造となっている。ただし、精密マニピュレーターとしての機能が求められる腕部と異なり、脚部はあくまでも重力下での歩行と、AMBACシステムの主機としての機能が重視されており、比較的堅固な構造となっている。つまり構造上の類似点こそあるものの、機動・運動性を司るという、腕部ユニットとは異なる特性を与えられているのだ。このためザクⅡの脚部には指部は採用されていないが、足部を爪先側と踵側に分割して歩行時の重心移動を容易にしているほか、足底に着艦用マグネットを装備するなど、簡易足指といえる機構は採り入れられている。



▲▶脚部ユニット



ザクⅡ脚部ユニットの外見的特徴は、頭部や胴体と同様に外装化された動力パイプである。動力パイプの外装化は、大腿部と腰部側面に開口部を設けることで達成されている。しかし、これはモノコック構造の装甲外殻に穴を開けることになるため、重力下での運用時などで強度不足が懸念された。そこでザクⅡの脚部には、外部に装甲外殻を、内部はブロック化したコンポーネントを組み合わせることで荷重を分散する「モノコック／擬似内骨格構造」が採用されたとも言われている。

これによりザクⅠより内部スペースに余裕ができたため、駆動装置の高出力化だけでなく、足底スラスターの強化（増設）や姿勢制御用兼推進補助用の腹腰部サススラスターの増設、大腿部プロペラントタンクの大容量化などが可能となった。ドム系やゲルググ系と比べると目立たないため顧みられることは少ないが、足底スラスターはMS用の初期型偏向推進器であるほか、熱核ホバー走行システムのルーツとしてMS開発史における意義は大きい。ただしF型用の足底スラスターは基本的にジャンプや歩行／走行時の補助用で、宇宙での使用頻度は低かった。



▲AMBAC 該としても用いられる脚部は、歩行以外にもその可動域の広さと大質量によって格闘攻撃も用いられるケースも散見された。



▲MSにはオートバランサーが搭載されているため、高い不整地走破性能を持つが、視界が悪い場合や障害物に乗り上げた場合は転倒することもある。



▲左はJ型の背面図である。ランドセルのスラスターはそのままだが、ふくらはぎ部のスラスターが排除されていることが分かる。同じザクⅡでもタイプによって細部に違いが見受けられる。

▲上はザクⅡJ型の足底部。F型にあった足底部のスラスターは撤去され、代わりにグリップ性能を高めている。

宇宙用機器やAMBACシステムとしての機能を撤去されたJ型用脚部ZA-L06/J.U.2.3にも足底スラスターは設置されており（スラスター無しのタイプも存在する）、ホバー走行には至らなくともジャンプ時における有効性を示した。腹腰部サススラスターの撤去によって余剰スペースができたためか、フット・ミサイル・ポッドなどを接続可能な1/0ポートが増設されている。この脚部ユニットにより、J型の地上歩行速度は65～162kmにも達した。

このように多機能機器として完成を見たザクⅡ用脚部ユニットは、他のモジュールと比較しても長大かつ大質量である。これは脚部ユニットがAMBACシステムの主機に位置付けられているほか、重心を高くすることによって安定性を低下させ、重力下における運動性を高める狙いがあると思われる（キック力が増大する副次効果もあった）。実際、向きを変えずに前後左右あらゆる方向に移動可能なうえ、「サイドステップ」「飛び退く」「屈む」といった独特の機動を可能とする脚部は、負の安定性と相まって装輪／装軌車両を超える運動性を発揮したのである。

負の安定性は、F型やJ型でも設置されたポジショニングセンサーや重力下用姿勢制御システムで対応できるため、それ自体は大きな問題となっていない。しかし関節部の消耗は決定的な解決策が存在せず、徹底した擬人化ゆえの弊害として残り続けた。





MS用兵装の模索と人間用を 模したザク・シリーズの装備

■三種類から成るザクⅡの基本兵装■

開発初期からMSはマニピュレーターでの大型火器使用が前提となっており、MS-04 プロトタイプ・ザクの開発に合わせ、MS用火器も具体的な形で出現し始めた。MS開発の中でMS用兵装の模索が続けられ、ザクⅡF型ロールアウト時には一応の完成を見ている。

F型に代表される汎用型ザク用として開発された兵装は、大半がマニピュレーターで使用する、いわゆる「手持ち式」である。代表的なザク用火器として、ザク・マシンガンなどの機関砲、ザク・バズーカのようなロケット・ランチャー／無反動砲、格闘兵装であるヒート・ホークが実用化され、標準装備として採用された。これらの兵装、特に火器類に求められた機能は、対艦／対拠点用の大火力だけでなく、宇宙での運用に対応した無／低反動である。ロケット・ランチャー／無反動砲は、発射後にロケット弾自体の推進剤を使用して加速させ、発射反動を相殺するガスを噴射することで要求を満たせた。しかし、問題は機関砲タイプだった。

当初ZEONIC社火器開発部門は、MS-04用としてZXM-1試製マシンガンを開発したが、これは従来の100mm速射砲を改装したもので、重量や発射反動が大きく、操作性や信頼性にも問題を抱えていた。これを受けて開発されたものが、従来のガス圧・反動式発射サイクルとは異なる、電気作動方式の機関砲を持つZMP-47D 105mm／120mmザク・マシンガンであった。ザクⅡ用として制式採用されたZMP-47Dは、発射サイクルを電氣的に制御できるため反動を制御しやすいというメリットがあり、給弾方式をトップローディング式（機関砲の上にドラムマガジンを搭載する方式）に改めたZMC38Ⅲ／M-120A1 120mmザク・マシンガンなど、以後のMS携行用機関砲の雛形となったのだ。

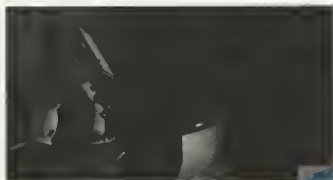
これらザク・マシンガン系火器の特徴のひとつが、金属薬莢式の砲弾を採用していることである。後発の地球連邦軍系MS用マシンガンが、排莢の必要がない燃焼薬莢式弾薬（ケースレス弾）を多用したの

は、宇宙空間でのデブリ発生を防ぐと共に、慣性制御の容易とする意図があった。宙間運用ではケースレス弾の有効性は特に高いが、MS用マシンガン本体の構造の複雑化や重量増大、前線における弾頭交換が難しいといった問題があるため、ジオン公国軍では採用を見送ったと考えられている。

制圧火器としての側面を持つ機関砲タイプと異なり、ロケット・ランチャー類は最低でも直径240mmの大型弾を発射する一撃必殺の兵器、あるいは支援火器としての性能を期待された。機関砲タイプより後発だったのは、プロトタイプ・ザクのシミュレーションにおいて対艦攻撃力の不足が指摘された時点で、開発が着手されたためである。

シンプルなモデルなら発射筒と照準装置だけで構成されるMS用ロケット・ランチャー類は、技術的ハードルが低い兵器でありながら高い火力を持つ。ザクⅡ用の肩部ラッチ固定式H&L-SB21K／280mmA-Nザク・バズーカを経て、ザクⅡ用のH&L-SB25K／280mmA-Pザク・バズーカが順次開発されていった。ザクⅡ用としてサイロ型のザク・バズーカも実用化されていたが、核砲弾発射用の炸薬が強力で、反動の低減も難しかったためか、ザクⅡでは採用されなかった。

MS用ロケット・ランチャー類最大の特徴は大火力で、中でも最強と言えるものが一年戦争緒戦で対艦／対コロニー用として多用された「核弾頭弾」である（核砲弾自体は、ほとんどのMS用ロケット・ランチャー／無反動砲で発射できる）。NBC兵器の使用を禁じた南極条約により、ザク・バズーカは通常弾のみが使用されることになったが、ザク用としては依然として最強クラスの火器であり、宇宙艦艇に一撃で致命的な被害を与えることができた。このためF



▲ザクⅡはそのジェネレーター出力のため、ビーム兵器を使用できなかった。しかし、一年戦争終結後に運用されたザクⅡの中には、ビーム兵器を使用した機体もあったと言われる。

型やJ型をはじめ多くのザク系MSが装備し、一年戦争後期には対MS用としても重用されたのだった。

ザクの数少ない格闘兵装であるビート・ホークは、キシリア・ザビの命で開発された。掌部コネクタを介して供給されたエネルギーにより刃を赤熱化、目標を溶断する巨大斧ビート・ホークは、比較的古くから存在した兵装で、ザクⅠの時点でタイプ3が装備されていた。ザクⅡではタイプ5へと発展し、対艦肉薄攻撃や牽制、地球連邦軍がMSを投入した後は、対MS格闘戦で重要な地位を占めることとなった。

上述の3カテゴリ以外にも、ハンド・グレネードやミサイル・ポッド、内装式対人兵器など多彩な兵装が用意されたザクⅡだが、ジェネレーター出力の問題から極一部の特殊型以外はビーム兵器を装備できなかった（ただし、ジェネレーター内蔵式のビーム兵器は使用可能なほか、F型がリック・ドム用のBeam Bazooka Ex-T2-2と思われるビーム砲を使用したという報告もある）。

これは対艦／対拠点級の大火力を核バズーカで補う意図があったこと、南極条約締結後は新型MSやモビルアーマーにビーム兵器を搭載するつもりだったことなどが理由で、性能面だけでなく戦術的な側面からも当然のことだったと言える。

以下では、主にF型直系機とJ型が使用した兵装を紹介する。

120mm ザク・マシンガン

ザクⅡの主兵装である、最も有名な「ザク・マシンガン」で制式名称はM-120A1。ジオニク社火器開発部門の社内コードはZMC38Ⅲであった。口径は120mm、装弾数は145発で、このドラムマガジンはジオン公国軍の標準規格弾倉に制定されている。前身機であるザクⅠ用ザク・マシンガンとの相違点は、大口径化とドラムマガジンの接続位置、ストックの増設などである。特に増設されたストックは、射撃時の安定性向上に役立っただけでなく、至近距離での格闘用打撃武器として使用されるケースも見られた。

射撃時の安定性や反動軽減は、ストックだけでなくスローバック式のバレル、電気作動式の機関部などによって達成されている。これらの機構により、

旧世紀末期の戦車砲並みの大口径弾を連射しながらも、高い命中精度を達成できたのである。

弾種は通常弾、徹甲弾、翼安定徹甲弾、対宇宙艦徹甲弾、榴弾、散弾などが存在しており、火力と多用途性に優れていることが特徴であった。初速や連射速度は弾種や発射薬量によって異なるが、中には初速が秒速200mという拳銃弾以下のものも存在するなど任務を目標によって使い分けられた。

砲弾の構造は時期によって違いがあり、過渡期のモデルは、円筒型薬莢と弾頭を燃烧スカートで接続したものとされている。この説によると後に燃烧スカートは廃止され、ポトルネック式の薬莢に弾頭を接続するモデルが主流型となった。ポトルネック式の薬莢は底部に電気作動式の雷管を備え、弾体はクイックアタッチメントを介して接続される。このタイプの砲弾は、弾体と薬莢の分離・再結合、発射薬量の調整が容易であり、弾種選択の自由度の向上に貢献した（ザクⅠ用ザク・マシンガンの105mm砲弾もポトルネック式だが、クイックアタッチメントはなく弾体の交換はできなかったとされる。なおザク・マシンガン用砲弾は、基本的にリム式だったようである）。

M-120Aにはマイナーチェンジ版がいくつか存在しており、その代表的モデルがZEONIC社のZMP-50BとMMP社のMMP-78である。



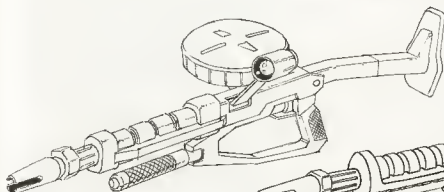
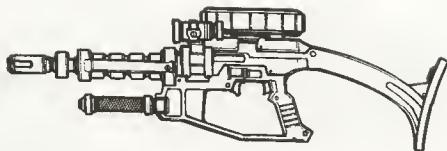
▲ザク・マシンガンで使用する120mm弾は火力に優れ、対艦攻撃でも威力を発揮した。ルウム戦役などでも多くの地球連邦軍艦船が撃沈された。



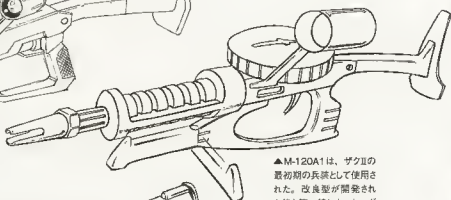
▲ストックを格闘攻撃に用いるケースもあった。構造が単純で、ストック自体も頑強であったからこそ可能な攻撃方法と言える。



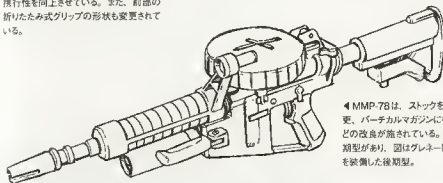
▶一般的にザク・マシンガンとして知られるM-120A1。改良型など、いくつかのタイプが開発され、一年戦争を通じてザクIIの主兵器として使用され続けた。



▲M-120A1の改良型であるMMP50Bは、弾装の取り付け位置をズラすなど、携行性を向上させている。また、前部の折りたたみ式グリップの形状も変更されている。



▲M-120A1は、ザクIIの最初期の兵装として使用された。改良型が開発された後も第一線にあった。グフやドムなど、他のMSが使用することもあった。



▲MMP-78は、ストックを伸縮式に変更。パーチカルマガジンにも対応するなどの改良が施されている。前期型と後期型があり、両者はグレネード・ランチャーを装備した後期型。

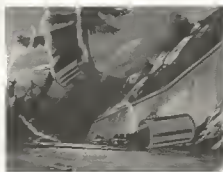
ZMP-50Bは、ドラムマガジンの接続位置を中心線から右側にずらしたモデルで、弾倉と機体が干渉しにくくなっている。このため弾倉を付けたままでも、腰部後方のマウントラッチに搭載しやすいという利点があった。サステイプであるZMP-50Dは、弾倉の装着位置こそM-120Aと同じだが、機関部上面がアーチ上に成形されているため弾倉の着脱が容易になっていた。

MMP-78は伸縮式ストックを採用したほか、対空砲弾用のパーチカルマガジンに対応したモデルである。MMP-78には、一年戦争初期に多用された前期型、サーマルスリースの大型化やキャリングハンドルの追加などが行われた中期型、グレネードランチャーを装備した後期型といったいくつかのバリエーションが存在する。

これら120mmザク・マシンガンのシリーズ総生産数は1万5千挺以上、MS用兵装の最多生産記録となっている。



▲ザク・マシンガンは汎用性にも優れ、ミサイルの迎撃などにも用いられた。MSが優れた射撃性能を有していたことの証明とも言える。



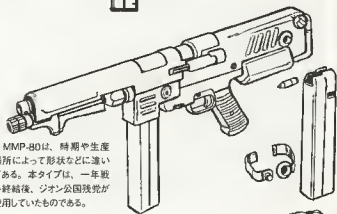
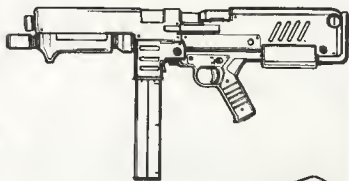
▲120mm弾にもいくつかのバリエーションが存在し、用途によって使い分けられた。また、このスレートタイプの素案は、榴弾の開発の過程でのものである。

90mm ザク・マシンガン

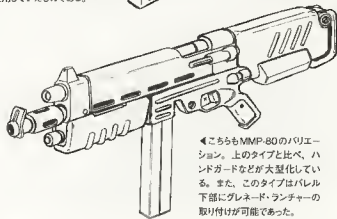
MMP社が開発した90mm口径のザク・マシンガン MMP-80。代表的な仕様としてVer.8が知られている。比較的小口径なため、120mm ザク・マシンガンのような多用途性にこそ低いが、高初速かつコンパクトで取り回しにも優れるなど、対MS戦闘を強く意識している点が特徴である。

弾倉はパーチカル式で、通常のシングルカラムマガジンの装弾数は32発、トリプルカラムマガジンで100発となる。なお、予備弾倉は専用ケースに入れて数本単位で携行するようになっている。この予備弾倉ケースは、スカートアーマーにマウントできるため、携行性にも優れている。

F2型やFZ型のほか、MS-09R II リック・ドム II やMS-14F ゲルググ・マリーネなど、統合整備計画準拠のMSによる使用例が多い。砲身下にグレネード・ランチャーを装備したモデルも存在しており、こ

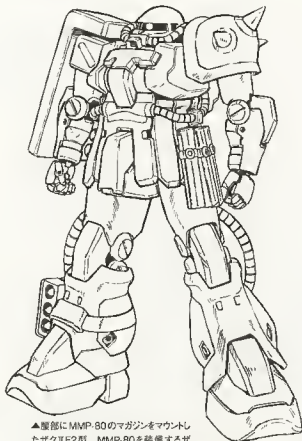


▶ MMP-80は、時期や生産場所によって形状などに違いがある。本タイプは、一年戦争終結後、ジオン公国残党が使用していたものである。



◀こちららMMP-80のバリエーション。上のタイプと比べ、ハンドガードなどが大型化している。また、このタイプはバレル下部にグレネード・ランチャーの取り付けが可能であった。

れは主にFZ型やリック・ドム II が使用した。



▲腰部に MMP-80 のマガジンをマウントしたザク II F2型。MMP-80 を装備するザクはこのような複数の予備マガジンを携行することがほとんどであった。



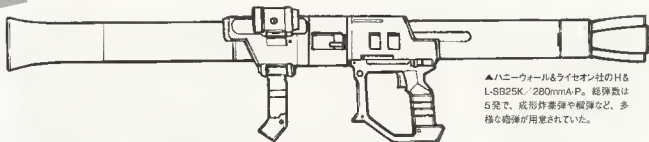
▲グレネード・ランチャーを取り付けた MMP-80 は、ランチャー基部にハンドガードが付いているため保持しやすく、射撃時に安定性に優れていた。

ザク・バズーカ

280mm弾を発射する、ハニーウォール&ライセオン社のH&L-SB25K/280mmA-P。無反動砲、ロケット・ランチャーの双方に区分される。

砲弾はロケット弾タイプ、あるいはグレネード弾タイプと思われ薬莢は存在しない（予備弾の形状から鑑みてサボ弾の可能性もある）。弾倉が見当たらないため単発式に思えるが、装弾数は5発となっている。予備弾は筒型ケースで用意され、MSのスカート





▲ハニーワールとライセオンのH&L SB25K / 280mm A-P。総弾数は5発で、成形炸薬弾や榴弾など、多様な砲弾が用意されていた。

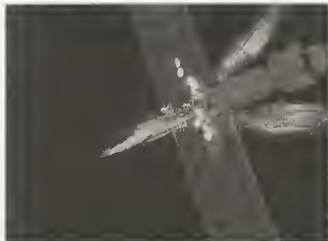
などに装着可能である。弾種は多彩で、核砲弾や成形炸薬弾、榴弾や徹甲弾などが用意されていた。ただし南極条約締結後、核砲弾の使用例は知られていない。

ザク・マシンガンと比較して連射性能と装弾数に劣るが、単発の破壊力は高く、支援や対艦、対MS用として多用された。耐弾性に優れた地球連邦軍のMSに対してでも有効で、高度な防御力を誇るガンダム・シールドすら貫通可能であった。また、発射時には後部の4連ダクトからガスを噴射して反動を低減するため、口径に比べ扱いやすい火器と言える。

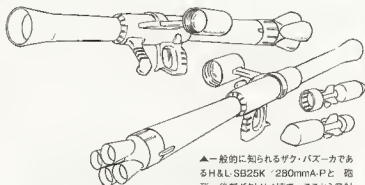
派生型として、パーチカル式弾倉を採用すると共に後部ダクトを3連に減格したモデルも存在しており、東南アジア戦線で確認されている。照準機のレンズに、可動式のカバーが施されたタイプもあった。



▲ザク・バズーカは、ザクが使用する兵装の中でも最大のサイズを誇る。そのため、肩に担いで使用する。なお、低反動化されているため、サイズや火力と比較しても扱いやすい。

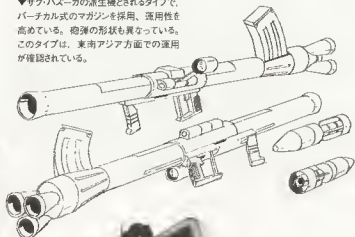


▲ザク・バズーカは、ザク・マシンガンでは破壊できなかったガンダムのシールドに穴を穿つほどの火力を有している。支援火器や対艦攻撃にも威力を発揮した。



▲一般的に知られるザク・バズーカであるH&L SB25K / 280mm A-Pと、砲弾。後部ダクトは4連で、ここから発射ガスを噴射して反動を低減する。

▼ザク・バズーカの派生型とされるタイプで、パーチカル式のマガジンを採用、通用性を高めている。砲弾の形状も異なっている。このタイプは、東南アジア方面での運用が確認されている。



◀エルマー・スネル大尉はザク・バズーカを主兵装として使用していた。腰部左側には、ザク・バズーカ用の予備の砲弾用ケースが搭載されていることが分かる。



MS-06
REPORT

特殊仕様に改装されたザク・マシンガンとザク・バズーカ

COLUMN 06

前述のザク・マシンガンやザク・バズーカは、F型やJ型などが使用するスタンダードなモデルであるが、局地戦用型や特殊任務用MSの兵装としては必ずしも適当ではない。このためザクII用をベースとした、特殊仕様兵装が開発されることになった。

120mmザク・マシンガンM-120A1の改修機として有名なのが、MS-06D ザク・デザートタイプ用のM-120ASである。これは砂漠での長期無補給戦闘を想定したモデルで、砲身の短縮やフォールディング・ストックへの換装、光学サイトの廃止、設計許容限界まで拡大された機関部のクリアランスなどの改修が行われていた。MS-06DRC デザート・ザク・ロンメルカスタムのロングレンジ・ライフルは、M-120ASの超長砲身仕様と思われる。

一年戦争終戦には、地球連邦軍のRMS-106 ハイザック用としてザク・マシンガン改が開発、生産されている。これはZMC3BⅢ/M-120A1のマイナーチェンジ版であり、アナハイム・エレクトロニクス社に合併吸収されたZEONIC社が開発を担当した。

ザク・バズーカの改修発展型として知られるモデルが、陸戦用MSの専用兵装として開発されていた、H&L-SB16K/320mm 320mmザク・バズーカ（ロケット・バズーカ）である。ジャイアント・バズのプロトタイプに相当する火器で、高機動型ザクR-1Aタイ

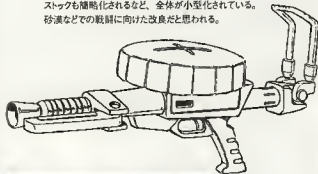
プで試験されていたが弾体の大型化に伴う作動不良に悩まされ、改良型であるH&L-SB19K/320mm 320mmザク・バズーカが開発されることになった。

これらは、局地戦用や試作型といった違いはあっても制式化を見越した兵装だが、中には存在を口外することすら危がまれる改修火器も作られた。それが地球連邦軍の主力MS、RGM-79ジムに偽装した特殊作戦用MSゲム・カモフに搭載された、120mmザク・マシンガンとザク・バズーカの改修型である。ゲム・カモフ用火器は、地球連邦軍のそれに偽装するための改修が行われており、120mmザク・マシンガンは箱型弾倉を採用すると共にフォアグリップを封鎖、ザク・バズーカはハイパー・バズーカに見せかけるためダミー弾倉とキャリングハンドルの追加やフォアグリップの撤去が行われていた。

▼ハイザックが主に使用したザク・マシンガン改。スコープが大型化しているほか、ストックの形状も原型機とは異なっている。

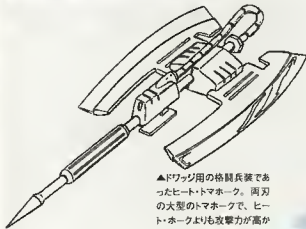


▼ザク・デザートタイプが使用した、短砲身マシンガン。ストックも簡略化されるなど、全体が小型化されている。砂漠などでの戦闘に向けた改良だと思われる。



◀戦後のクリアなどは、この短方針マシンガンを好んで使用していた。このことから、この火器が高い運用性と信頼性を有していたことが分かる。

◀ジェネレーター出力の関係上、ふたつ以上のビーム兵器を同時に使用できないハイザックにとって、ザク・マシンガンは有用な兵であった。

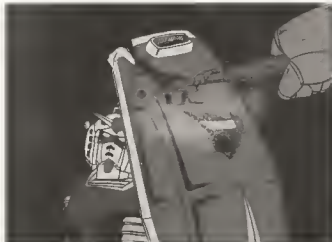


▲ドワッジ用の格闘兵装であったヒート・トマホーク。両刃の大型のトマホークで、ヒート・ホークよりも攻撃力が高かったと思われる。

■ヒート・ホーク■

赤熱させた刃で目標を溶断するMS用の斧。ザクⅡはタイプ5と呼ばれるモデルを使用した。

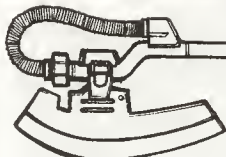
ビーム・サーベルと比較してリーチが短く、刃も実体式であるためビーム系格闘兵器に劣るように思えるが、決定的な不利はなかったという。まず、リーチの差による劣勢は知られていない。そして赤熱化した刃はフィールドを発生させているため、ビーム・サーベルの1フィールドとの間に斥力が働き、「切り結ぶ」ことができるのである。これに加えて伸縮機構も採用されているため、実体式格闘兵装としては携帯性に優れるというメリットも併せ持っている。威力も高く、一撃でガンダム・シールドを叩き割ることも可能なほか、FZ型はヒート・ホークでRX-



▲リーチこそ短かったが、赤熱した刃は堅牢なMSの装甲も簡単に溶断した。ガンダムのシールドを切り裂き、その威力を見せ付けた。



◀赤熱化した刃は、ビーム・サーベルなどのビーム系格闘兵器を受け止めることが出来た。これは赤熱化した際の蓄熱によるものとされる。



▲ザクの基本的な格闘兵装であるヒート・ホーク。当初は対艦攻撃や建築物の破壊などに用いられていたが、地球連邦軍がMSを投入した後は対MS用の格闘兵装として使用された。

78NT-1 アレックスを中破させている。中には、サラミス級宇宙巡洋艦の艦橋にヒート・ホークを投擲し、破壊するという使い方をしたザクもあったと言われる。

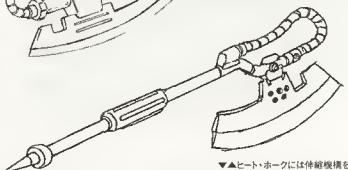
バリエーションとしてザクⅠ用のタイプ3や、FS型およびF型ドズル・ザビ機、ザクⅡB型ランパ・ラル機などが装備したと言われる大型のタイプ12などが存在していたようである。また、一年戦争後に公国軍残党やアフリカ・ゲリラのMS-06D ディザート・ザク、およびMS-09G ドワッジでの搭載が確認されている双刃式のヒート・トマホークも、ヒート・ホークの派生型と言える。



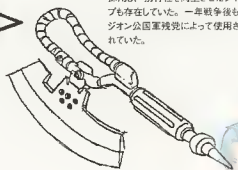
▲MS用の格闘兵装としては小型の艦船に入るが、それでも数メートルのサイズを持つ。人間と比べるとそのサイズがよく分かる。



◀ヒート・ホーク (タイプ5)。片刃でエネルギー供給用と思われるパイプが露出している。通常は腰部にマウントして携行した。



▼▲ヒート・ホークには伸縮機構を採用し、携行性を向上させたタイプも存在していた。一年戦争後もジオン公国軍残党によって使用されていた。

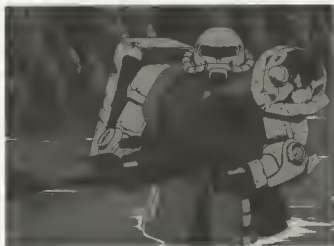


▼マゼラ・トップ砲▼

主力戦車PVN.42/4 (HT-01B) マゼラ・アタックの主砲として採用されたことから「マゼラ・トップ砲」と呼ばれるが、実際はジオン公国軍の統合火砲システム構想に基づいてZIMMAD社が開発した、多目的万能砲ZIM・M・T-K175Cである。175mm無反動砲とも呼ばれるが、これは口径とスローバック式砲身などの反動低減機構に因っている。砲身には冷却用のサーマルジャケットが設けられており、火力や10kmもの射程だけでなく、連続発射能力にも秀でている。

簡単な銃把を取り付けることでMSにも装備可能だが、通常のMS用手持ち火器と異なり、フォアグリップが右側に設置されるためレフティ仕様が標準となっている。右手を中心に使用する場合は、フォアグリップを右手で逆手に持ち、砲身を左手で支持するといった姿勢が必要になる。このような変則的な使用方法が可能なのは、マゼラ・トップ砲にMS用トリガーが存在しないためで、発射はMS本体からの電気信号で行われていると思われる。

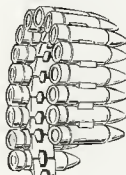
給弾方式はベルトリンク式のほか、MSが装備する



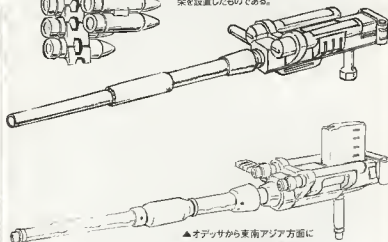
戦時急造品ではあったが、ザクIIの火力不足を補う貴重な火器であった。しかし、オデッサから撤退する部隊が使用していたことから、ジオン公国軍の劣勢を示す兵器となってしまった。

際は、機関部上にパーチカル式の弾倉（装弾数は4発）を装備するケースも見られた。給弾方式の都合上、発射時に弾種を選ぶことはできず、装填順に発射するしかない。ただし、マゼラ・アタック搭載時には発射毎に弾種を選択可能である。砲弾は薬莢式で、弾種はベネトレイター（徹甲弾）やHEAT弾（成形炸薬弾）などがあり、共にMSの装甲を破壊するだけの威力を持っていた。発射と同時に砲尾がスローバックして排莢口が露出し、排莢が行われるが、外部への排莢はMSが装備した場合だけとなっている。

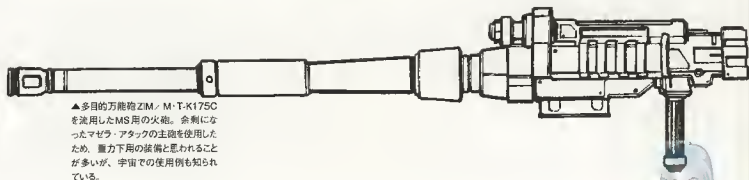
地上戦では撃破されたマゼラ・アタックの主砲が余剰となったため、補給不足となった部隊のザクII型が使用した例が散見される。“黒い三連星”が、ザクII R1A型搭乗時に装備したことから理解できる通り、宇宙でも使用可能で、対宇宙艦艇用として十分な火力を持っていた。



▲左はマゼラ・トップ砲の弾倉で、マゼラ・アタックではこれが用いられた。下はマゼラ・トップ砲で、マゼラ・アタックの主砲にMS用の支持架を設置したものである。



▲オデッサから東南アジア方面に逃れてきたジオン公国軍部隊のザクIIが使用していたマゼラ・トップ砲。機関部の上に弾倉が設置されている。



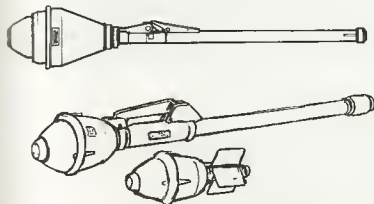
▲多目的万能砲ZIM・M・T-K175Cを流用したMS用の火砲。余剰になったマゼラ・アタックの主砲を使用したため、重力下用の装備と思われることが多いが、宇宙での使用例も知られている。



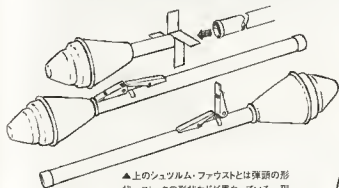
■シュツルム・ファウスト■

棒状のグリップ兼発射機の先端にロケット弾を装填した、いわゆる「使い捨てバズーカ」。構造上射程が短く、命中精度も低いが、ザク・バズーカは当然のことジャイアント・バズよりも大型の弾体を使用するため、破壊力が極めて大きい。

MS-18E ケンプファー用パンツァー・ファウストと同型のモデルと「シュツルム・ファウスト600M」が知られ、後者の弾体直径は150cmに達していたようだ(600Mは射程600mを示すと言われるが、実際の射程はこれより短かったと言われる)。他にもMarkⅧと呼ばれる仕様が存在しており、ザク系以外のMSやモビルボッドでの使用例も多い。



▲基本的には使い捨てで、構造も単純な火器だが、弾頭の威力は高く、対艦攻撃に用いられるケースもあった。



▲上のシュツルム・ファウストとは弾頭の形状、ストックの形状などが異なっている。現地で急造された可能性もあるが、基本的な構造などは同じである。

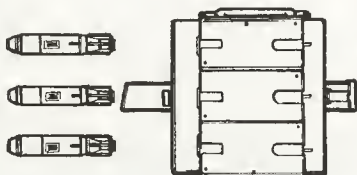


▲ザクIIの使用する兵装の中では最大級の威力を持つ火器だが、命中率が低く、接近しなければ命中は望めなかった。腰部のマウントなどに設置して運用された。

■フット・ミサイル・ポッド■

陸戦で使用される脚部外装用3連ミサイル・ポッドで、脱着防止のためリング状のアタッチメントで腰部に固定される。J型が装備したZi-Me/Triple Missile Pod MK.IVや、陸戦仕様のF2型が使用したモデルが有名である。

脚部I/Oポートを介して接続されるため他の火器と併用でき、マニピュレーターを塞がずに火力を増強できるというメリットがあった。ミノフスキー粒子散布環境では誘導性能は期待できないうえ、搭載位置の都合上、機体を隠蔽しながらの攻撃が難しいため、近距離からの発射や部隊単位での予測射撃といった運用が目立った。



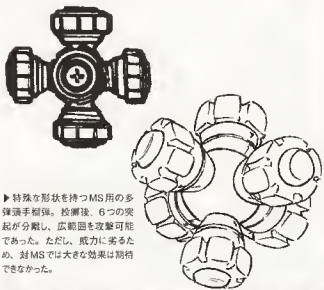
▲フット・ミサイル・ポッドとして知られる「Zi-Me/Triple Missile Pod MK.IV」。J型やF2型での使用が知られている。他の火器と併用できる点が最大のメリットであった。



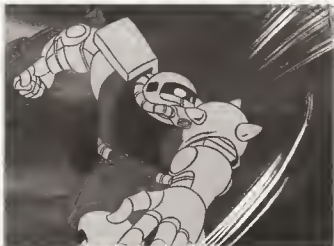
▲必ずしも水平射ではなく、弾道軌道を描く曲射も可能であった。この特性と高い射撃を活かし、制圧射撃などで使用されるケースもあった。

▼クラッカー▼

陸戦で使用された多弾頭手榴弾 MIP-B6 (cracker)。「クラッカー」は俗称である。マニピュレーターで投擲すると6つの弾頭に分離し、広範囲を攻撃できる。形状の都合上、多数を携行できないほか、対MS用としては火力不足だが、車輛など低装甲目標やMSの足止めには有効であった。



▶特殊な形状を持つMS用の多弾頭手榴弾。投擲後、6つの突起が分離し、広範囲を攻撃可能であった。ただし、威力に劣るため、対MSでは大きな効果は期待できなかった。



▲その形状から投擲が困難なようにも思える。しかし、MSに搭載されたコンピューターは支援もあって、投擲が可能であった。これはハンド・グレネードも同じである。



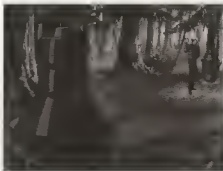
▲投擲後、空中で弾頭が分離する。MSには威力不足であったが、車輛などの目標には効果を発揮した。

▼ハンド・グレネード▼

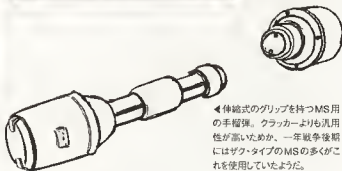
F2型やFZ型などが装備したMS用手榴弾で、爆発後、周囲に破片を撒き散らすタイプだと思われる。クラッカーと異なり単一弾頭だが、使用時にはグリップがせり出すため、投擲距離を伸ばしやすい。投擲兵器であるため初速が遅く、障害物や塹壕に隠れた目標への攻撃、対停止目標などに用いられた。



▲身を隠しながらの攻撃や、障害物の裏にいる敵への攻撃などに適している。グリップが伸縮式のため、携行性が高い点も特徴と言える。



▲対MS用にトラップなどにも使用された。本来の使用法ではないが、サイズが小さいため隠匿性に優れていることが、こうした使用法に繋がった。



◀伸縮式のグリップを持つMS用の手榴弾。クラッカーよりも汎用性が高いためか、一年戦争後期にはザクタイプのMSの多くがこれを使用していったようだ。

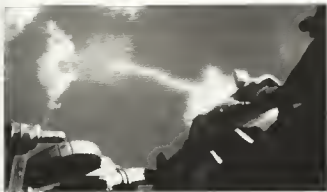
▼近接防御兵器▼

J型や陸戦仕様のザクIなどに内装された対人兵器で、Sマインとも呼ばれる。頭部接続部分の周辺や腰部、膝部などに内装されている。肉薄攻撃を行う敵歩兵の上空に全長約30cmの筒型弾を撃ち出し、そこから直径約5mmの散弾を散布する。散布タイミングはザク側から操作可能で、最大到達距離は10m。ランチャー自体は多目的に使用できるため、信号弾などの発射にも用いられた。





▲機体の全周面数メートルが効果範囲となる。この範囲にはいった歩兵や車輛には絶大な威力を発揮した。一撃だけを発射することも可能。

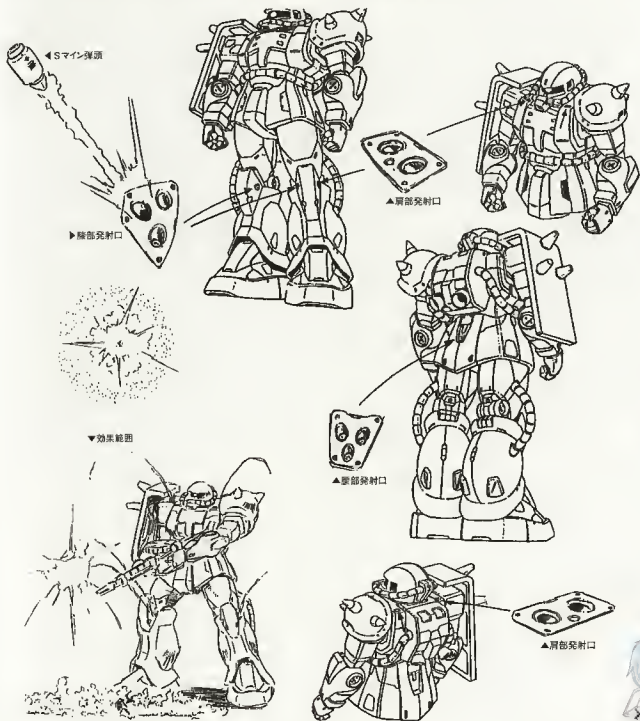


▲発射機に信号弾を装填して使用することも可能であった。発射機は機体各所にあるため、このように使用されることもあったようだ。

▼Sマインの設置箇所と攻撃範囲▲

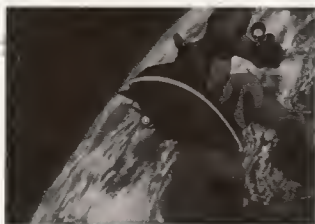
下の図はザクII J型の近接防御兵器の設置箇所と、その効果範囲などを示した図である。設置箇所は、

両肩の前後、両膝、腰後部中央で、21もの発射口を供える。弾頭は発射後、空中で爆発し、数メートルもの範囲に散弾を散布する。



MS-06
REPORTザク・シリーズに関与した
企業と組織

ジオン公国のMS開発は国家の命運を賭けたプロジェクトだったこともあり、サイド3の企業や組織が多数参加した。このためプロトタイプ・ザクに始まるザク・シリーズの開発には、サイド3が重工業推進政策で育て上げた重工業企業は当然のこと、火砲メーカーや光学機器メーカー、果ては医療機器メーカーや町工場までもが関与することになった。中でもZEONIC社、ZIMMAD社、MIP社の3社は、ジオン公国軍の機動兵器開発や火器開発において重要な地位を占めており、ザク・シリーズが止まらない兵器開発を進めること



▲ザク・シリーズを開発したZEONIC社は、一年戦争後期に戦線に投入されたゲルググの開発における中核となり、戦後はスタッフなどがアナハイム・エレクトロニクス社に吸収された。

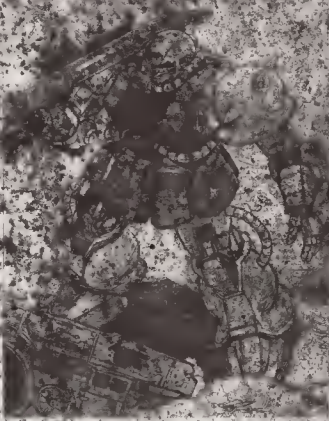
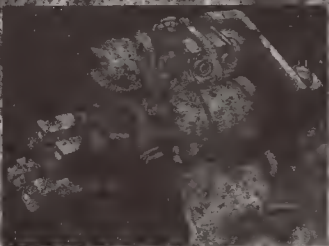
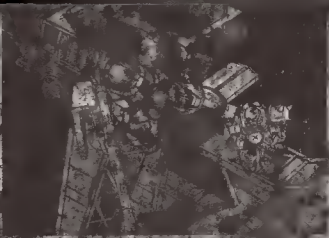
になった。M&Y (ミノフスキー・イヨネスコ) 公社は、ミノフスキー物理学時代からサイド3との繋がりが深く、MSに必要な不可欠なミノフスキー・イヨネスコ型熱核反応炉の実用化と量産に大きな足跡を残している。

■ザク・シリーズに関与した企業と組織■

企業名	一年戦争以前のザク・シリーズへの関与	補記
ZEONIC (ジオニック) 社	プロトタイプ・ザク、ザクI、ザクII本体	
	MYFG-MES 系統反応炉	M & Y 社との共同開発
	AMC (アクティブ・ミッション・コントロール)	MS 用基本動作システム
	ZXM-01 (プロトタイプ・ザク用試験マシンガン。100mm マシンガン)	
	ZMP-47D (ザクI 用 105mm / 120mm ザク・マシンガン)	
	ZMC3B II / M-120A1 (120mm ザク・マシンガン)	
	ZMP-50B / D (120mm ザク・マシンガン)	
M & Y 公社	M-120AS (ザク・デザートタイプ用超短身 120mm ザク・マシンガン)	
	MYFG-M2ES 型 (ザクI 用熱核反応炉)	ZEONIC 社との共同開発
	MYFG-M-ES F5G-M3ES 型 (ザクII F 型用熱核反応炉)	ZEONIC 社との共同開発
	MYFG-M5ESX 型 (ザクII S 型用熱核反応炉)	ZEONIC 社との共同開発
ZAS 社	J21-M3ESJ 型 (ザクII J 型用熱核反応炉。MYFG-M-ES 系)	ZEONIC 社との共同開発
	ZAS-X7 型 (プロトタイプ・ザク用熱核反応炉)	
	ZAS-M16B 型 (ザクI 用熱核反応炉)	初期に生産されたザクI のみ搭載
カノム精機	ザクII 用モノアイの光学装置	
	CE-16TX (ザク強攻偵察型 / ザク・フリッパー-用カメラガン)	
グラモニカ社	ザクII 用モノアイのメインフレーム	
フェリベ社	ザクII 用モノアイのセンサー	
ホシオカ	基本動作システムの開発。ザク・シリーズの生産	
MIP (エムイーペー) 社	ザクII S 型用メインスラスターの設計仕様変更	
オスカログ精工	ザクII S 型用ミニチュレーターの高性能化	オスカログ精工は医療機器メーカー
ZIMMAD (ツィマッド) 社	宇宙用高機動試験型ザク (HD4 型) の胸部	
	ZM. M-T-K175C (175mm 肩反動器=マゼラ・トップ砲)	統合火砲システム構想の多目的万能砲
MMP 社	MMP-7B (120mm ザク・マシンガン)	
	MMP-8D (90mm ザク・マシンガン)	
ハニーウォール&ライセオン社	H&L-SB21K / 280mm A-N (ザクI 用 280mm ザク・バズーカ)	
	H&L-SB25K / 280mm A-P (ザクII 用 280mm ザク・バズーカ)	
	H&L-SB16K / 320mm (高機動型ザクR-1Aタイプ用 320mm ザク・バズーカ)	ジャイアント・バスのプロトタイプ
	H&L-SB19K / 320mm (高機動型ザクR-1Aタイプ用 320mm ザク・バズーカ)	ジャイアント・バスのプロトタイプ
BLITZ (ブリッツ) 社	ザク・デザートタイプ用頭部ビルカン砲	
RATRIVER (ラッツリバー) 社	P-3 (ザク・デザートタイプ用連装ミサイルポッド)	
BROWNE (ブラウニー) 社	M8 (水中用ザク用 240mm4 連装ロケット弾ポッド)	
ALBERT (アルバート) 社	アクト・ザク用ビーム・ライフル	



MSB



CHAPTER 02

一年戦争における
ザク・シリーズの活躍





ザクI、ザクIIと 一年戦争を挟んだ戦い

地球連邦削減用兵器「モビルスーツ」

前章でも述べたように、ジオン公国軍のMSは対地球連邦戦争のために開発された新兵器である。ただしこれは、サイド3宙域に侵攻してくる地球連邦軍を撃退する兵器という意味ではない。ジオン公国軍の攻勢作戦の中で、地球連邦軍を撃破し、最終的には地球連邦を滅亡させるための兵器だったのである。しかも、軍事力で独立を達成したうえで地球連邦を壊滅させるというジオン公国の方針上、圧倒的な物量を誇る地球連邦軍を撃破するためには必ず使用しなければならない兵器だったのである。

地球連邦政府は宇宙における自治権獲得運動の中核であるサイド3の動向に目を光らせており、経済制裁やコロニー自治権整備法案の廃案、60年代軍備増強計画および70年代軍備増強計画など、政経軍の全チャンネルを駆使してサイド3にプレッシャーをかけ続けていた。これは地球連邦政府にサイド3の独立を許可するつもりがなかったからだ、地球連邦政府はサイド3への軍事侵攻を避けていた。

宇宙における地球連邦軍の歴史は古く、宇宙世紀開始直前には警備艇サラミス級（70年代軍備増強計画で配備が開始されたサラミス級宇宙巡洋艦とは異なる）を擁した連邦宇宙軍が編制されていた。その後、コロニー全域に広まっていた独立機運を牽制する意味もあって、U.C.0050年代には連邦宇宙軍の再編が進み、各サイドの駐留部隊も強化された。これに対してサイド3は、U.C.0059の独立宣言時に地球連邦軍駐留部隊を切り崩して国防隊を組織した。その後、国防隊はU.C.0062には国軍、U.C.0069のジオン公国宣言時にはジオン公国軍へと再編され

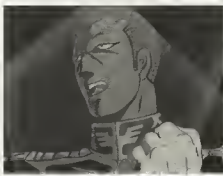
たのだった。こうして軍備増強を続けた地球連邦とジオン公国が、一年戦争開戦前に積極的な軍事行動に出なかったのには、いくつか理由が考えられる。

まず地球連邦だが、経済制裁や観艦式で十分な圧力になると考えたこと、サイド3への直接侵襲までには必要ないという政治判断、ジオン公国が暴発しても増強した地球連邦宇宙軍で対応可能という自信などが背景にあったと思われる。ジオン公国の月面領土拡張紛争やサイド3内での反対勢力粛清といった小規模軍事活動は察知していたようだが、地球連邦政府／軍の特徴的な楽観的な態度がこれを放置させたことは間違いない。サイド3から地球を直接攻撃する手段がなかったことも、地球連邦政府や軍の危機感を薄くしていた。

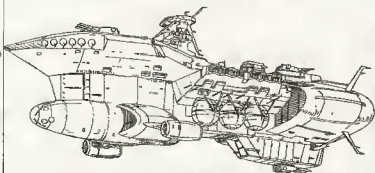
対するジオン公国は、地球連邦との全面戦争を決定事項としていたものの軍事力の差は覆しようがなく、積極的な攻勢など不可能であった。防衛戦ならば局地的な勝利も考えられたが、地球連邦軍がサイド3宙域に侵攻して来なければ、その選択肢も採りようがなかった。そして何よりも、ジオン公国の独立を認めさせたうえで地球連邦を撃滅するという国家プラン上、あくまで攻勢作戦における勝勢が絶対条件だったのである。そこでジオン公国は、絶対数で地球連邦軍に劣る以上、質の面で勝る新兵器を欲してMSを開発したのである。

こうして実戦に投入されることを前提とした兵器体系として戦力化されたのが、最初期の実戦用MSザク・シリーズである。ザク・シリーズを得たジオン公国は開戦を決意し、一年戦争開戦後しばらくの間、宇宙地上を問わず快進撃を続けた。しかし、その裏には様々な困難が存在したのである。

そこで本章では、ザクIや「狭義のザク」ザクII F型、その中期生産型であるF2型や最終生産型のザクII改、総合性能向上型のS型や陸戦用のJ型を例と



▲ジオン公国を主導したザビ家は、単に独立を成し遂げるだけでなく、軍事力をもって地球連邦そのものを解体するためにMSを欲した。



▲ジオン公国軍もチベ総をはじめとして宇宙艦隊の整備を進めたが、その性能は地球連邦軍艦隊の戦術艦と大差はなく、戦力差を覆すには至らなかった。

して、一年戦争開戦以前から戦後に至る活躍や戦術開発、支援システムの整備などを紹介していく。



MS運用法の模索と、運用システムの充実

■新カテゴリー兵器ゆえの苦悩■

ミノフスキー粒子散布環境下に適合した新兵器として生み出されたMSは、旧来の兵器とは異なり人間そのもののシルエットを持っていたが、ここに大きな問題が潜んでいた。ザクⅠがロールアウトした当時であっても、18m級で人型をした兵器の具体的な運用方法など存在していなかったのである。

当時のMSが「巨大歩兵」と位置付けられていた以上、歩兵の運用方法を転用すればいいとも考えられたが、それは一面的な見方に過ぎない。MSは当初から宇宙とコロニー内での運用を前提した兵器で、ザクⅠの時点で突出した攻防力や機動性そして作業性能を有していた。つまりMSは巨大歩兵でありながら、航空機/航空機や装甲戦闘車両、作業重機としての機能を併せ持っており、それまでの兵器の常識が通用しなかったのだ。

これは部隊編制や後方支援を含めた総合的運用システムだけでなく、パイロットの育成方法すら未知の状態だったことを意味していた。問題をパイロット育成に絞っても、MSパイロットには航空機、航空機、地上車両、重作業機といった各種操縦技術と基礎技術への理解が必要となる。しかもこれらの機能を状況に応じて使い分け、戦闘や工作作業を行わなければならない。MSの宇宙用重機という側面に注目するならば、資源小惑星の探掘や月面/コロニー外周での作業が可能な汎用民生重作業機の操縦者が、MSのパイロットに近い存在と言える。しかし民間作業機では考えられない機動や衝撃の中、多彩な兵装を管制しなければならず、その面では宇宙戦闘機や装甲車両の搭乗員がMSへの適正を有していたと言えるだろう。

ほかにも、「1個MS小隊は何機のMSで編制するのか?」「兵装は小隊単位で同一とするのか、混成するのか?」「MS部隊のフォーメーションは?」「他兵科との共同運用は?」「敵対兵器との戦力比は?」といっ

た編制面や戦闘技術関連の問題は山積しており、ジオン公国軍は他兵器の運用形態や支援機構を参考にしつつ、手探りでMSの運用方法を確立していくことになった。

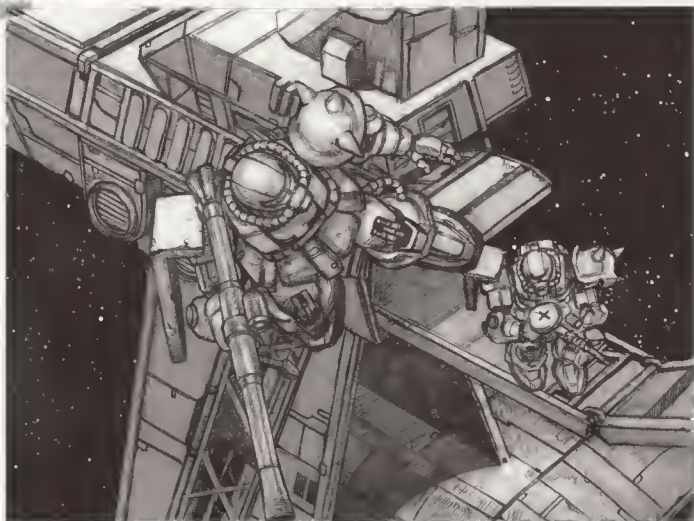


▲MSは確かに旧来の兵器を凌駕する性能を持つが、集中攻撃には耐えられなかった。このため部隊の編成方法や戦術の研究は必要不可欠なものであった。

■MS運用艦の就役■

黎明期のMSは、運用面を中心に多くの問題を抱えていたが、ジオン公国軍も何の見通しもなくザク・シリーズの開発を進めていたわけではない。MS開発中からジオン公国軍が模索していた運用手段とは、航空母艦のようにMSを搭載運用できる宇宙艦艇を開発することであった。ザク・シリーズ、特にザクⅡは当時の宇宙戦闘機と比べて活動限界時間が長かったが、推進剤量やパイロットの負担を考えればあまり長時間の行動には適さず、基地から遠いエリアにMSを進出させる必要もあった。そこでジオン公国軍は搭載MSの整備や補給、パイロットの休養が可能で、長期間に亘る運用にも耐える宇宙艦艇の開発を進めていた。

こうして開発された艦艇が、U.C.0075.07に一番艦が就役したムサイ級軽巡洋艦である。就役時期がザクⅠの量産化決定と同時期であることから分かるように、ムサイ級はMSの開発と並行して建造が進められており、設計段階からMS運用能力が与えられた初の宇宙艦だった。ムサイ級では航空母艦のような露天式の飛行甲板は採用せず、艦橋の真下に格納庫兼整備場のハンガーデッキとMSを加速射出するカタパルトが内蔵された。通常で4機、大気圏突入艇コムサイを含めれば最大6機のMSが搭載可能とされる。また作戦上の必要性から、MSパイロットを含む多数のクルーを乗せたまま、ラグランジュ・ポイント間を無補給で往復できる能力も持っていた。

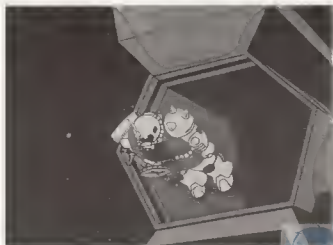


ここで宇宙艦にカタパルトが搭載されていることに疑問が生じる。大気圏内で運用される航空母艦では、大重量の航空機を短距離で離陸速度まで加速するため、カタパルトは必要不可欠な装備である。しかし失速速度という概念がない宇宙空間では、カタパルトは不要に思える。実はムサイ級のカタパルトは、航空母艦のそれとは異なる目的の設備である。MSの燃料消費を抑えるための初期加速を行うための装備が、ムサイ級のカタパルトなのである。宇宙空間での推進剤は文字通りの生命線であり、推進剤がなくなれば後は慣性に流されるだけになってしまう。MSには燃料を消費せずに姿勢を制御できるAMBACシステムを持つが、推進力は生み出さない。推進剤の消費を抑えることはMSを操縦するにあたって最低限必要な要素と言える。

そこでムサイ級ではカタパルトでMSを射出し、慣性飛行のみで戦域に到達させるという方法が考案された。これに加えてザクⅡでは、カタパルト使用時と未使用時で燃料効率に2倍近い差が発生するほか、最大加速までの所要時間も1/4にまで短縮され

ると言われており、その効果は絶大であった。ただしザクⅠはカタパルト射出を考慮していなかったようで、カタパルトからの運用に対応したナビゲーション・システムが搭載されたのはザクⅡでのことであった（その意味では、運用システムを意識して開発されるようになった初めてのMSが、ザクⅡだと言える。これは汎用性や拡張性、整備性を強く意識したザクⅡの設計からも理解できる）。

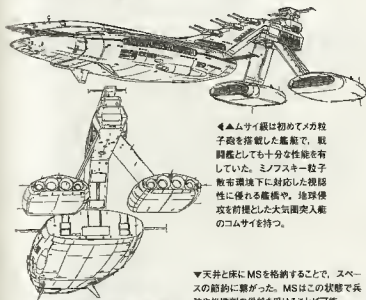
こうして完成したムサイ級は以降のMS運用艦の



▲初期のムサイ級では、艦の後方に向かって発進した。カタパルトを使用しないのであれば、艦橋前方の開閉式甲板からの発進も可能であった。

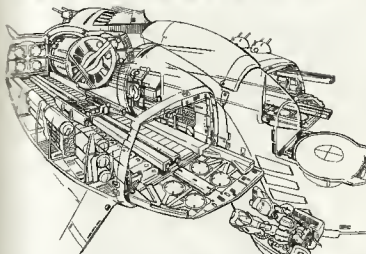
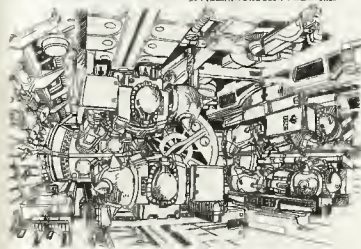


雛形となり、ザク・シリーズ運用の中核的存在となっていた。また、ムサイ級に続いてグワジン級大型戦艦やザンジバル級機動巡洋艦などのMS運用艦が就役、デベ級高速重巡洋艦にMS運用能力が追加されるなど、ジオン公国軍で運用されるほぼ全ての宇宙艦はMS母艦としての機能を標準的に備えることになったのである。



▲ムサイ級は初めてメガ粒子砲を搭載した艦艇で、戦闘艦としても十分な性能を有していた。ミノフスキー粒子散布環境下に対応した機動性に優れる艦艇や、地球進攻を前提とした大気圏突入艦のコムサイを持つ。

▼天井と床にMSを格納することで、スペースの節約に繋がった。MSはこの状態で兵装や推進剤の供給を受けることが可能。



▲ムサイ後期型では、MSは覆きべった状態で射出される。射出後、MSは姿勢制御後、部隊単位で集合して、戦域へと向かった。



MSの戦術研究と一年戦争開戦前の運用

▼教導機動大隊の編制▼

MS-01に始まるMS開発において、何の試験も行われなかったわけではない。MS-01～03では各種稼働試験が、プロトタイプ・ザクでは対艦攻撃を想定したコンピューター・シミュレーションなどが、ザクI開発ではZEONIC社から出向したテスト・パイロット、エリオット・レム中佐（少佐とも言われる）らによる各種試験やEMS-04 ツグとの競争試作が実施された。一年戦争開戦前、地球連邦軍の反応を見るためMSの試験風景をリークしたエピソードも有名である。しかしこれはあくまでテストであり、具体的な運用方法を含めた戦術の研究は行われていなかった。

そこでジオン公国軍は、U.C.0076.08からロールアウトがスタートした初期先行試作量産型のザクI A型を装備する、戦術研究部隊を創設した。それがキシリア・ザビの提言によって、U.C.0075.11に編制された「教導機動大隊」である。

教導機動大隊には、階級や年齢を問わず様々な将兵が集められた。有名などころでは後に「黒い三連星」として有名を馳せたガイア、オルテガ、マッシュ（3人が固定チームとなるのは一年戦争開戦の直前）、ゲリラ戦を得意とする「青い巨星」ランバ・ラル、最初期からMS開発に携わったと言われる歴戦の兵ガデム、そしてルウム戦役で「赤い彗星」のふたつ名を得ることになるシャア・アズナブルらが在籍していた。なお、高いポテンシャルを秘めていたとはいえシャアに至っては士官学校の生徒に過ぎなかった。このことから、ジオン公国軍がMSの戦術研究を急務としていたことが理解できる。

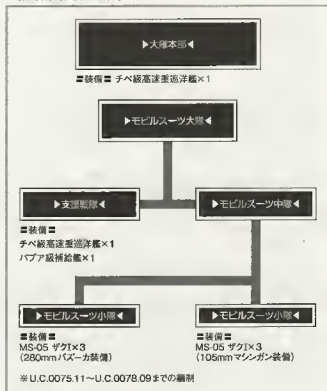
秘密裏に教導機動大隊が演習を開始したのは、U.C.0076.05のことである。ロールアウトしていたザクI A型27機すべてを受領した教導機動大隊は、戦術研究やパイロットの育成を進めていった。

この結果、MS3機で1個MS小隊、3個MS小隊で1個MS中隊といった基本編制や、MS小隊単位での兵装統一、宇宙艦で編制される支援戦隊などが決定された（この編制形態は一年戦争開戦直前まで続

いた)。戦術研究では対艦攻撃試験やMS対MSの模擬戦なども行われたようで、MSの性能を活かした基本的戦技の大半は教導機動大隊によって編み出されたものと言っている。またザク用格闘兵装ヒート・ホークの開発や、ザクⅡC型へのシールドおよびスバイク・アーマー装備も教導機動大隊の影響が大きいと思われる。

戦争の気配が近付いてくると、優秀なパイロットを教導機動大隊に常駐させて置くわけにはいかなくなり、将兵の入れ替わりが激しくなったようである。U.C.0078にシャアが士官学校に戻るため隊を離れたという説があるほか（戦時特例法により、U.C.0077に繰り上げ卒業したという説が有力）、他のメンバーも宇宙攻撃軍と突撃機動軍の編制に伴い実戦部隊に異動となったケースが多かった。それでも戦術研究とパイロット育成という教導機動大隊の存在意義は大きく、一年戦争開始後には「黒い三連星」の3人がレストアしたザクⅠを用いて、教導機動大隊の新兵に特別講習を行ったと言われている。

■教導機動大隊の編制■



▼秘密裏に行われた戦前の実戦投入▼

教導機動大隊が実施したのは戦術研究だけではない。いかに実戦に近い環境で行ったとはいえ、それは試験でしかなく、予想不能事態が頻発する実戦とは異なる。また戦争準備の一環として、ジオン公国が領土拡張や工場施設の奪取、サイド3外の親ジオン公国勢力の助成などを必要としていたこともあり、教導機動大隊が実戦に投入されることになったのである。

対地球連邦戦争の開戦前であったことから、作戦は秘密裏に進められた（そもそも教導機動大隊の戦力では、大規模作戦は実施できない）。こうしてU.C.0077.07に行われたMS初の実戦が、サイド6への軍事介入だった。親ジオン公国派のランク政権を成立させるため、反対勢力の排除を行ったようである。投入されたMSは大隊編制当初から配備されていたザクⅠA型で、ガダム大尉が参加していたとされているが、MSの巨体を目にした敵部隊があっけなく降伏したため砲火を交えることはなかったと言われる。

その後、月面での領土拡張や他サイドの宇宙工場奪取、コロニー間の通商妨害といった作戦にMSが投入され、ザクⅡがロールアウトするとザクⅡC型も投入されるようになった。他の開戦前のMS投入



▲教導大隊では、MS-05 ザクⅠA型が使用された。この機体を用いて部隊の基本的な編成法や戦技などが考案されていた。



▶「ケリラ星」として知られるランバ・ラルもこの部隊に参加していた。彼のケリラ戦術も戦技の考案に役立ったと思われる。

例として挙げられるのが、U.C.0078.10、サイド3・キンツェムで発生した反ザビ家クーデターの鎮圧である。この戦闘には、宇宙攻撃軍に異動となっていたガダム大尉搭乗のザクI以外にザクIIも投入され、瞬間に敵戦車部隊を駆逐したと伝えられている。なお、これらの戦闘に教導機動大隊が関与していたのは確かだが、キンツェム戦のように宇宙攻撃軍が参加したケースもあったようで、どの作戦がどの部隊によって遂行されたかは不明である(サイド3での戦闘は、本国防衛軍を隷下とする宇宙攻撃軍が関与している可能性も高い)。

こうした小規模戦の中で、ザク・マシンガンやザク・バズーカ、ヒート・ホークなどのザク用兵装も使用されており、ザクは兵器として熟成を深めていった。その一方でパイロットの育成も進み、宇宙戦闘機部隊や機甲部隊からMSパイロットに転科する者

も増加。MSはハードウェア、ソフトウェアの双方で対地球連邦戦争に耐え得るものになっていった。



◀ 教導大隊時代からザクIを愛機としていたガダム大尉(簡蔵は当時のもの)。サイド6への軍事介入やキンツェムでのクーデター鎮圧などで活躍したと言われる。

MS-06 REPORT

MSの位置付けを巡って分裂した宇宙攻撃軍と突撃機動軍

CONTENTS

MS開発に国運をかけ、教導機動大隊による戦術研究や小規模な実戦投入を進めさせたジオン公国であったが、MSに対する認識は必ずしも一致していなかった。特に艦艇を主力、MSは補助兵器と考えるドズル・ザビ少将と、MSの主力化を目指すキシリア・ザビ大佐(階級は共に当時)の意見対立は解決する気配を見せなかった。しかも両者共に自身の意見が容れられない場合、戦を辞すると宣言しており、無用の混乱を防ぐためにも事態の収束が急がれた。

そこでギレン・ザビ総帥が提示した解決策が、ジオン公国軍をふたつに分割することだった。この結果、U.C.0078.10に、ドズル・ザビを司令とする宇宙攻撃軍とキシリア・ザビが司令を務める突撃機動軍が誕生した。各司令の意見を体現して、宇宙攻撃軍は宇宙艦艇を重視し、突撃機動軍はMS中心の編制を行なった。具体的な違いは機動師団(艦隊)におけるMS大隊の数であり、宇宙攻撃軍ではMS大隊を1個とする代わりに宇宙艦艇が増強されていた。

ここで注意しなければならないのは、MSの主力化に難色を示したドズルといえども、MSの性能と必要性は認めていたことである。これがMSに興味を示さなかった地球連邦軍とドズルの差だった。

そしてドズルも一年戦争緒戦の戦果からMSを重視する傾向を強めていった。戦争末期には宇宙要塞ソロモン防衛用に派遣された巨大モビルアーマー、MA-08 ビグ・ダムを見るや、MS-09R リック・ドムが送られて来ないことに不満を述べるほどであった。

▶ ドズル・ザビは、MSの性能は認めていたが最終的な勝敗を決するのは宇宙艦艇による艦隊戦だと考えていた。



◀ ザビ家の中での実見性に富んでいたキシリア・ザビは、MSの開発に積極的に進めさせた。

地球連邦軍宇宙艦隊を葬り去った
一年戦争緒戦の活躍

▼一週間戦争と「最強兵器」ザクの威力▲

U.C.0079.01.03、地球連邦に宣戦を布告したジオン公国は、その3秒後にはサイド1、2、4に奇襲攻撃をかけた。これが、ジオン公国が「ジオン独立戦争」と称した一年戦争の始まりであった。

一年戦争最初の大規模戦である一週間戦争（期間は1月3日から10日）では、開戦以前の小規模戦とは比較にならない数のザクが投入された。主力はザクⅡF型とC型で、他に少数のS型とA型、特殊攻撃用や支援用としてザクⅠB型も参戦していた。

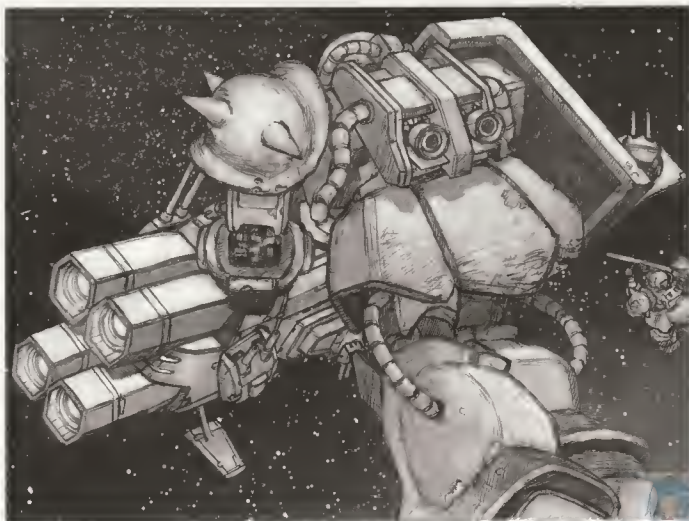
戦闘開始時、ジオン公国軍はまずミノフスキー粒子を広域に散布した。これは宇宙世紀の戦闘の定石となる戦法であり、この瞬間に地球連邦軍は大半の攻撃手段と通信手段、索敵手段を封じられていたのだった。こうして大幅な弱体化を余儀なくされた地球連邦軍宇宙艦隊にザクが攻撃を仕掛けたのである。

ミノフスキー粒子散布環境での有視界戦闘に適合

したザクは、地球連邦軍宇宙艦艇に肉薄攻撃を行う次々と撃沈していった。ザクが装備するザク・マシンガンやザク・バズーカは、巨大な宇宙艦相手には小口径にも思えるが、至近距離で重要箇所を集中攻撃できるザクにかかれば必殺の武器となった。

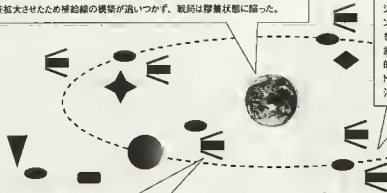
対する地球連邦軍は、最強を自認していたマゼラン級宇宙戦艦やサラミス級宇宙巡洋艦をしても、ミノフスキー粒子の影響で組織的な反撃どころかザクの補足すらできなかった。艦橋の目前にヒート・ホークを振りかぶったザクを認めた時点で、ようやく攻撃に気付くケースさえ少なくなかった。反撃に転じようと核ミサイルを発射した艦もあったが、ザクⅡにミサイルを撃墜されたうえ、次の瞬間にはMSの肉薄攻撃を受けることになった。

中でも驚異的だったのが弾頭搭載のザク・バズーカ装備のザクⅡC型で、宇宙艦艇だけでなくコロニーをも一撃の下に破壊してしまった。本来コロニーは外部からの攻撃に強く、核兵器は宇宙では威力を減じてしまう。しかし、MSはその機能上単独でコロニー内に侵入でき、この結果、コロニー内に打ち込



■地球降下作戦 (U.C.0079.03.01~04.04)

ルウム戦役後に行われた南極条約で休戦に持ち込めなかったジオン公国軍は、02.01に地球攻撃軍の設立を公議、翌月から数次に亘って部隊を地球に降下させた。この作戦は、地球各地の資源地帯などの制圧が目的とされた。地球連邦軍はコロニー落としや一年戦争終戦でのダメージから回復しておらず、敵部隊を阻止することができず、各地で劣勢に追い込まれていた。勢いに乗ったジオン公国軍は地球の大半を制圧するも、意欲に戦線は拡大されたため補給線の横断が激しくつづき、戦局は膠着状態に陥った。



■一週間戦争 (U.C.0079.01.03~1.10)

一年戦争最初の大规模な戦闘で、戦線期間が一週間にも亘ったことから「一週間戦争」と呼ばれる。地球連邦への宣戦布告から3秒後にジオン公国軍はサイド1、2、4を攻撃。各サイドは核兵器や化学兵器によって壊滅した。また、地球連邦軍にも大打撃を与え、戦線はジオン優勢のままだけられた。各サイドを壊滅させたジオン公国軍は、サイド2・8パンチ「アイランド・イフィッシュ」を落下させるコロニー落とし作戦（ブリティッシュ作戦）を実施。コロニーは地球連邦軍の拠点であるジャスローを標的としていたが、地球連邦軍艦隊の攻撃を受け、オーストラリアのシドニーに落着いた。これにより、シドニーは消滅、地球各地にも甚大な被害を出した。

■ルウム戦役 (U.C.0079.01.15~16)

ブリティッシュ作戦に失敗したジオン公国軍が、二度のコロニー落としを全国で実行した作戦。サイド5「ルウム」宙域で行われたことからこう呼ばれる。この情報を察知した地球連邦軍も同宙域に艦隊を展開、両軍の間で激しい艦隊戦が繰り広げられた。両軍も艦隊規模から「史上最大の艦隊戦」とも称される。当初は地球連邦軍に有利に進んでいたが、ジオン公国軍がMSを投入したことで戦局は一変、数

倍の規模を持つ敵艦隊に大きな打撃を与えた。さらにジオン公国軍の「悪い三連星」は、地球連邦軍のレベリ将軍を捕虜にするという戦果を挙げている。また、この戦闘では、「赤い彗星」ことシャア・アズナブル中尉（搭乗は当時）が5隻もの敵艦を撃破するなど、多くのMSパイロットが戦功を挙げた。しかし、先の一週間戦争と合わせ、ジオン公国軍も艦隊やMS、人員に大きな被害を受けていたのである。

まれた核砲弾は、空気がある密閉空間という核兵器には最適の条件で炸裂、凄まじい衝撃波と熱線によってコロニーを易々と破壊してしまったのだ。

スペースノイドの軍とも言えるジオン公国軍が、同族の居住地でもあるコロニーに核攻撃を加えることは本末転倒にも思える。しかしジオン公国のトップであるザビ家、特にギレン・ザビ総帥はジオニズムに同調するスペースノイドはサイド3に移民しているものと判断し、他サイドの居住者を虐殺することと躊躇しなかったのである。

このようなギレンの態度は、いかなる殺戮方法も容認するという意味でもあった。その結果、サイド2・8パンチ「アイランド・イフィッシュ」には当時最悪の毒ガス「GGガス」が注入された。この作業を行ったのは、ガス弾発射機を装備してコロニー内に侵入したザクIや、コロニー外壁にガスポンプを設置したザクであり、ザクの汎用性と多用途性、作業性能が最悪の形で結実したのである（ザクIは、コロニー内での対人戦闘でも無敵といえる性能を発揮している）。

こうしたザクの作業性能は、別の形で活用された。それがアイランド・イフィッシュへの核パルス・エンジン設置といった「コロニー爆弾」化の各種作業

である。一週間戦争でのジオン公国軍は、各サイドの地球連邦軍駐留部隊を撃破するだけでなく、核攻撃にも耐えると言われた地球連邦軍本部ジャスローを破壊するため、質量弾化したコロニーを地球に落下させる「スリティッシュ作戦」、つまり「コロニー落とし」を実施した。毒ガス注入も、質量弾化したコロニーを内部から操作させないためのものだった。

地球連邦軍の迎撃によりコロニー爆弾はジャスローに落ちなかったが、その破片は地球上に降り注ぎ甚大な被害を引き起こした。つまりジオン公国は戦略目的を達成できなかったのだが、コロニー落としや対コロニー攻撃によって地球圏人口の約半分が死亡することになった。この被害のほぼすべてが、ザクが引き起こしたものであり、その威力は充分過ぎるほど証明されたのだった。



一年戦争の終盤でザクは、対艦、対拠点を撃つ能力を見せ付けた。さらに、コロニー落としの準備作業を行うなど、高い作業性能も発揮した。

■ ルウム戦役とエースの活躍 ■

一週間戦争でジャスロー撃破に失敗したジオン公国軍は、二度目のコロニー落としを意図してサイド5に侵攻した(地球連邦軍宇宙艦隊残存戦力の殲滅が目的とされた宙域もある)。U.C.0079.01.15~16におよぶこの戦いは、ルウム戦役と呼ばれている。

ルウム戦役が一週間戦争と異なっていたのは、レビル中將(階級は当時)指揮下の地球連邦軍がジオン公国軍の動向を事前に察知していたこと、当初ザクはサイド5・11パンチ「アイランド・ワトホート」の質量弾化とその警備に投入されたこと、このため史上最大と呼ばれる宇宙艦隊戦が展開されたことである。これらルウム戦役独自の戦術は、ザクに多くの不幸をもたらすことになった。

特に大きかったのが、コロニーの質量弾化を警戒した地球連邦軍が作業中のザクに集中攻撃を仕掛けたことである。これにより、作業用装備の搭載で機動/運動性の低下を余儀なくされたザクの多くが撃破されてしまった。一週間戦争と異なり奇襲にならなかったこと、作戦の都合上ザクが積極的な攻撃を行えなかったことも被害を大きくした。

しかしコロニーの質量弾化が断念されると、戦況はジオン公国軍有利に推移し始めた。MS部隊が対艦攻撃に転用されたのである。それからは一週間戦争のようなワンサイドゲームが展開され、ザクⅡC型

やF型を中心としたジオン公国軍MS部隊は地球連邦軍艦艇を次々に撃沈していった。ここで絶大な戦果を残したのが、ジオン公国軍が育成してきた高練度パイロット、いわゆる「エース・パイロット」たちであった。

その筆頭として、シャア・アズナブル中尉(階級は当時)の名が挙げられる。シャア中尉は総合性能向上型のザクⅡS型に搭乗、本機はC型と異なり核兵器は搭載しておらず、火力はF型と同等だった。それにも拘らず、シャア中尉はザク・マシンガンやシュツルム・ファウスト、ヒート・ホークといった兵装と高度な機動性を駆使して、5隻もの艦艇を撃沈したのである。この際、彼のパーソナル・カラーと恐るべき機動性から「赤い彗星」というふたつ名が付けられ、その戦闘能力はレビル將軍をして「異常」と言わしめるほどであった。

そのレビル將軍をルウム戦役で捕虜にしたのが、後に突撃機動軍第7師団第1MS大隊司令部付特務小隊のひとつとなった、通称「黒い三連星」の3人だった。教導機動大隊第2中隊D小隊に所属していたパイロットを中心として、開戦直前にガイア、オルテガ、マッシュの3人にメンバーを固定した「黒い三連星」はザクⅡC型を与えられてルウム戦役に参加していた。3人は卓越したコンビネーションと核攻撃を駆使して、次々と地球連邦軍艦艇を撃破。そして



▶ 地球連邦軍のレビル將軍を捕虜にした突撃機動軍の黒い三連星。彼らは三位一体の連携攻撃である「ジェット・ストリーム・アタック」を編み出した。

◀ ルウム戦役で5隻もの艦艇を撃沈したシャア・アズナブル中尉(階級は当時)。この戦役で彼はその名を敵味方に知らしめただけでなく、5隻以上の艦艇を撃沈した「シップス・エース」として名を馳せた。



述には、第1連合艦隊司令レビル將軍の乗艦だった旗艦“アナンケ”を撃沈したうえ、脱出を試みたレビル將軍を捕らえたのである。

他にも“ソロモンの白狼”シン・マツナガが戦艦1隻と巡洋艦5隻を撃沈、“真紅の稲妻”ジョニー・ライデンが戦艦3隻を沈めるといふ大戦果を挙げており、高練度パイロットとザクが生み出す破壊力を実証したのだった（彼らのふたつ名が付けられた時期は不明。他にも“青い巨星”ランバ・ラルが6隻の艦艇を撃沈したという説がある）。

しかし地球連邦軍の猛攻や核バズーカの爆発に巻き込まれ、多くのベテラン・パイロットが戦死してお

り、作戦形態によってはザクの無敵性が揺らぐこと、脱出装置の不備による生存性の低さも露呈した。またルウム戦役後のU.C.0079.01.31に締結された南極条約によって、NBC兵器の使用とコロニー落としが禁止されたため、ザクの性能にも制限が加えられたのだった。



一週間の戦争時と同じく、地球連邦軍にMSの攻撃を阻止する手段はなく、ルウム戦役でも多くの艦艇が失われることとなった。

MS-06 REPORT

ルウム戦役で名を馳せた スペシャル・カラーのザク

COLUMN 09

通常のザクⅡは緑系で、ザクⅠは緑と青で塗装されているが、赤系で統一されたシャア・アズナブル機のように特殊なカラーリングのザクも存在した。その多くは特殊任務機ではなく、優れた戦果を残した将兵や政治的地位が高いパイロットのパーソナル・カラーであり、ジオン公国軍が士気向上やプロパガンダの一環として許可したものである。

“赤い彗星”“青い巨星”“ホワイトオーガー”のように、ふたつ名に色が含まれるパイロットの乗機はほとんどがパーソナル・カラーで彩色されており、ジオン公国軍将兵にとってのステータスシンボルとなっていた。また、パーソナル・カラーで彩られた機体は基本的に高練度パイロットが搭乗しており、その存在はプロパガン

ダ放送や兵士の口を通して敵味方を問わず認知されていたため、味方を鼓舞すると共に敵の士気を低下させる効果が期待できたのだった。これも目視戦闘を強要されるミノフスキー粒子散布環境戦闘の影響と言える。



▲ルウム戦役時における黒い三連星の乗機はグレー系で塗装されていたといわれる。黒と紫のカラーリングになったのは、後に搭乗したザクⅡS型からと言われる。



▶高機動型ザクは生産数が少ないうえに、高練度パイロットに優先的に配備されることが多かった。そのため、パーソナル・カラーで塗られる割合が多かった。上はシン・マツナガ用の高機動型ザク。



▶司令や師団長などの高級軍人用のMSは、パーソナル・カラーで塗られただけでなく、装飾などが施されるケースもあった。右はドズル・ザビ専用機は、機体各所に装飾が施されている。



地球連邦軍宇宙艦隊を葬り去った 一年戦争緒戦の活躍

ザクの地球降下と快進撃

ルウム戦役でも戦略目的を達成できなかったうえ、新たなコロニー落としを実行する余力を残していなかったジオン公国は、休戦協定締結にも失敗した結果、地球侵攻作戦を実施せざるを得なくなった。

こうしてジオン公国は、U.C.0079.02.01に地球攻撃軍の設立を公表し、同月7日に地球侵攻作戦を開始した。この作戦で主力を務めたのが、ザクⅡF型から発展した陸戦仕様のザクⅡJ型である。他にも初期の作戦でF型が使用されたほか、後方支援用として陸戦用デバイスを装備したザクI B型も投入された。

月面のマスドライバーを用いた対地球攻撃後、同年3月1日に実施された第1次降下作戦ではザクⅡF型が投入され、中央アジアやロシアに展開した。F型は汎用機でありコロニー内戦闘にも対応しているが、地球上での陸戦能力は未知数であった。しかし、大重量離昇機HLV (Heavy-lift Launch Vehicle) やHRSL (Heavy Return Storm Launch) などに搭載

されて地球に降り立ったザクⅡF型は、破竹の勢いで進撃を見せたのである。

コロニー落としやマスドライバー攻撃によって地球連邦軍の弱体化と士気の低下が進んでいたこと、地球連邦地上軍がミノフスキー粒子散布環境下の戦闘に不慣れだったことなどが快進撃の一因である。だがそれ以上にザクⅡF型の性能特性——地球連邦軍の諸兵器を優越していた攻防力や機動性、低下していた地球連邦軍の士気を崩壊に導いた心理兵器としての巨体——が働いていたことは間違いない。

また、地球連邦地上軍が頼みの綱としていた61式戦車もザクⅡF型の前に敗走した。ザクⅡは人間並みのフットワークを持つため、通常の変戦距離な



▲第1次降下作戦にはF型が投入された。これらの中には後にJ型に改修された機体もあった。ザクⅡは地球降下作戦を通して、ジオン公国軍の主力として運用された。

■第1次降下作戦

03.01に実施された初の降下作戦。地球方面軍第1機動師団を投入、多数のHLV (400機とも言われる) を降下させた。中央アジアのバルハシ湖、アラル海付近に降下した部隊は、バイコヌール宇宙基地を占拠、この後、第1機動師団は部隊を二分すると、工業地帯となっていた黒海、オデッサ方面と石油資源が豊富な中東へと進襲した。4日にはマクベ司令が率いる資源探査部隊が降下している。これにより、中央アジアから欧州、中東にかけての広大な地域がジオン公国軍の勢力圏に組み込まれた。

■第2次降下作戦

北米の制圧を目的とした降下作戦で、03.11に実施された。北米大陸東岸と沿岸に降下した第2・第3地上機動師団 (ザクⅡJ型を装備) が、地球連邦軍の複合軍事施設と輸送地帯などを攻撃した。両師団は部隊を3つに分けると進軍を開始。13日にはキャリフォルニア・ベースを、15日にはニューヨークを勢力下に収め、18日頃には北米中部の制圧にも成功した。

■第3次降下作戦

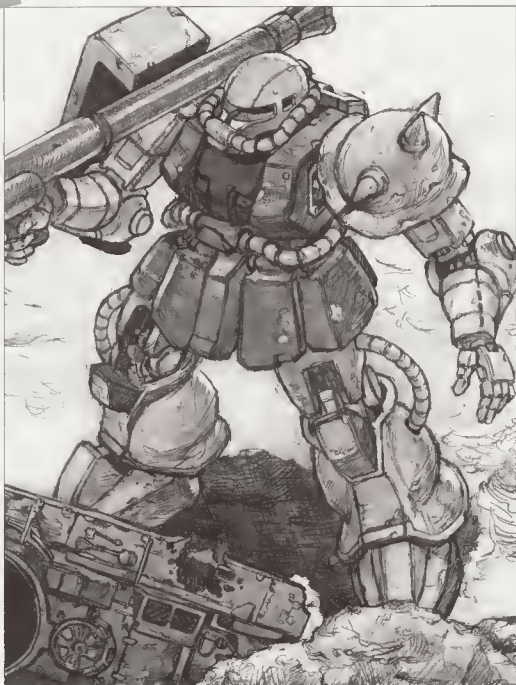
東南アジアやオセアニアの資源地域を確保するために行われた降下作戦。主力は第4機動師団が務めた。03.18に東南アジア、インドネシア、オーストラリアの3つの地域に降下した各部隊は28日には北進限界のインド、30日には南進限界のニュージーランドまでを勢力下に収めている。

■補充部隊降下

アフリカ大陸の攻めを目的した降下作戦。これまでのように「第00次」と付いていないのは、公国籍を持たない「外人部隊」が主力となっていたためである。04.04、北アフリカに降下したが、地球連邦軍の激しい抵抗を受け、作戦を難航。05.10になってようやくアフリカ中部への侵攻に成功している。なお、アフリカ地域の制圧によって、ジオン公国軍は地球の主要地域のほとんどを勢力下に置くことに成功した。

■事前陽動部隊降下

03.08、第2次降下作戦に先立ち、事前陽動部隊がメキシコへと降下した。多くの部隊は北上したが、一部の部隊はジャブラーを牽制するために南下した。



ら61式戦車の砲撃を回避でき、さらに頑強なシールドで直撃弾に耐えることができた。さらにザクⅡの120mmザク・マシンガンは装備位置の都合上、61式戦車の弱点である上面装甲を攻撃できるだけでなく、高速移動中の車両にも命中弾を与える火器管制システムを搭載するため、地球連邦地上軍がザクⅡに対抗するのは極めて難しかったのである。

このように凄まじい陸戦能力を発揮したザクⅡF型だが、ジオン公国軍はこれを上回る地球進攻用MSを用意していた。それが3月11日に実施された第2次降下作戦で初めて投入された陸戦仕様機、ザクⅡJ型だった。

F型から宇宙空間用の装備を排除し、大気圏内運

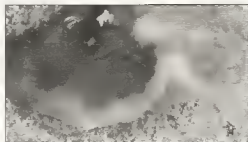
用装備を搭載したJ型は、理論上はF型以上の陸戦能力を与えられていた。「理論上」と言うのは、地球進攻作戦以前のジオン公国軍が、コロニーや月面でしか重力下試験を実施できなかったためである。それでもJ型は、F型以上に地球上に適応した機構を持つMSだった。

砂漠地帯や水圏への対応能力こそ十分とは言えな



◀第2次降下作戦以降はJ型が増加した。方向転換攻撃空母などの支援機も投入され、戦線の拡大に寄与した。

かつたが、山岳地帯や森林地帯、湿地などにも適応し、大半のエリアで高度な陸戦能力を発揮できたのである。こうした広範な陸戦能力は、空冷式反応炉や防塵・防水処理、大気圏内対応式モノアイ、対人用の接近防御兵器といった大気圏内運用装備によって確立されており、長期運用や故障率の低下に役立



▲無敵を誇ったザクⅡだったが、地球連邦軍の対MS特殊兵によって撃破されるケースもあった。しかし、これは局地的な戦果であり、体制に影響を及ぼすことはなかった。

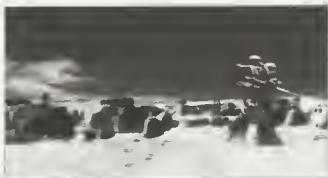
▲地球降下作戦における主力となったザクⅡJ型。F型とは内部構造だけではなく、一部の兵装も異なっていた。ザクⅡの運用性の高さを示すものと言える。



▶グリーン系のカラーで塗られているザクⅡJ型だが、迷彩塗装などが施された機体もあった。これは湿地やジャングルなどの視認性を低下させるための措置であったと思われる。

った。陸戦での必要性が薄いように思われた背部メイン・スラスターもkm単位のジャンプ能力を実現しており、瞬間的な高速移動やジャンプを併用した空対地攻撃など、一般的な地上車両とは別次元の性能をJ型に与えていたのだった。

こうした性能を得たザクⅡJ型は、地球連邦軍宇宙艦隊を撃滅したF型ほど派手な活躍こそ見せなかったが、高度な陸戦能力とF型に匹敵する多用途性により、各地で地球連邦軍を駆逐。瞬刻に地球の半分以上を制圧したのである。



▲一年戦争勃発時には既に旧式化していたザクⅡだが、地球降下作戦後は、後方支援用などとして、陸戦用に改裝したタイプが投入された。オデッサ戦でもザクⅡの姿が見られた。

▼地球連邦軍に傾く戦局と追い詰められるザクⅡ▲

ザク・シリーズを中心としたMS群を原動力として、地球の重要地域を次々と占領したジオン公国軍だったが、その快進撃はU.C.0079.04頃に急停止した。急激な戦線拡大によって補給が追いつかなくなり、戦線維持で手一杯になってしまったのである。国力に劣るジオン公国にとって悪夢となる、消耗戦の始まりだった。

第2次降下作戦で総合軍事施設群キャリフォルニア・ベースを占拠したジオン公国軍は、地上におけるMS開発／生産能力を拡大していた。しかしザクⅡをベースとした、または新設計の局地戦用MSの生産が始まったため、ザクⅡJ型の生産数はさほど増加せず、JB型やJC型といったサステイブが開発、



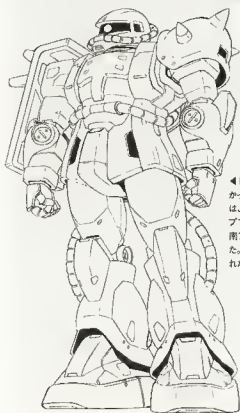
▲地球連邦軍製のMSの登場は、ザクⅡの戦術的価値を著しく低下させた。特にガンダム系MSは重力下でも高い性能を発揮し、ザクⅡで対抗することは事実上不可能であった。

生産されるに止まった。それでも数の上では、ザクⅡJ型系がジオン公国軍の陸戦用主力MSであり、各地の戦線を支えていた。しかし、戦争の進展に伴って無敵を誇ったザクⅡJ型にも欠点が指摘されるようになり、地球連邦軍のMSが実用段階に入るなど、様々な要因によってザクⅡJ型は追い詰められていった。

ザクⅡJ型で指摘された欠点の最もたるものが、戦術／戦略機動性の低さだった。二足歩行を移動システムとするザクⅡJ型は、戦闘時の速度や長距離移動能力に劣るのである。メイン・スラスターを用いたジャンプは戦闘レベルでは高い機動性を発揮していたが、戦術レベルでの長距離進出や高速移動に寄与していたが、連続使用ができないという問題があり、根本的解決策とは見做されなかった。

9月から実戦に投入され始めた地球連邦軍のMSも、ザクⅡJ型の価値を減じる要因となった。絶対数こそ少なかったが、初期に投入されたRX-78 ガンダムやRX-79[G] 陸戦型ガンダムの性能は明らかにザクⅡJ型を凌駕しており、主力化されたRGM-79 ジムも高性能MSだった。MS運用に関して一日の長があったジオン公国軍だが、地球連邦軍がMSの実用したことにより、それまでのような一方的アドバンテージを失ったのである。

これに加えて、半年におよんだ戦線膠着の間に再



◀F型からの改修機が多かったJ型だが、上の機体はJ型として開発されたタイプである。この機体は東南アジア戦線で多く見られた。シールドに取り付けられたスパイクが特徴。

編された地球連邦地上軍の存在も、ザクⅡJ型を脅かすことになった。実際、一年戦争のターニングポイントとなったオデッサ戦では、通常戦力を大幅に拡充しながらも、MS配備数は少なかったはずの地球連邦軍が勝利を収めている。これは地球連邦軍の圧倒的な物量や対MS戦術の高度化も一因と言える。しかし、地上でのMS——特に戦術／戦略機動性に難を抱えるザクⅡJ型——は、宇宙のおけるザクⅡF型ほどの絶対兵器ではなかったのである。艦艇級の大目標が多い宇宙戦とは異なり、大型のターゲットが少ない地上戦が駆逐兵器の傾向を持つザクⅡJ型の価値を減じていたとも考えられる。

こうしてジオン公国軍の新型陸戦MSの開発や、地球連邦軍の大規模反撃およびMS投入など、様々な複合要因がザクⅡJ型を追い詰めていった。しかし、MS-07 グフやMS-09 ドムといった高性能後発機と肩を並べて戦ったザクⅡJ型が、一年戦争後期の地上戦を支えたことは間違いないが、それゆえに名機として語り継がれているのである。



▲従来の兵器に対しては優勢ではあったが、地球連邦軍が戦力を回復させはじめると、物質に劣るジオン公国軍は押され始めた。質で量カバーするにも限界があった。



◀戦線の後退や補給の停滞に伴い、十分な整備を受けられないザクⅡも見られるようになった。破損した装甲を交換できず、そのまま作戦行動を取る機体もあった。



▶ジオン公国軍が絶死回生を図って実施したジャブロー攻陥作戦にも、多数のザクⅡJ型が投入された。しかし、ザクⅡ、そしてジオン公国軍に戦局を覆すほどの力は既になかった。



絶望的な一年戦争末期の戦況と ザクⅡF型シリーズの奮戦

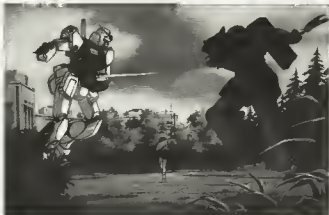
■統合整備計画準拠のF型直系機■

地球侵攻作戦によって主戦場は地球に移行したが、地球連邦宇宙軍が宇宙要塞ルナツーを拠点とした活動を続けていたほか、各地で反ジオン公国勢力がゲリラ活動を行っており、ジオン公国軍は対応に迫られていた。このためしばらくの間、ザクⅡF型が主力MSとして作戦行動にあたることになった。一時はMS-06R 高機動型ザクが次期主力MSとして選ばれたが、パイロットには不評で、生産性や整備、補給面にも問題があったため、F型が主力MSとして運用され続けたのだ。

しかし、そのF型ともアップデートが行われなかったわけではない。代表的なものでは高機動ザクから採用された脱出装置（射出シート）が採り入れられており、パイロットの生存性が大きく向上している。また、ザクⅡ自体が新型機器への換装を前提とした機体であること、生産施設や生産時期によって仕様異なるF型が製造されたことなどにより、様々なサスタイプが存在することになった（中には、JC型のようにダイレクトイン式のコクピットを採用したF型もある）。

このような機器レベルの換装に止まる改修機は、型式番号と機体名の変更は行われず「MS-06F ザクⅡF型」と総称されている。だが、中には型式番号が変更されたF型直系機も存在した。それが後期生産型のMS-06F-2 ザクⅡF2型と最終生産型のMS-06FZ ザクⅡ改（FZ型）である。

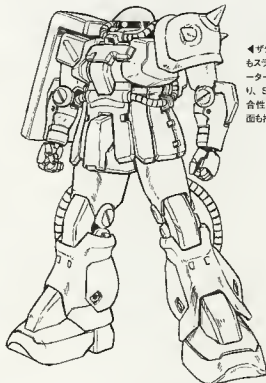
統合整備計画に準拠したF2型とザクⅡ改は、共に



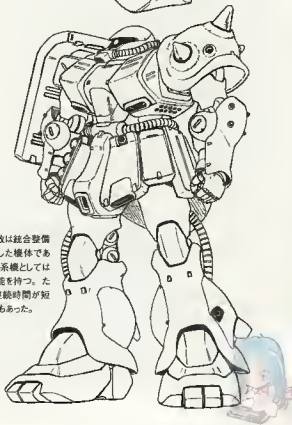
▲ザクⅡ改の中でもグラナダ基地に配備され、サイド6に投入された機体が知られている。RX-78NT-1 アレックスと相打ちになったエピソードは特に有名である。

第2期生産型と呼ばれる共通コクピットを持ち、マニピュレーターも計画準拠型MSの共通タイプとされた。これにより機種転換時の訓練期間が短縮でき、異機種間での兵装の共用も容易となっている。これに加えてF2型では胸部装甲の中心とした全般的な改良が行われ、ザクⅡ改ではスラスター推力の倍増とアボジ・モーターの増設によって機動/運動性が大幅に向上した。

F2型、ザクⅡ改共に一年戦争末期に生産されたため総数は少ないと思われるが、局地的戦線で活躍し、F型と共に敗色濃厚なジオン公国を支えたのだ。



◀ザクⅡF2型は、F型よりもスラスター推力やジェネレーター出力がアップしており、S型ほどではないが総合性能向上型としての側面を持つ。



▶このザクⅡ改は統合整備計画に準拠した機体であり、F型の直系機としては最高度の性能を持つ。ただし、戦時継続時間が短いなどの欠点もあった。

ジオン公国の最後とザクⅡF型の戦い

オデッサ戦以降、地球から駆逐されたジオン公国軍は、反撃に転じた地球連邦軍を撃退するため、宇宙要塞ソロモン、宇宙要塞ア・バオア・クー、月面基地グラナダを中心とした防衛網を展開した。一年戦争開戦からほぼ一年近くが経過した、U.C.0079.12のことであった。

長らく宇宙用主力MSとして運用されたザクⅡF型であるが、一年戦争後期に入ると性能不足が明らかとなり、次期主力MSが模索されるようになった。そ

の第一候補がビーム兵器を装備したMS-14 ゲルググであった。しかし、ゲルググの開発の遅延により、MS-09R リック・ドムが暫定的な宇宙用主力として採用、配備が進んでいた。しかし、戦線の後退と宇宙の最前線化は予想以上に早く、地球連邦軍の主力が宇宙に展開した12月の時点で、ゲルググは当然のことリック・ドムも十分な数が揃わなかった。そこでジオン公国軍は一線級とは言い難いザクⅡF型も投入して、地球連邦軍の撃退を図ったのである（戦争末期のジオン公国軍の戦力不足は、駆逐モビルボット

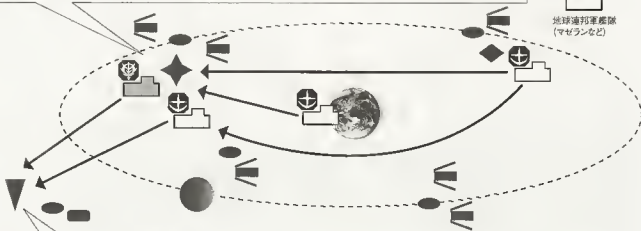
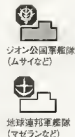


一年戦争末期の大規模戦二

■ソロモン攻防戦 (U.C.0079.12.24)

宇宙要塞ソロモン攻地を目指す地球連邦軍と、要塞に駐留するジオン公国軍中留攻撃軍の間で行われた戦闘。地球連邦軍は二方向から要塞を攻撃、対するジオン公国軍は戦力を要塞に集中させ、防衛線を展開した。一進一退攻防が繰り返されたが、地球連邦軍ティラム艦隊によるソーラ・システムの開射によって、

要塞に大ダメージを与えることに成功。形勢の不利を悟ったドズル・ザビ中将は、要塞の放棄を決定。自身は巨大MSビグ・ザムで出撃。地球連邦軍艦隊に損害を与えるも敵MSの攻撃によって撃破、中將も戦死した。この結果、ソロモン攻防戦は地球連邦軍が勝利し、ソロモンは「コンペイトウ」と名を変えた。



■ア・バオア・クー攻防戦 (U.C.0079.12.31)

ア・バオア・クーをめぐる地球連邦軍とジオン公国軍の戦いで、地球連邦軍側での作戦名は「星一号作戦」。作戦の前日に地球連邦軍はソーラ・レイによって主力艦隊の多くを失い、戦力を大幅に減じていた。その後、艦隊の再編を行い、翌日に作戦を実施した。

要塞を中心に展開するジオン公国軍に対し劣勢を強いられ、敵の指揮

系統の混乱や巨大空母ドワフの撃沈などにより、一部の部隊が要塞内への侵入に成功。要塞内外で戦闘が繰り返されたが、形勢は徐々に地球連邦軍に傾き、最終的には要塞内のミサイル工場で発生した火災によって電力の供給が停止、要塞は地球連邦軍が制圧した。この戦いで、ジオン公国軍総帥ギレン・ザビと突撃機動軍の司令官キラ・ザビ少将が戦死している。

の開発と配備を進めていたことから理解できる)。

こうして老朽化していたザクⅡF型は、12月24日のソロモン戦、同月31日のア・バオア・クー戦といった一年戦争の最終局面でも最前線に立つことになった。一年戦争の緒戦で絶対的威力を発揮したザクⅡF型は、戦争末期の時点でも対艦兵器としては優秀だったが、ソロモン戦やア・バオア・クー戦での

相手は地球連邦軍の主力MSジムであり、性能的な優位性もなかった。ザクⅡのハイエンド機である高機動型ザク・シリーズやザクⅡ改ならともかく、F型では高練度パイロットの搭乗や戦術面での工夫がなければ戦果は望めなかった。

実際ソロモン戦では目立った活躍はしておらず、ソロモン放棄時の将兵脱出に寄与したことが知られ

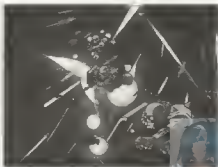


◀この黒いザクⅡは、コンペイトウ (旧ソロモン) を偵察し、地球連邦軍の攻撃目標を特定した。黒く塗られた機体色は、宇宙での偵察活動を考慮したものである。



◀ザクⅡF型はソロモン戦にも投入されているが、ソロモンの放棄が決定した後には将兵を牽引し、離脱を補助するシーンも見られた。

▶一年戦争最後の戦いとなったア・バオア・クー戦では、各機が連携を取った行動を見せるなど、フォーメーションを重視した戦法が見られた。



る程度である。これはソロモン陥落直前まで生き残ったザクⅡF型が多かったことを意味するが、性能が優れていたのではなく、第二線に配備されていたためと考えるのが自然だろう。

一年戦争の最後の戦いとなったア・バオア・クー戦でも、ザクⅡF型は多数が投入されている（コンペイトウ＝ソロモンへの偵察にも投入された）。ソロモン戦と違ってしたのは、高性能なリック・ドム部隊の後に続いて、集団で一撃離脱攻撃を仕掛けたことであった。これは性能やパイロットの質を補い最大の戦果を狙う戦法と言えるもので、一年戦争末期のザクⅡF型の戦闘技術としては極めて優れていた。しかし、ア・バオア・クー方面への地球連邦軍の浸透に伴い混戦となった結果、多数のザクⅡF型が失われたのだった。中にはルウム戦役を彷彿とさせる肉薄攻撃でサラミス級を撃沈した機体や、混戦状態にあっても連携を維持してフィールド防衛に貢献したザクⅡF型も見られたが、地球連邦軍の猛攻を止めることはできなかった。

ザクⅡF型が名機と呼ばれるに相応しいMSであり、かつて地球連邦を敗戦寸前に追い込んだ超兵器だったことは間違いない。だが、一年戦争の進展はザクⅡF型を一兵器に過ぎない存在としていたのである。こうして開戦以来、幾多の伝説を生み出したジオン公国軍のワークホースにして、「狭義のザク」たるザクⅡF型の一年戦争は終わったのだった。



▲ア・バオア・クー戦では、各フィールドに多数のザクⅡFが配備された。味方艦艇の撤退を支援するため、オングなどで編成されたカスベン戦隊大隊に協力した機体もあった。



▲数は少なかったが、ア・バオア・クー戦にはザクⅡFも投入されていた。既に一戦から退いた機体ではあったが、戦力不足を補完するため、奇襲隊に編入されたと思われる。

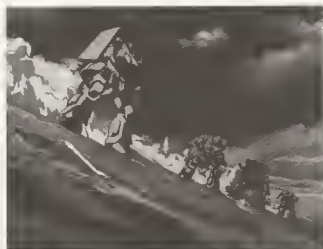


一年戦争後のザクⅡシリーズ

▼ジオン公国軍残党の活動と共にあったザクⅡ▲

一年戦争終結時、すでにジオン公国という政体は存在しておらず、U.C.0080.01.01に地球連邦との終戦協定を締結したのは、ジオン公国の後継国家たるジオン共和国であった。ジオン公国軍は共和国軍として再編され、MSを含む装備の多くも受け継ぐことになった。このため共和国軍は、ゲルググやリック・ドムのほか、F型やF2型といったザクⅡ系MSも保有することになった。

その一方で敗戦を認めず、各地に潜伏したジオン公国軍残党勢力も存在していた（終戦時、停戦命令を無視して戦闘を続けた部隊もあった）。その最大勢力が、アステロイド・ベルトの小惑星基地アクシズに逃げ延びた一派であった。アクシズでは来るべき地球連邦との戦争に備えて、新型機動兵器の開発を進めると共に既存のMSの改修も行っていた。改修機の中にはザクⅡF型も含まれており、アクシズ防衛や内戦で活躍したと言われている。U.C.0080年代後期に入ると、全天周モニターとリニア・シートへ



▲一年戦争後もジオン公国軍残党によって、多くのザクⅡが隠匿された。しかし、満足な整備も受けられないため、使用できるパーツを集めて稼働状態にしている機体も多かった。



▲デラース戦争では、ジオン公国軍残党が保有していたザクⅡ（F2型がほとんどだった）が投入された。しかし、大半が地球連邦軍との交戦で失われたとされる。

の換装、サフ・フライト・システムへの対応といった近代化改修が行われたザクⅡも見られたが、この頃になると新型MSが配備されていたため、後方支援用や予備戦力として用いられたようである。

MSの開発生産施設すら構築したアクシズと異なり、他のジオン公国軍残党は原隊を離脱した際に装備していたMSを維持するしかなかった。ザクⅡF2型と宇宙戦闘機ガトルの生産施設の一部を保有していたデラズ・フリートや、アナハイム・エレクトロニクス社との繋がりを持っていたシーマ艦隊なども存在したが、これは稀なケースと言える。多くの場合、あり合わせや闇ルートで入手した部品、または地球連邦軍から奪取した機材で整備・改良を行うか、複数の機体から状態の良い部品を抜き取って1機のMSを組み上げる「共食い整備」が行われていた。この共食い整備の代表例が、アフリカのキンバライド鉱山基地部隊のザクⅡF2型である。

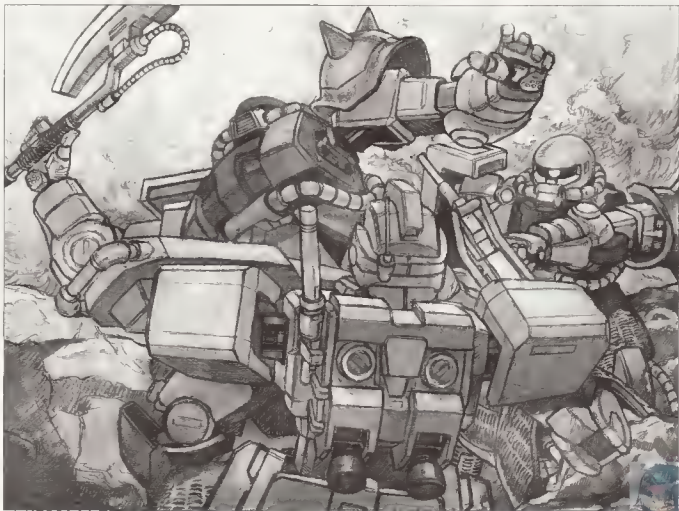
ノイエン・ピッター少将指揮下のキンバライド鉱山基地部隊は、一年戦争終結後の3年間、潜伏を続けつつMS部隊を維持していた。U.C.0083にはデラ



▶キンバライド鉱山基地に潜伏するジオン公国軍残党の指揮を執ったノイエン・ピッター中将。ブースター付きのF2型に搭乗し、デラズ・フリート追撃部隊を苦しめた。



◀地の利と敵戦力を分析したことで、戦術を有利に突く戦術を撃破寸前まで追い詰めるも、駆けつけたGP-01に撃破された。この戦跡でキンバライド鉱山基地に残されたF2型などのMSの多くが失われた。



ース・フリートが実施した「星の屑」作戦に呼応してMS部隊を投入し、地球連邦軍のアルビオン隊を足止めした結果、全MSを失っている。この際、MS-09F/TROP ドム・トローベンと共に陸戦仕様のザクⅡF2型も多数投入され、アルビオン隊に肉薄したのだった。この「星の屑」作戦は、地球へのコロニー落としを意図したものであり、宇宙でも多数のジオン公国軍残党が関与することになった。この際、他のジオン公国軍系MSと共に多数のザクⅡF2型が参戦し、地球連邦軍と交戦することになった。

また、U.C.0084.04.30のバンガー工業争議では数機のザクⅡF2型が投入されたが、これらは地球連邦軍特務部隊ティターンズに鎮圧されている。また、グリプス戦役勃発前後にはジオン公国軍残党勢力の

F型改修機がティターンズ・テスト・チームと交戦したと言われている。

U.C.0088~89の第一次ネオ・ジオン戦争でも、ザクⅡF型と思われるMSが確認されているほか、木星航路に出発したネオ・ジオン残党がビーム・バズーカを装備したザクⅡを使用したケースが知られる。このように、一年戦争終結から10年を経て戦争や低強度紛争においてもザクⅡの姿が確認されることがあり（F型直系機に限らなければU.C.0090年代にも例がある）、ジオン系組織がなくなる限り、ザクは運用され続けるのかも知れない。

▶一年戦争の終結から数日間、ア・バオア・クー内部に立て籠もっていたF型。中破状態ではあったが、最初期のジオン公国軍残党のザクとして知られている。



▲ビーム・バズーカを装備したザクⅡ。ジュビトリスに避難しようとしたMSを攻撃する部隊が使用していたMSのうちの一例。



◀U.C.0080年代後半にも近代化改修を受けたザクⅡが運用されていた。しかし、新型MSとの性能差は歴然であり、戦闘能力など全ての面で劣っていた。



▲ネオ・ジオンによるダカール制圧時に投入されたザクⅡ。ネオ・ジオンが保有していた機体が彼らに会演したジオン公国軍残党が保有していた機体かは不明。



▲第一次ネオ・ジオン戦争の直後、木星航路に出現したザクⅡは、ビーム・バズーカ以外にも特殊な形状のサブ・フライド・システムを装備していた。運用相違などは不明。

MS-06
REPORT

地球連邦軍に鹵獲されたザクIIと一年戦争中、戦後の運用

一年戦争の緒戦において、MSの威力を体感した地球連邦軍はザクの鹵獲を目指した。これは地球連邦軍のMS開発だけでなく、運用方法の模索や特殊戦用としても必要なものだった。ジオン公国軍の地球侵攻作戦展開中にザクII J型を手に入れた地球連邦軍は、6機の鹵獲ザクIIと2輦の61式戦車から成る部隊（セモベンテ隊、隊長フェデリコ・ツァリアーノ中佐）を編制し、U.C.0079.04から05にかけて北米で作戦行動を行っていた。戦後にも戦力拡充や技術／戦技研究のため、ザクIIシリーズに代表される鹵獲MSを多数配備しており、その内の何機種かが近代化改修が施されグリプス戦役でも運用されている。

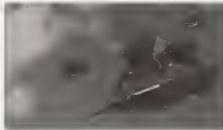
鹵獲機ではないが、訓練用やコンピューター・シミュ



▲鹵獲したザクIIを用い、北米に所在するジオン公国軍の物資集積所を襲撃していたセモベンテ隊。敵の電撃以外に、地球連邦軍によるMSの運用法の研究も目的であったと思われる。

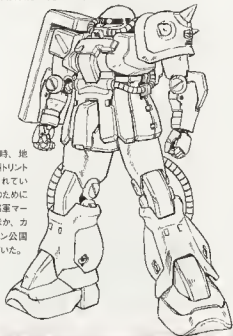


戦後、地球連邦軍では、ザクIIを訓練機やアグレッションとして配備していた。しかし、ジオン公国軍残党との戦闘時には、真先に標的とされて撃破された。

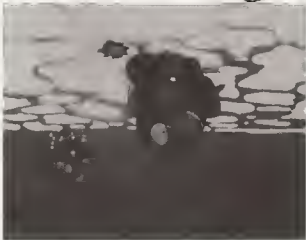


◀ジオン公国軍が「ベズン計画」によって開発していたMS-11「アウト・ザク」は、戦後、地球連邦軍に接収され、オーガス研究所などに配備された。

レーション用としてデータ化されたMSも存在している。地球連邦軍では一年戦争期からMS用シミュレーターに用いられたほか、グリプス戦役期にはデータ上でMSとの模擬戦も行われたようである。



▶U.C.0083当時、地球連邦軍の泰州トリントン基地に配備されていたF2型。識別のために背部に地球連邦軍マークが付けられたほか、カラーリングもジオン公国軍機とは異なっていた。

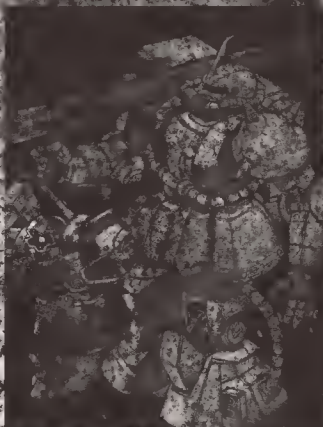


▲上海特務が後援していたマリン・ハイザック。水中では高い性能を誇ったものの、ガンダムMk. IIとの戦闘によって撃破されている。



▲エウゴのアーガム隊では、シャア・アズナブルが操縦したザクII S型のデータがコンピューター・シミュレーションで再現された。クワトロ大尉がシミュレーションでこれに敗れている。





CHAPTER 03

ザク・バリエーションの開発





高性能化や局地対応化を求めた ザク・バリエーションの開発

研究、実践の中で露呈した問題

実戦型MSの嚆矢となったザクⅠは、誕生の時点で宇宙空間とコロニー内の双方に適応した全領域対応兵器であった。その後継機であるザクⅡではそれをさらに推し進め、わずかなパーツ交換やセッティングの変更によって、地球上の諸環境に対応可能、特殊任務仕様で改修できる汎用性と拡張性を獲得していた。これに加えて、一年戦争の緒戦で実証されることになる戦闘能力は、連邦軍宇宙艦隊を寄せ付けないレベルに達しており、当時最強の域に達していたことは間違いない。

しかしこれは、ザクが完全無欠の兵器だったという意味ではない。ザク、特にザクⅡは出力や汎用性、稼働時間、運用・支援を含めた総合的システム化など、あらゆる面でザクⅠを上回るMSであった。また、一年戦争開戦以前から、ミッションによっては作戦行動時間のさらなる延長や特殊機能／装備の必要性が考えられていたほか、高練度パイロットからはハイスpek・タイプを求める声も上がっていた。さらに地球進攻作戦の決定に伴い、地球上における運用能力の確保がクローズアップされるなど、単純性能や局地戦対応能力での強化が求められていたのである。汎用性を追及されたザクⅡF型であっても、さすがにこれだけの要求を満たすのは不可能だった。特にコロニーとは比較にならない過酷な環境となる地球上での長期運用には、比較的多くの仕様変更が必要なることも判明しつつあった（これはザクⅡの高度

な汎用性と拡張性が、必ずしも具体的なプランに基づいていなかったことを示している）。

そこでジオン公国軍では、一年戦争開戦以前からザクⅡC型やザクⅡF型などをベースとする高性能型や局地戦用型の開発が進められた（局地戦用MSの開発自体はザクⅡのロールアウト以前に開始されていた）。結果、ザクⅡS型に代表される高性能仕様機やザクⅡJ型などの局地戦用が実用化されることになり、一年戦争開戦後の実戦で大きな戦果を挙げた。これはザクⅡの拡張性を示すことになったが、戦争の長期化と激化、ジオン公国軍の予想を超えた過酷な地球環境、そして次世代機実用化までの橋渡しとなるMSの必要性は、ザクⅡにより一層の高性能化と局地戦能力を求めることになっていくのである。

本章では、こうして誕生したザクⅠやザクⅡの派生機、いわゆる“ザク・バリエーション”と関連デバイスの開発を、その経緯や技術的側面を含めて解説していく。この中でザク・バリエーションの多様性だけでなく、ザクⅡの驚くべき拡張性や冗長性、そしてその限界が理解できる。



▲陸戦用デバイスを搭載したザクⅡJ型への改修や、キャノン砲などを搭載した特殊仕様のランドセルの装備などが一般的な改修手段となった。



▲ザクの高性能化は早い段階から進められた。その結果、S型などの性能向上型が開発され、エース級パイロットの力を引き出すこととなった。



▲アクト・ザクのように「ザク」という名称は持つが、機体形状が完全に変わってしまったバリエーション機も開発された。





局地戦用MSの開発に貢献した ザクIのバリエーション

■局地戦用MSの嚆矢となった、陸戦対応のザクI

U.C.0076.12、ジオン公国軍が地球侵攻作戦を前提とした局地戦用MSの開発に着手した。これ時期に、ザクIIロールアウト以前（設計開始以前の可能性が高い）ということからも分かるように、最初期の局地戦用MSのテストベースとなったのはザクIであった。

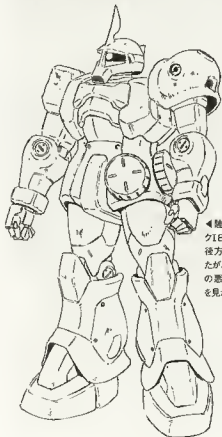
ザクIはザクIIと異なり拡張性を考慮した設計ではないため、高度な局地戦対応能力の追加は難しいと思われる。しかし、当初はあまり過酷な環境への適応は難しかったこと、ザクI以外に実用レベルのMSが存在しなかったことなどから、ザクIが試験対象として選ばれたと考えられる。

こうして開発された最初期の局地戦用MSが、陸戦用デバイス搭載のザクIB型（以下、便宜上「陸戦型ザクI」と記述する）だった。局地戦用MSと並行して開発された陸戦用デバイスを試験的に装備した機体であり、U.C.0076.12に生産されたランパ・ラル機がこれに相当する。ただしこの機体は、後に開発された陸戦専用のザクIIJ型とは異なり、汎用機の陸戦対応能力を高めたものと考えられており、真

の意味での局地戦用MSではなかった。実際、陸戦用デバイスを搭載されたはずのザクIB型ランパ・ラル機は、宇宙で運用されたと言われる。型式番号がMS-05Bから変更されなかったのも、この辺りに理由があるのかもしれない。

陸戦型ザクIで得られたデータは、ザクIIJ型や新に設計された陸戦用MSの開発に反映されたようで、技術系譜上の存在意義は大きかった。また実戦力としてはともかく、地球侵攻作戦における補助任務や後方支援用としては十分な性能を持っていたためか、陸戦型ザクIは地球に投入された。なお、本機が陸戦用デバイス搭載型として新規に生産された機体か、従来機を改修したものか、それともザクIIJ型のような陸戦専用機なのかは不明である。

当然、ザクIIJ型と比較しても戦闘能力に劣ったが、戦力不足の部隊では止むを得ず戦闘任務に使用されたほか、古参の中には陸戦型ザクIを好む将兵も見られた。オデッサからの撤退MS小隊を率いたトップ、特殊実験部隊「闇夜のフェニル」隊所属のベテラン下士官マット・オースティン軍曹、「インビジブル・ナイツ」隊長エリック・スランケ少佐らが陸戦型ザクIのパイロットとして知られている（スランケ機は戦後のゲリラ活動で使用されたものである。ザクIIのパーツで改修されており正確な型式番号は不明）。



▲陸戦用デバイスを搭載したザクIB型。地球降下作戦後は、後方支援などが主な任務であったが、一年戦争後期には戦局の悪化に伴い前線でのその姿を見かけることがあった。



▲ザクIB型には、防塵、防水処理のほか、対人用の近接防衛兵器も搭載しており、大気圏内ではザクIIJ型に次ぐ運用能力を有していた。



▲ザクIB型はオデッサ戦やそれ以降にも、戦闘任務に投入されるケースが見られた。しかし、地球連邦軍のMSと比較して性能差は歴然だった。

■高性能型、特殊用途型のザクI■

陸戦型ザクIが仕様変更にも拘らず型式番号を変更されなかったように、「MS-05B ザクI」でありながら一般的なザクI B型とは異なる性能を持った機体が存在するという説もある。

それが「黒い三連星」が搭乗したザクI B型である。「黒い三連星」はルウム戦役後、ザクII S型や高機動型ザクR-1Aタイプといった高性能機を乗り継いだ。U.C.0079.04に教導機動大隊で行われた特別教習では、ザクI B型に搭乗して新兵を教育したと言われている。

このザクI B型は「黒い三連星」のパーソナル・カラーである黒と紫で彩色された機体で、通常機がタイプ3のヒート・ホークを搭載するところを、ザクIIと同じタイプ5を装備するなど、その性能はザクIIに迫るものだったと言う。これはザクII S型のような正式な高性能型ではなく、教導機動大隊の新人整備士たちがレストアした機体に過ぎなかったとされる（他にも出力系の再調整によって、タイプ5のヒート・ホークを使用できるザクI B型は存在する）。しかしその一方で、型式番号が変更された高性能型ザクIが存在したとも言われている。

それがMS-05S ザクI S型で、ザクII S型のような大気圏内外両用の万能汎用機と考えられている。ザクI S型を与えられたパイロットとして、高機動型ザクR-2タイプやザクII FS型といった希少なMSを任されたギャビー・ハザード、そして「闇夜のフェンリル隊」の司令官に就任したグラート・シュマイザーが挙げられる。シュマイザー大尉（階級は当時）は「スリテツシュ作戦」時、ニューギニアの地球連邦軍防空基地攻略に参加したと言う説があるが、この際に搭乗していたのがザクI S型だった。

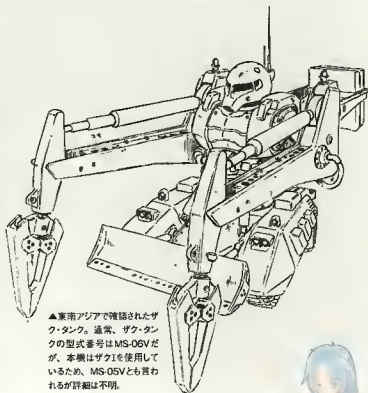
これらのザクI B型「黒い三連星」機やザクI S型のような総合性能向上型ザクIが普及しなかったのは、広く普及したザクIIの方が運用性に秀でていたためと考えられる。拡張性でもザクIIが優れていたためザクIの派生機は少ないが、中でも特異な存在がMS-05L ザクI・スナイパータイプである。

陸戦型ザクIの改修機と思われるザクI・スナイパータイプは、地球連邦軍のRGM-79SC ジム・スナイパーカスタムのような総合性能向上型では

なく、長距離狙撃に特化したMSだった。これはU.C.0079.11のオデッサ戦以降、サイド3本国からの支援をほぼ打ち切られた地球攻撃軍キャリフォルニア・ベースが、長距離狙撃任務用として開発した機体とされる。

ザクI・スナイパータイプの特筆すべき点は、長距離狙撃用として大火力のビーム・スナイパーライフルを搭載していた点である。これは、ジオン公国軍初のビーム兵器搭載型汎用主力機、MS-14 ゲルググの技術を転用することで完成したもので、遠距離からでもMSを撃破可能な威力を持っていた。ただしザクIはビーム兵器を稼働可能なジェネレーター出力を持たないため、MS-14C ゲルググ・キャノンの技術を用いたサス・ジェネレーター内蔵式ランドセルを搭載している（それでもチャージングタイムや冷却時間に問題があった）。また、遠距離の目標を捕捉するためにMS-06E ザク強攻偵察型と同系統の大型モノアイが、狙撃姿勢を安定させる目的で右膝部にジャッキタイプの格納式ニーパッドが追加されるなど、遠距離狙撃任務に対応するために各所に様々な改修が行われた。

改造母機にザクIが選ばれたのは、狙撃用装備が頭部やランドセルを換装するタイプだったため内部拡張性が低いザクIでも対応できたことが一因である。そして何よりも、戦闘用としてはほとんど使



▲東南アジアで確認されたザク・タンク。通常、ザク・タンクの型式番号はMS-06Vだが、本機はザクIを使用しているため、MS-05Vとも言われるが詳細は不明。



用されていなかったため、前線任務中のザクⅡを引き抜いて改造するより効率的だったことも理由として挙げられる。つまりMSのリサイクルというわけだが、リサイクルMSの究極形として知られるMS-06V ザク・タンクにも、ザクⅠが流用されたタイプがある。

ザク・タンクは、余剰となったザクの上半身とマゼラ・ベースを合体させた現地改修の作業用MSで、通常はザクⅡの上半身が使用される。しかし東南アジアではザクⅠの上半身を流用したザク・タンクが確認されており、珍しいケースとして知られている。



ザクⅡバリエーションの開発① 地球侵攻作戦と局地戦型のザクⅡ

■理論値のみで開発されたザクⅡJ型▲

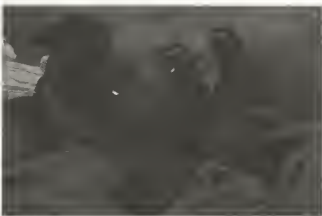
これまでも説明してきたように、ザクⅡF型は極めて良好な汎用性を持った機体で、無改造で宇宙とスペース・コロニー内の各種任務に対応、さらに地球上での運用すら可能であった。しかし、地球上はコロニー内のように整備された環境ばかりではない。数千mを越える山々が連なる峻険な山岳地帯、昼夜の極端な温度差と砂埃に悩まされ続ける砂漠、視界と移動能力を制限される森林、地球表面の7割を占めながらも船舶以外の移動が困難な海など、その多彩さと過酷さはコロニー内の非ではない。しかも、平野ですら機器の故障を誘発する塵埃、遠望時の計算を狂わす大気層といった問題があり、地球上でザクⅡF型を長期運用する際の足枷となることは明らかだった。

もちろんジオン公国が地球への軍事侵攻を想定しない組織なら、地球がいかに過酷な土地であろうと関係はない。しかし、ザクⅠの配備によって対地球連邦戦争を遂行可能と判断したジオン公国は、地球侵攻作戦を決定した。その決意を如実に物語るものが、U.C.0076.12に着手された地球侵攻作戦用局地戦用MSの開発である。こうして進められた局地戦用MS開発計画とザクⅡF型の完成を受けて開発された機体が、来るべき地球侵攻作戦初期の主力となったザクⅡJ型だった。新設計機ではなくザクⅡF型の改修機が選ばれた背景には、完全新設計の局地

戦用MSを開発するだけの技術基盤が確立されていなかったこと（開発自体は進められていたが、新設計の局地戦用MSは地球侵攻作戦の開始に間に合わなかった）、ザクⅡF型の生産ラインを流用できること、既存のザクⅡF型からの改修が可能なおことなどが理由であるが、陸戦型ザクⅠで陸戦用デバイス搭載機のデータが得られたことも一因と考えられる。

しかし、一年戦争開戦前のジオン公国軍は、コロニー内や月面といった擬似的な重力下環境しか確保できなかったため、実地に即した局地戦用MSの実働データは得られなかった。そこでジオン公国軍は勢力圏内の擬似地球環境でのテストと、地球環境を想定したコンピュータ・シミュレーションを繰り返し、局地戦用MSの開発を行っていた。

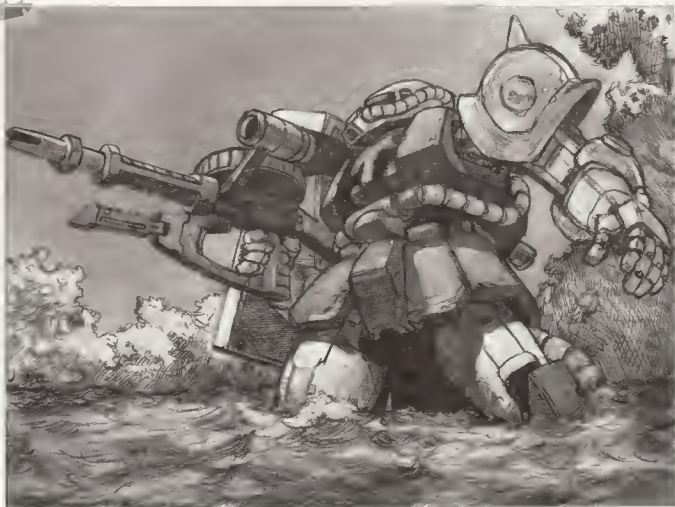
ザクⅡJ型にはこれらのデータが反映されたほか、F型からの宙間運用装備の撤去、大気圏内運用装備の追加が行われた。F型からの具体的な変更点として、空冷式反応炉MYFG-M-ES系J21-M3ESJ型への換装（インテークの内部構造やフィルターなどが変更）、背部熱核推進器ノズルの小口径化、防塵・防水処理の強化、モノアイおよび計測系ソフトウェアの大気層対応化、AMBACシステムの廃止、重力下対応ソフトウェアの追加、関節部の強化、足底部および腰腹部スラスターの廃止とそれに伴う脚部1/0



▲原型機となったF型は宇宙用の機体であるため、J型のコクピットも高い密閉性を有しており、短時間であれば水中戦も可能であった。



◀水中戦が可能ではあったが、水陸両用MSではないため、時間の経過と共に機密度が低下、漏水する危険性があった。



ポートと対地センサーの追加、エアロック式コクピットの廃止、接近防御兵器の設置などが挙げられる。

ただしこれらの変更は全てのJ型に適用されたわけではなく、足底部スラスターやエアロック機構が残された機体も確認されている。これは生産時期や生産工廠、Je型やJC型などのサスタイプ、純正のJ型とF型からの改修機といった違いによって生じた差だと考えられている。

推進器関連が簡略化されているのは、地球上では脚部での「歩行」が主な移動手段となるため、推進器の使用頻度が低下すると考えられたことに因っている。脚部の動力源である熱核反応炉は、長期間燃料交換の必要がないため、ザクII J型の活動限界時間はF型よりも延長できたのである。また、弱体化したように見える推進器も大気の影響や反作用を考慮したモデルで、長距離ジャンプを可能にするなど必要十分な性能を与えられていた。

こうして陸戦対応能力を与えられたザクII J型だが、上述の通り地球上での実働試験が不可能だったため、その性能は理論上のものでしかなかった。し

かし、第二章で解説した通り、地球侵攻作戦の進展と共に地球上に投入されたザクII J型は、F型以上の陸戦能力と大気圏内対応能力を発揮し、圧倒的戦闘能力で連邦地上軍を撃破していった。

ザクII J型の完成を受けたジオン公国軍は、U.C. 0078.10の時点でF型の生産ラインを使用して80機あまりのJ型を生産していた。だが、対地球連邦戦争の開戦に必須のF型の生産が優先されたためか（地球連邦宇宙軍の脅威度が低下した後、F型をJ型に換装すればよいという判断もジオン公国軍内部であつたと考えられる）、本格的な生産はU.C. 0079.02の地球侵攻作戦開始後となった。また第2次降下作戦で制圧したキャリフォルニア・ベースでもJ型の生産は行われているが、生産数は多くなかった。



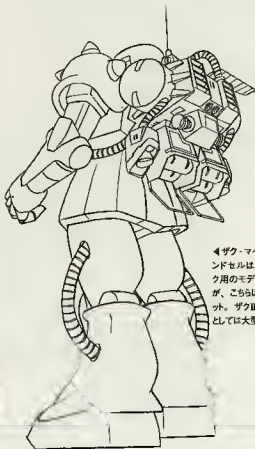
◀ J型では、脚部にレ・Oポートを設けることで、拡張装備の搭載を可能とした。これにより、F型よりも電力消費が可能なようになった。この点もJ型の特徴と見える。

ザクⅡF型とJ型のランドセル換装派生機

ランドセルの換装による多用途化を目指したMSとしてゲルググが有名だが、ジオン公国軍はザクⅡの時点で既にランドセル換装機構を盛り込んでいた。ザクⅡのものはゲルググほどシステマチックではなかったが、高度な汎用性と拡張性を確保する一環として採用され、ランドセル換装による派生機も生まれている。

F型のランドセル換装仕様機として知られるのが、MS-06F ザク・メインレイヤーである。これは型式番号が変わっていないことから分かるように、機雷散布ユニットや高性能通信機、大容量プロペラント・タンクなどが一体化したランドセル以外は、ほぼノーマルのF型と変わっていない。ザク・メインレイヤーを、通常のF型に換装するのも容易だったと言われている。

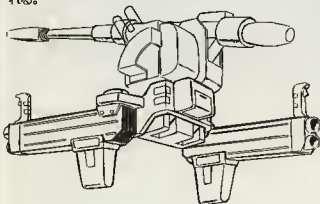
他にも、プロペラント・タンク6本を増設して稼働時間延長を試みたものの、試験中に爆散した試作プロペラントユニット搭載のザクⅡ、一年戦争緒戦でコロニー減速作業に投入されたと言われる長時間作業対応機（正式名称不明）、4本の作業アームを持つランドセル



◀ザク・メインレイヤーのランドセルは、高機動型ザク用のモデルにも似ているが、こちらは機雷投下ユニット、ザクⅡ用のランドセルとしては大型である。

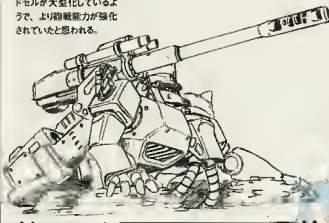
を搭載したMS-06MP ザクⅡマニピュレーションアシシステム仕様などが、F型系のランドセル（および周辺機器）換装仕様機と考えられる機体である。

J型の直接的なランドセル換装仕様機は知られていないが、J型への対空砲搭載プランと連邦軍のキャノン・タイプMSの情報から誕生したMS-06K ザク・キャノンは、ランドセル換装機構の恩恵を受けたMSだった。試作段階でMS-06J-12の型式番号を与えられていたことから理解できるように、J型の系譜に属するザク・キャノンは、180mmキャノン砲を装備した陸戦用支援MSである。この180mmキャノン砲はランドセルに搭載され、これを換装すればJ型と同様の運用が可能となっていた。また、MS-14C ゲルググ・キャノンのようなビーム砲搭載仕様が戦後の地球連邦軍で採用されたと言われるが、ザクⅠ・スナイパータイプの例を見る限りは、それも不可能ではなかったと思われる。



▲ザク・キャノン用のランドセル。推進器としての機能を廃し、キャノンや弾装、スモーク・ディスチャージャーを搭載した砲戦用ユニット。ユニット下部には、増加兵装のビッグガンが装備できる。

▼東南アジア方面で稼働されたザク・キャノン・北米で運用された機体よりもランドセルが大型化しているようで、より稼働能力が強化されていたと思われる。



▼究極の局地に挑んだ派生機Ⅰ：水中艦▼

優れた陸戦能力を発揮しつつ、地球環境への対応能力も見せ付けたザクⅡ（特にJ型）だが弱点がなかったわけではない。地球上における過酷な環境の双壁と言える、海洋と砂漠地帯への適応性がほとんどなかったのである。

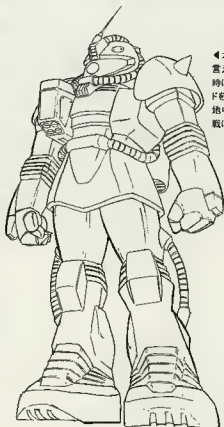
地球侵攻作戦開始以前から、MSには海や湖、河川といった水圏への対応能力が求められていた。地球表面の7割を占める水圏は、地球攻略において極めて重要な意味を持っており、ジオン公国軍は早い時期から水圏用MSの開発を進めていた。つまり地球侵攻作戦を開始してから水圏用MSの必要性に気付いたのではなく、それ以前から局地戦用MSの開発の中で計画自体は進めていたのである。ジオン公国軍にとって幸運だったのは、サイド3には「海」という名称で呼ばれる海洋コロニーが存在したことで、他の局地戦用MSと異なり地球に近いテスト環境が確保できたのだ。

その結果、開発された機体こそ水陸両用MSの嚆矢となったMS-06M（MSM-01）水中用ザクである。水中用ザクは、その名からも分かるように潜水活動で大前提としたMSだった。本機は、コバンタント（水上艦）や水パークラフトのように水上を航行するのではなく、サスマリンのように海面下での運用を第一義としていたのだ。ジオン公国軍が洋上型ではなく水中型の水圏対応MSを開発した理由は分かっていないが、水中では宇宙と似た三次元戦闘が原則となるため、ジオン公国軍が有する空間戦のノウハウが活かせると考えられたとも言われる、また、海洋戦力に決定的に劣るジオン公国軍にとって隠密性が高く、海戦と上陸戦に使用できる多機能な水中用MSは有用と判断されたとも推測できる。

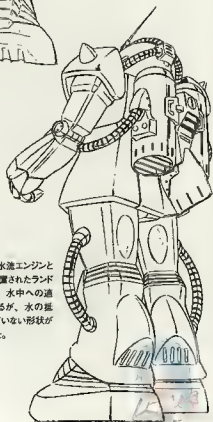
こうして水中用ザクは、水中行動に必要な気密性を確保するため宇宙用のザクⅡ（A、C、F型のいずれかのタイプと思われる）をベースに開発が進められた。その手段はシンプルなもので、空間装備の排除と大気圏内用装備が追加されたザクⅡJ型と同じように、水中用装備への換装が試された。具体的には水流エンジン搭載ランドセルの装備、胸部および脚部への補助推進器搭載、バラストタンク（排水と注水によって機体の浮上や沈下、姿勢制御などを行

なう装置）の後面集中配置、姿勢に拘らず直立と水平をキープできるコクピットの採用、関節部などへの防水シールドの装備が挙げられる。

これらの処置によって45ノットもの水中最高速度とザクⅡJ型以上の水中適性を実現した水中用ザクだったが、水圏用の主力MSとして採用されなかった。関節部を中心とする防水シールドが上手く機能しなかったこと、ザクⅡ系特有の露出式動力パイプやあまりにも人間的な形状、手持ち式火器が水の抵抗を増大させたため、機動性に優れないことなどが理由であった（開発当初はともかく、途中から水陸両



◀水陸両用MSの嚆矢とも見える水中用ザクは、試験時に地球連邦軍のモビルスーツを格闘戦で撃破したほか、地中海侵攻作戦において実戦に投入されている。



▶背面には水流エンジンと方向舵が設置されたランドセルを装備。水中への適性を高めるが、水の抵抗を考慮していない形状が顕著視された。

用MS開発のテスト機と見做されるようになっていた)。また陸戦能力も低く、これが「水陸両用ザク」ではなく「水中用」と命名された理由かもしれない。

こうして戦力化を見送られた水中用ザクは、水流エンジンや水中戦用兵装のデータ収集に利用され、水陸両用MS開発で大きな意味を持つことになった。生産数は当初5機、後に2機が増産されて計7機となり、戦後には地球連邦軍が生産したようである。

▼究極の局地に挑んだ派生機Ⅱ：砂漠編▼

水圏並みに過酷な環境である砂漠地帯への対応は、地球侵攻作戦開始後に模索され始めたようである。

陸戦における万能機に思えたザクⅡJ型だったが、砂漠地帯や熱帯での性能は充分でなかった。ジオン公国軍は砂漠や熱帯への適応能力にも秀でた新型陸戦用MS、つまり後のグフの開発を進めていたが、その配備まで時間が掛かることは明らかだった。そこでジオン公国軍は、新型陸戦用MS配備までの繋ぎとして、ザクⅡJ型をベースに砂漠・熱帯対応能力を高めた改修機を開発、生産させた。北米のキャリフォルニア・ベースで開発と生産が行われたこの派生機こそ、MS-06D ザク・デザートタイプである。

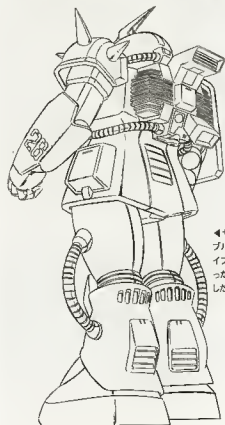
ザクⅡJ型からの改修点として、出力向上と軽量化、砂漠での機動性強化を狙った腰部および脚部補

助推進ユニットの搭載、空冷式ラジエーターを露出させたランドセルの採用、防砂用関節パッキンの装備などが挙げられる。また、頭部へのバルカン砲内蔵とマルチスレードアンテナの標準装備化（額部単装式のシングル・アンテナタイプと、左右側面連装式のダブル・アンテナタイプがある）、前腕部や腰部への火器搭載機構の追加、実戦データに基づいた部分的な増加装甲の装備、砂漠戦を前提とした兵装の開発なども実施された。

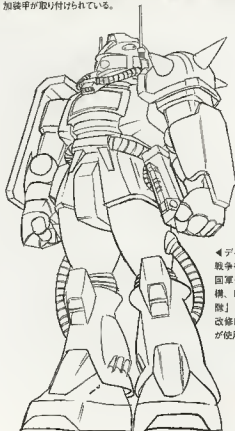
マルチスレードアンテナの標準装備はグフに先んじた画期的なもので、これにより短距離通信能力が強化され、連携戦闘能力も向上している。また各種



▲ザク・デザートタイプは、空冷式冷却ターボを搭載したランドセルを装備する。それ以外にもふくらはぎ部の推進器などの特殊機構が見受けられる。また、左前腕には増加装甲が取り付けられている。



◀ザク・デザートタイプのダブルアンテナ仕様。このタイプは、テスト部隊でもあった「カラカル隊」が運用したことで知られている。



◀デザート・ザクは、一年戦争後、アフリカのジオン公国軍残党やアフリカ解放機構、トワレグ族の「青の部隊」などが仕様したタイプ。改修には地球連邦軍の資材が使用されたといわれる。



装備によって高度な潜砂能力も得ており、待ち伏せや奇襲で効果を発揮したようである。

これらの装備を施されたザク・デザートタイプは、当初こそ熱帯地帯での戦闘能力も期待されたが砂漠戦用MSとして完成し、全機がアフリカ戦線に配備されることになった。その砂漠戦能力は絶大であり、ザク・デザートタイプを受領した部隊として有名な“ピンクパンサー”隊は、サハラ砂漠からジスラルタル海峡までを制圧し、欧州への橋頭堡の確保に貢献している。こうしてザク・デザートタイプは、グフやドムが配備されるまでの砂漠戦用機として充分な性能を発揮したのだった。

このように環境特化型のザクⅡバリエーションとしては成功例となったザク・デザートタイプは、合計

114機が生産されたと言われる。その内訳は、初期にシングル・アンテナタイプとダブル・アンテナタイプがそれぞれ43機、その後ほとんどの機体がシングル・アンテナタイプに統一されると共に増産された28機となっている。

本機の現地改修機として、“砂漠のロンメル（デザート・ロンメル）”ことロンメル中佐の専用機というMS-06DRC デザート・ザク・ロンメルカスタムが知られる。戦後には、アフリカに潜伏したジオン公国軍残党がMS-06D デザート・ザクと呼ばれる改修タイプを使用した。これはジオン公国軍残党だけでなく地元の反連邦勢力でも運用されており、ザク・デザートタイプを直接改修した機体なのか、何らかの組織が増産したものなのかは分かっていない。

MS-06
REPORT

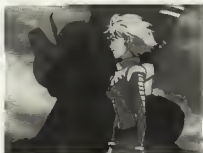
MSの運用限界を押し上げた大気圏内用支援システム

MSに戦術・戦術機動力を付与した航空機

熱核ロケット・エンジンを用いた航宙機や、ムサイ級に代表されるMS運用艦の存在から、一年戦争当初は宇宙におけるMSの機動性はあまり問題視されなかった（「ベズン計画」ではスクートと呼ばれるMS用航続距離延長ヴィークルも開発されている）。しかし、一年戦争時のMSは大気圏内での自由飛行能力を持っておらず、ザクⅡは二足歩行が基本的な移動方法だったため、地球上での戦術・戦術機動力が問題視されるようになったのである。

ジオン公国軍はこの解決策として、MS単独の機動性を向上させたホバー走行式MSの開発を進める一方で、MSを搭載して飛行する航空機の開発も実施した。その結果、実用化された機体、ガウ級攻撃空母と要撃爆撃機ド・ダイYSだった。

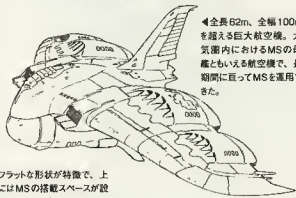
第2次降下作戦から確認されているガウ級は、MS3



◀グフ系MSの中にはグフ・フライトタイプのように限定ものではあるが、単独での飛行能力を持つ機体もあった。しかし、一般化は長らく実現しなかった。

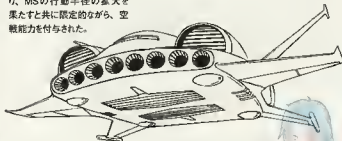
機を搭載可能な格納庫を持つ巨大航空機である。他にも戦闘機ドップを8機搭載でき、航空爆弾やミサイル、メガ粒子砲といった武装を持つ多目的航空機であり、MSの長距離進出や運用だけでなく航空支援すら可能であった。ザクは高度数百mからの降下が可能なために、着陸しなくともMS部隊を展開できるのも利点であった（MSの回収には低空飛行や着陸が必要になる）。

もう一方のド・ダイYSは、MS1機を露天状態で搭載したまま飛行可能な航空機で、機体サイズは通常の航空



◀全長62m、全幅100mを超える巨大航空機。大気圏内におけるMSの母艦ともいえる航空機で、長期間に亘ってMSを運用できた。

▼フラットな形状が特徴で、上面にはMSの搭載スペースが設けられている。本機の登場により、MSの行動半径の拡大を果たすと共に限定的ながら、空戦能力を付与された。



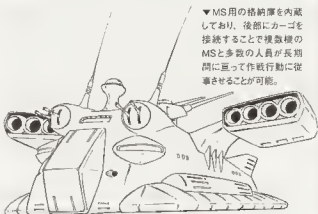
機とさほど変わらない。元々、要撃爆撃機として設計されていたド・ダイYSだが、熱核ジェット・エンジンの推力が極めて大きかったため、MS搭載能力を追加された。搭載MSはグフが想定され、実戦でもグフとの共同運用例が多いがザク・シリーズも搭載可能で、MSの機動性を大きく向上させた。

なおド・ダイYSの「MSを露天状態で搭載する航空機」という発想は画期的なもので、一年戦争後にはド・ダイ改やベース・ジャバーといったサブ・フライト・システムが広く普及することになった。

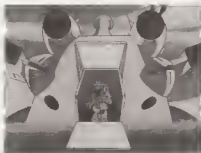
地上車両による機動力向上

航空機と比較すれば移動速度に劣るが、低コストで特定位置に留まることができるというメリットを持つ地上車両も、ジオン公国軍MSの機動性向上に一役買っていた。代表的な地上車輛として、陸戦艇ギャロップと装輪トレーラーのサムソンが知られている。

陸戦艇ギャロップはホバー走行式のMS母艦と言える地上車両で、小隊規模のMSを搭載、運用可能であった。指揮所や連装砲といった戦闘関連設備だけでなく、居住区画などとして使用できる「カーゴ」を連結可能であるため、長期間の運用に耐える点も移動式MS基地としての価値を高めている（MS運用型陸戦艇にしては小型に見えるのは、カーゴによって戦闘区画と居住区画が分離されるためである）。



▼MS用の格納庫を内蔵しており、後部にカーゴを接続することで複数機のMSと多数の人員が長期間に亘って作戦行動に従事させることが可能。



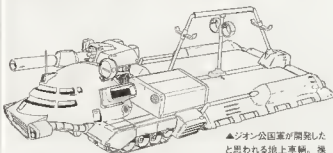
◀正面にMS格納庫に接続したハッチを持つなど、MSの運用母艦に近い構造を持つ。作戦室は脱出船として機能する。

サムソンは全長20m級の荷台を持つ巨大装輪トレーラーで、MS1機を搭載したまま移動が可能。整備施設を持たないためMSの長期運用は難しいが、消耗率が高い脚部に負担をかけずに長距離移動が可能なのがメリットである。牽引車サムソン・トップも比較的大型で防衛火器も搭載しており、小規模部隊による短期行動では有用な車両と言えた。

ギャロップとサムソンの中間的な車両として、MS数機を露天状態で搭載可能な装軌車両ザク・タンカーがあり、一年戦争後にはアフリカのゲリラ組織で使用されたことで知られる。移動式指揮所兼火力プラットフォームとして使用されたダブデ級陸戦艇の小型版とも言え、本来はMSの機動力向上を目的とした兵器ではないようだ。



▲基本的にはMS運用用のトレーラーだが、サムソン・トップは簡易格納施設として使用されるほか、ホバーにより軽装軌車輛としても機能する。



▲ジオン公国軍が開発したと思われる地上車輛。操縦席に加え指揮所を持つほか、充實した火器類を装備している。第一次ネオジオン戦争時の使用が確認されている。



◀キャタピラとホバーを併用するため、高速での移動は不可能。ギャロップのような簡易移動拠点として運用するために開発されたとされる。



ダブデ級陸戦艇の甲板には、MSの搭載用のステップが設けられていた。しかし、これら防衛用の機体の搭載スペースとも考えられる。





高機動・高性能化への挑戦と ザクⅡシリーズの限界

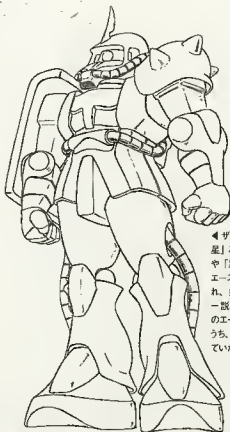
■エースが求めた高機動・高性能機、ザクⅡS型■

水中用ザクやザク・デザートタイプといった外観を大きく変更された局地戦用MSが開発される一方、ザクⅡJ型のようにF型とほぼ同じ外見を持つバリエーションも開発されている。そういった派生型の代表が、機動性を中心に総合的な性能を向上させたMS-06S ザクⅡS型である。ルウム戦役やRX-78-2ガンダムとの初期の戦闘で使用された、“赤い彗星”シャア・アズナブルの赤いザクⅡが、ザクⅡS型の代表例として知られている。

ザクⅡS型のような高性能機が必要となった背景には、高練度パイロットたちからの要求があった。これはザクⅠ時代からのものとされ、機動性の向上、通信能力の改善、稼働時間の延長、機体乾燥重量の低減、四肢の可動レスポンスの改善などが求められたと言われ、中でも機動性や駆動性に関する要求が強かったようである。

一年戦争開戦前に主力化されていたザクⅡは、核兵器運用仕様のC型、汎用タイプのF型共にザクⅠを超える総合性能を獲得していたが、これも高練度パイロットたちを満足させるものではなかった。そこでジオン公国軍は、U.C.0076の局地戦用MS開発着手時に提案されていた高機動型MS（後のMS-06R高機動型ザク）の設計思想に基づいて、ザクⅡF型をベースとした高機動・高性能機の開発を進めたのだ。この結果誕生したのがザクⅡS型である。

ただし、ザクⅡS型の開発には一定の制限が課せられていた。機体形状や内部機器をF型から大きく変更してはならなかったのである。一年戦争開戦前後までのザクⅡは、定数確保の必要性から生産性を重視する傾向があった。このため外観を中心とした



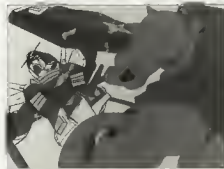
◀ザクⅡS型は「赤い彗星」ことシャア・アズナブルや「黒い三連星」といったエース級パイロットに与えられ、数々の戦果を挙げた。一説によるとジオン公国軍のエース級パイロット8人のうち、4人がS型を愛用していたといわれる。

仕様的大幅変更は難しく、ザクⅡS型は最小限の改修で最大限の高性能化が目指されたのだった。

こうした制約があったが、スラスター推力の30%強化、軽量性と高出力を共存させるためのMYFG-M6ESX型熱核反応炉への換装、プロペラントタンクの大容量化、構造材への特殊材料採用、マニピュレーターの高性能化などの改修が行われた。これらの改修にも拘らず、ザクⅡS型の外見はF型とほとんど変わっていなかった。実際、F型と90%以上の部品共有率を持ち、運用設備もほぼそのまま流用できたのだ。

こうした改修の結果、ザクⅡS型の機動性はF型を凌駕し、パイロットによっては「3倍」と言われるほどの機動力を発揮できるようになった。その高機動力を司る中核が、強化された推進器群である。

推進器および内部機器の変更によって、ランドセルと腰腹部の形状は多少変化しと言うが、メインスラスターはMIP社によって設計仕様が変更されており、その効果は絶大なものがあつた。ある説によると、ザクⅡS型の最大噴射時の旋回半径は100m、この時の重力下速度は14.2Gとされる（データは航空機表現による理論値）。これはF型の最大噴射時旋回半径70m、重力加速度11.6Gと比べて旋回性能に劣るよう見えるが、同一時間での旋回完了角度はF型が約240度、S型が約300度となっており、



◀ザクⅡF型の性能を極限まで引き出したS型は、RX-78 ガンダムに匹敵する機動性を発揮。さらにエース級パイロットが操縦することで、高度な戦闘能力を見せた。



加速度だけでなく旋回速度でも上回っているのだ。なおこの際の移動距離はF型が約145m、S型は約260mで、単純速度でもS型の圧倒的な優位は変わらなかった。

こうした機動/運動性の追求は、F型用と比較して5%ほど軽量化されながらも、最大出力継続時間が約20%延長された熱核反応エンジンMYFG-M5ESX型(2基搭載。定格出力はF型用と同じ)や、プロペラントタンクの大容量化といった形でも達成されている。しかし、高出力化したスラスターに十分な稼働時間を与えるプロペラントタンクの大容量化は、F型から機体形状を大きく変化させないという設計コンセプト上、困難な課題だった。

そこで開発陣は内部容積を確保するため、F型にあった機器を排除するという手段に採った。こうして、各種のオート機能を統括制御するパーツが取り外された。当然、代替装置は搭載されているが、これは自動制御機構の性能低下を引き起こしかねない可能性を秘めていた。実際、AMBACシステムの自動制御が扱い難くなり、低練度パイロットではまともな作戦行動は不可能だったと言われる。

しかし、これはリミッターを解除できることを意味しており、マニュアル操縦の介入余地を大きく広げることに繋がった。この機能は高練度パイロットに好評であり、限界まで性能を引き出すことも不可能ではなくなった。シャア・アズナブルがルウム戦役で見せた「シャア五隻飛び(艦艇の甲板を蹴って加速を続け、敵艦5隻を次々と撃沈した)」も、この機能に因るところが大きかったと言われる。

他にもザクⅡS型の高性能を担保する機構として、F型以上の重力下対応能力、レスポンスとトルクを向上させた強化型の流体バルス・システム、医療機器メーカーのオスカログ精機の技術提供により「卵を潰さずに割る」と言われるほどの高精度触感センサーを備えたマニピュレーターなどが採用されている。また、通信機能や索敵能力の強化(出力強化と受信した情報の解析能力向上を含む)のためアンテナ基部の構造などに変更が加えられたほか、モノアイのスラッシュアップも行われたとされており、指揮機能や自律行動能力も向上することになった。

MS開発系譜上の意義も大きく、S型で培われた技

術は機動性向上を徹底された高機動型ザクや後発のMSにも転用された。しかし、F型の機体形状を維持したままでの性能向上が限界に達していたことも露呈しており、ジオン公国軍のMS開発は分岐点を迎えることになったのだ。

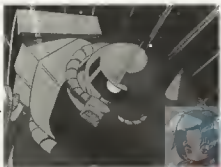
ザクⅡS型の開発時期は判然としにくい。ザクⅡC型の量産開始(U.C.0078.01)から少し遅れて生産が始まったという説があるが、S型はF型の改修機であるためこれは少し早過ぎる。また、実戦配備はU.C.0078後半に集中していたという説や、生産時期は一年戦争勃発前後の4~5ヶ月に集中しているという説があるが、指揮官クラスの高練度パイロットを中心に配備されていったことは間違いない。総生産数は100機程度と言われている。

余談だが、S型以外にもF型系のアッパーバージョンはいくつか存在している。その代表例が、頭部に40mmガトリング砲4門を追加し、白兵戦能力と陸戦能力を強化したMS-06FS ザクⅡFS型である(生産ラインから引き抜いた完成度の高いF型を改修した機体とも、F型とS型のハイスリッドカスタム機とも言われる)。他にも右肩シールドをスパイク・アーマーに換装すると共に、コクピットの大型化を図ったザクⅡF型ドズル・ザビ機などのパーソナルカスタム機も製作された。しかしこれらの機体は、高性能機というより高級機に近い存在で、必ずしも高練度パイロットを満足させるものではなかったようである。



◀ S型も最初期は一部パーツの交換がなければ重力下で十分な性能を発揮できなかった。その後はセッティングの変更程度で対応可能になったと言われる。

▶ S型は指揮官機としての運用も想定されていたため、マルチブレードアンテナを標準装備している。通信機能はザク・デザートタイプから付与されたとも言われる。



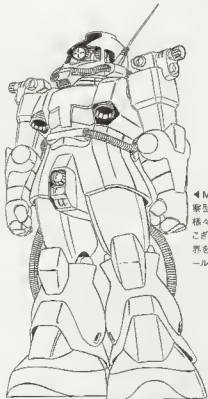
MS-06
REPERT

S型とほぼ同時期に開発された特殊用途型のザクII派生機

偵察仕様のザク

既に述べたように、一年戦争開戦以前からジオン公国軍は様々な仕様のザクIIバリエーションを開発していた。中でも比較的早い時期に開発された機体が、偵察仕様のMS-06E ザク強攻偵察型である。

ザク強行偵察型は、機動性や装甲（生存性）に優れたMSを偵察任務に転用するアイデアから生まれた。ザクII C型をベースとして、F型の生産ラインで製造されたザク強攻偵察型は、モノアイの大型化と肩部および股関節への光学カメラの増設や手持ち式カメラ・ガンの装備により優れた索敵能力を獲得している。これに加えて、武装の排除とそれに伴うプロペラントタンクの10%拡張、一部装甲の減格による軽量化、ザクII S型用をベースとした改良型スラスターの搭載、胸部への緊急離脱



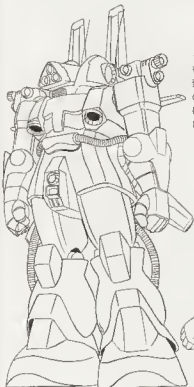
◀ MS-06E ザク強行偵察型は、C型をベースに、様々な改修の末に生産にこぎつけた。上部への視界を得るため、モノアイが拡張されている。



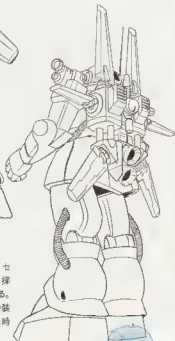
◀ グリプス戦役期にはティターンズによって運用され、月面都市アンマンへの偵察に用いられた。リニアシートに換装したことで、ヘビースーツは不要となったようだ。

用バーニア増設などによって機動性にも優れていた（これらの機構は段階的に採り入れられた）。その機動性はザクII S型や高機動型ザクすら上回っていたようで、パイロットには耐G処置を重視したヘビースーツの着用が義務付けられるほどであった。

最初期型偵察用MSとしては高い完成度を誇ったザク強攻偵察型だったが、偵察手段が光学的なものに限られていたことなどから、一年戦争中期になると改良型のMS-06E3 ザク・フリッパーが開発された。これは頭部を三連カメラに換装したほか、レーザーや超音波、ミノフスキー物理学を応用した背部折り畳み式複合探知システム（ブーム・センサー）を搭載しており、広範囲かつ精密な探査を可能としていた。また、推進剤用のセパレート・タンクを装備可能なほか、増速ブースター「バース」が作戦区域までの移動に多用されるなど、機動性向上も図られている。なお「フリッパー」は、ブーム・センサーの動きから点けられた愛称であった。



◀ E型の頭部とランドセルを中心に改修した機体。頭部は原型を留めないほどの改良が施され、口吻部にザク系の名残を留めるだけとなった。



▶ ランドセルにはブーム・センサーが取り付けられ、探知能力が向上している。セパレート・タンクなどの装備も可能で、作戦行動時間の延長も図られた。



パイロット育成用のザクⅡ

MSパイロットの訓練は初期こそシミュレーターで行うが、最終的には実機が用いられた。一年戦争開戦前のジオン公国軍は、MSの絶対数の問題からか、教習訓練専用MSは持っていなかったようで、戦闘仕様と同等のザクⅠやザクⅡに訓練生ひとりが乗り込み、各種訓練を行ったと考えられている。

しかし、一年戦争緒戦で多くのベテランパイロットを失った結果、訓練をより重視するようになったようで、教官と訓練生がふたりで乗り込むタイプの教習訓練用MSが開発されることになった。それがMS-06T 教習訓練用ザクで、同じ型式番号で仕様が異なるタイプも存在したようである。

一年戦争初期に製造された機体は、ザクⅡC型から改

造されたタイプが主流だった。この機体は教官用コクピットが増設されたほか、頭部モノアイが縦に2基、独立して配置されていたと言われる。

MIP社が参入すると、ザクⅡF型を基に新たな仕様の教習訓練用ザクが開発された。これは胸部左右に張り出した形で教官用と訓練生用のコクピットが設けられたほか、胸部上方には左右に走査域を持つモノアイが増設された（胴体には固定バルカンも追加装備している）。頭部はF型と同じである。胸部と頭部のモノアイは、各コクピットに対応して別個に操作でき、教習内容によっては訓練生が教官の動きをトレースするのに使用された。

機体各部には発光バンパーが設けられているが、これは対MS戦を想定した新規装備で、遮蔽物を利用した機体隠匿訓練などに用いられたとされる。

ザクⅡの到達点にして限界点、高機動型ザク▲

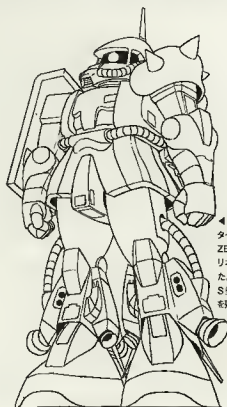
ZEONIC社の開発陣は、ザクⅡの高度な汎用性が戦闘能力を低下させていると考えていた。これはザクⅡF型の基本フォーマットを維持したままでの高性能化を追求したS型が、その制約ゆえに高機動化に果たせず、汎用性も同時に高めていたことから理解できる。そこで開発されたのが、汎用性を放棄してまでも宇宙用に特化した純戦闘型高機動仕様機、つまりMS-06R 高機動型ザクであった。

「汎用性を放棄」と言うことは、水中用ザクやザク・デザートタイプと同じくザクⅡF型からの形状逸脱を意味し、開戦頃までの生産性を重視する方針とは異なる傾向を示している。高機動型ザクの試案は、U.C.0076.12の局地戦用MS開発開始時に提案されていたが、局地戦用MS開発自体が地球進攻作戦を前提としていたこと、その後のジオン公国軍が生産性重視方針を採ったことなどから、実機の開発は行われていなかったようである。しかし、南極条約の締結によって戦争の長期化が決定的になると、宇宙戦力増強の必要性が増したと考えられ、開戦から1ヶ月を経て高機動型ザクの開発が開始されたのだった。

最初に製作されたのがMS-06RP 高機動型ザク・プロトタイプで、ザクⅡF型から2機が改修された。F型からの主な改修点は、ランドセル、腰部、脚部

の3箇所であるが、中でも変更が著しかった部位がランドセルと脚部であった。

ランドセルは大推力ロケットと大容量プロペラントタンクが設置されたほか、ジェネレーター出力の向上も担う複合ユニットとなった。形状も標準的なF型用から大きく変わっているが、ジェネレーター出力向上を含めた増加ランドセルはザクⅡの仕様に含まれているもので、それを最大限に活かしたに過ぎない。むしろ、それまでのザクⅡと異なる傾向を



▲高機動型ザクのプロトタイプ。テストパイロットはZEONIC社から出向したエリオット・レム中佐が務めた。中佐はザクⅠやザクⅡS型の開発でも大きな功績を残した。



示していたのは脚部であった。

脚部は、膝から下に3基の大型スラスターが設置された。F型も脹脛部にサススラスターを搭載していたが、これはAMBACシステムの補機としての側面が強く、推進力の強化は限定的なものであった。しかし高機動型ザクの脚部は、偏向推進器としての機能が重視されており、機動性および運動性を飛躍的に向上させたのである。結果、歩行機能は必要最低限に抑えられたが、宇宙専用という高機動型ザクの仕様上、問題にはならなかった。

こうして見ると改修や換装は推進器関連に集中しているように思えるが、実際には全面再設計機と言えるほどの大規模改修が必要になった。まず、スラスターの大推力化と増設に伴い、ランドセルだけでなく腰部や大腿部に大容量プロペラントタンクを搭載しなければならなかった。これに加えて、爆発的

な推進力に耐え得る機体強度の確保、大質量化した脚部に対応したアクチュエーターの強化、ザク・バズーカを超える火器（ジャイアント・バズ原型機や試作に止まった420mmロケット・バズーカなど）の運用能力の追加、MS-03で廃止された脱出装置の再搭載といった処置が施されている。

こうした改装で、高機動型ザクの空間戦能力は、ザクⅡS型をも凌駕するものとなった。グラナダでの2週間に亘るトライアルの結果、推進剤消費量にごそ問題を指摘されたが、ジオン公国軍首脳部の評価は高く、ザクⅡF型の後継機となる次期主力MSとして量産が決定された。こうしてロールアウトしたのが初期量産型のMS-06R (-1) 高機動型ザク（ザクⅡR型）で、22機が製造されている。

しかし、F型との部品共有率が高かったS型と異なり、徹底的な設計変更を施した高機動型ザクは生



産性に問題を抱えていた。しかも、製造を急いだためスラスターを中心としてパーツの精度が低かったうえ、大幅な設計変更は整備、補給面でも混乱を引き起こしてしまったのである。試験時に判明していたことではあったが、短時間で燃料切れを起すこと、前述のパーツ精度の低さから操縦不良が頻発したこと、S型と同等以上に操縦が難しかったことも、パイロットからの悪評に繋がった。

その後、ジオン公国軍はクオリティ・コントロールを見直してパーツを高品質化すると共に、ランドセルおよび脚部プロペラントタンクのカートリッジ化を施したMS-06R-1A 高機動型ザクR-1Aタイプを開発している。なおR-1Aタイプの総生産数は56機で、それとは別にRタイプの内10機がR-1Aタイプへと改装されたのだった。それでも高コストと燃料消費の問題は決定的な解決策が見出されず、高機動型ザクの主力化は見送られたのだった。

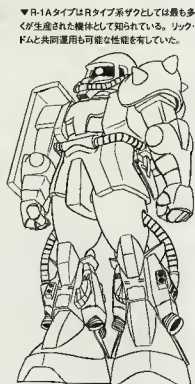
しかし、S型以上の機動性は高練度パイロットには好評であり、「黒三連星」の3人や「ソロモンの白狼」シン・マツナガ大尉、エリック・マンスフィールド中佐やマサヤ・ナカガワ中尉、「修羅の双星」のひ

とりロビン・スラッドジョー中尉といったエースたちが、R-1Aタイプを駆って大きな戦果を挙げたことで知られている。

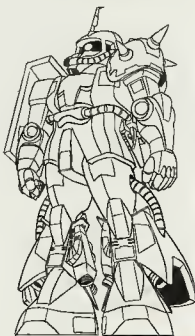
また、ビーム兵器の搭載を目指したMS-06R-2P 高機動型ザク・ビーム兵器搭載型や、その改修機にして「ザクの皮を被ったゲルググ」とまでいわれた超高性能機MS-06R-2 高機動型ザクR-2タイプが開



▲大型化したランドセルやスラスターが増設された脚部など、F型からの改修点が分かる。



▼R-1AタイプはRタイプ系ザクとしては最も多くが生産された機体として知られている。リック・ドムと共同運用も可能な性能を有していた。



▲R-2型はRタイプ系ザクの中では最も高い性能を持つ機体である。開発された4機（5機との説もある）のうち、一機がMS-06R-3ゲルググ先行試作型に改装された。

■高機動型ザク・シリーズの変遷■

名称	前身機からの主な変更点*
MS-06RP 高機動型ザク・プロトタイプ	<ul style="list-style-type: none"> ▶宇宙戦用への特化（汎用性の低下） ▶大推力ランドセルへの換装 ▶ジェネレーター出力の向上（コ・ジェネレーターの搭載） ▶脚部の大推力スラスター化（歩行機能の簡略化） ▶脚部内へのプロペラントタンク増設 ▶腰部の大型化（プロペラントタンクの増設） ▶アクチュエーターの高トルク化 ▶基本フレームの変更（機体強度の向上） ▶装甲材質の変更 ▶腕部関節機構の変更（搭乗者による微調整が可能なタイプ） ▶超ザク・バズーカ級大型火器の搭載能力 ▶射出コクピット（射出シート）の復活
MS-06R (-1) 高機動型ザクRタイプ	<ul style="list-style-type: none"> ▶420mmロケット・バズーカの採用 ▶後部マルチブレードアンテナの廃止 ▶スラスターを中心とした新設計部分の不良（歩調まりの不安定）
MS-06R-1A 高機動型ザクR-1Aタイプ	<ul style="list-style-type: none"> ▶Rタイプにおける初期不良の改善 ▶ランドセルおよび脚部燃料筒のカートリッジ化
MS-06R-2P 高機動型ザク ビーム兵器搭載型 （事実上のR-2タイプのプロトタイプ）	<ul style="list-style-type: none"> ▶ビーム兵器の搭載（達成できず） ▶MS-11（後のゲルググ）用試作ジェネレーターの搭載 ▶ジェネレーター換装に伴う胸部形状の変更 ▶ランドセル固定用ステーの変更 ▶脚部装甲の追加（R-2タイプからとも）
MS-06R-2 高機動型ザクR-2タイプ	<ul style="list-style-type: none"> ▶ビーム兵器搭載の断念 ▶ジェネレーターの仕様変更、簡略化 ▶胸部形状の変更 ▶装甲材質の高品質化 ▶燃料搭載量の増加（R-1Aタイプから18%の増加） ▶格闘戦用バーニアの一部強化 ▶ダイレクティブ式（直接対峙式）コクピットの採用

*高機動型ザク・プロトタイプはF型からの変更点で、高機動型ザクRタイプでの変更点を含んでいる可能性もある。

発されており、その性能は後発機に劣るものではなかったのである。特に“深紅の稲妻”ジョニー・ライデン少佐やギャビー・ハザード中佐、ロバート・ギリム大佐らのエースパイロットに任されたR-2タイプは、高練度搭乗員が操縦するR-1Aタイプと共に、一年戦争後期の戦場で恐るべき威力を発揮した(R-2タイプの1機は、“修羅の双星”のカート・ラズウェル中尉に与えられたとも言われる)。

だが、高機動型ザクの究極形と言えるR-2タイプも、MS-09R リック・ドムとの競争試作に敗れた結果、4機(5機とも言われる)が製造されたのみであった。これは政治的判断によるものだったが、ザクⅡをベースとした改修発展が限界を迎えていたことも確かだった。ジオン公国軍を支え続けたザクⅡも、兵器としての寿命が尽きようとしていたのである。

▼一般パイロット用の汎用高性能機▲

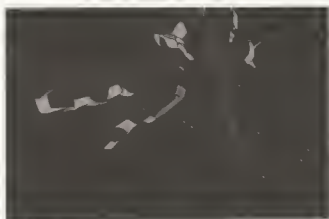
高機動型ザクの開発開始とほぼ同時期にあたるU.C.0079.02、突撃機動軍のマ・クベ少佐(当時)の提言により「統合整備計画」が実施された。この計画は、あらゆるMSの基本フォーマットを統一することで、生産性の向上、異機種間の互換性の確保、機種転換訓練の短縮などを狙ったものだった。マ・クベ少佐の言葉を借りるなら「ザクの生産ラインを基

本としてMSの開発を行う」ということである。

ただし開発・生産時期の問題から、全てのMSが統合整備計画に沿って開発されたわけではない。同じMSシリーズの中でも計画準拠型と非準拠型が混在することになった。ザクⅡF型で言えば、計画に準拠していないのが初期のF型、準拠しているのが2章でも紹介したF2型(後期生産型)とザクⅡ改(FZ型、最終生産型)である。

ザクⅡには利点がないように思える統合整備計画だが、計画準拠型の多くは統一仕様第2期生産型コクピットと、ビーム系以外のほぼ全ての兵装を共用可能な統一マニピュレーターを搭載していた。これにより各MSの操縦方法が統一されたうえ、兵装の互換性も確保されていた。また、各種パーツの互換性も高くなっていることから、後発機のパーツを採り入れることで性能アップを図れることもメリットと言える。

こうした計画の恩恵を受けて再設計されたF2型とザクⅡ改は、F型と同格の位置付けにありながら、互換性と性能の双方が向上されている。特にザクⅡ改は、ジェネレーター以外はほぼゲルググという状態で、その基本性能は飛躍的にアップしていた(ゲルググ自体、統合整備計画の影響下で開発された機体のため、このような設計が可能になった)。しかも運



▲他機種との統一マニピュレーターの採用や胴体自体を強化したことにより、ジャイアント・バスのような強力な火器の使用が可能となった。



▲高性能機であり、相当数が生産されていたため、加齢軍単位で戦線に投入された。この運用性の高さがR型やR型との決定的な違いと言える。



▲ザクⅡ改はF型の約2倍ものスラスター推力を持ち、それを利用することで短距離であればホバー移動すら可能であった。



▲高い性能と優れた操作性から、ザクⅡ改は別れた名機とも言われる。しかし、一年戦争後期に生産されたため数が少なく、配備地も限定されていたようだ。



動性はドム系MSに、スラスター推力はザクⅡS型に匹敵しながら、操縦性はザクⅡF型と同等になっており、ビーム兵器への非対応以外にこれといった欠点がなかったのである。

こうして高性能と操縦性を両立していたザクⅡ改だが、あくまで一般パイロット向けの機体だった。装甲防御力やジェネレーター出力、陸戦能力を含む全般的な性能を向上させたF2型も、同様である。こ

れがS型や高機動型ザクとの決定的な違いであり、高練度パイロット用とは別の形で、一般パイロット用ザクⅡも進化していたのである。

ただし、いかに操縦性と性能バランスに優れたザクⅡ改やF2型であっても、ドムやゲルググと比較した場合、総合性能——特に火力と装甲防御力——で勝っているとは言い難く、高機動型ザク同様にザクⅡの限界を表していたのだった。

■ザクⅡF型とF2型、FZ型の相違点■

名称	全高	本体重量/全機重量	ジェネレーター出力	スラスター推力	F型からの主な変更点
MS-06F ザクⅡF型	17.5m	56.2t/74.5t	976kW	43,300kg	—
MS-06F-2 ザクⅡF2型	17.5m	49.9t/70.3t	986kW	53,400kg	<ul style="list-style-type: none"> ▶第2期生産型コクピットの採用 ▶共通マニピュレーターの採用 ▶胸部装甲の強化 ▶陸戦能力の強化 ▶脚部火器搭載機構の追加
MS-06FZ ザクⅡ改	17.5m	56.2t/74.5t	976kW	79,500kg	<ul style="list-style-type: none"> ▶第2期生産型コクピットの採用 ▶束縛方式の変更(ダイレクトイン式) ▶共通マニピュレーターの採用 ▶装甲材質の変更(チタン・セラミック複合材) ▶姿勢制御バーニアの増設 ▶ゲルググ系パーツの大量採用



MS-06
REPORT

MS-06R系の枠を超えた高機動仕様のザク

COLUMN 14

新型機開発用の高機動型ザク改修機

高機動型ザク・シリーズの中には、リック・ドムやゲルググといった次世代主力機のテストヘッドに流用された機体も存在した。

MS-06RD-4 宇宙用高機動試験型ザクはドムの宇宙戦仕様化、つまりリック・ドムの開発に際して製造されたテスト用MSで、高機動型ザク系MS（ランドセルの形状からザクⅡF型系列機とされることもある）の脚部を宇宙用ドムのものに換装していた。ZIMMAD社の新型MS開発のため、ライバル企業であるZEONIC社の機体が使用されるのは異例だったが、テストが軍主導だったため可能になったようである。

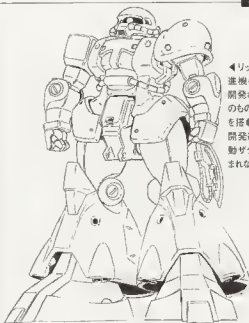
テスト結果は良好であり、宇宙用としてドムの脚部に搭載されたスラスターは高機動型ザクR-1Aタイプのものを上回る評価を得ることになった。宇宙用高機動試験型ザク自体は、テスト中に発生した地球連邦軍との遭遇戦の末に失われたが、そのデータはリック・ドムの開発に反映されている。

ゲルググの開発に貢献したのは、高機動型ザクR-2タイプである。高機動型ザク・ビーム兵器搭載型からの改修機を含めて4機が生産された高機動型ザクR-2タイプは、3機が実戦に投入されたものの、1機はZEONIC社に残されていた。この1機にゲルググ用として開発されていたパーツを組み込んだ機体が、MS-06R-3 ゲルググ先行試作型だった。ザクⅢとも呼ばれたが、ネオ・ジオンのAMX-011 サクⅢとはまったく別の機体である。

本機は試作ビーム・ライフルを使用可能なほか、前腕部スラスターを装備するなど、ゲルググに近い性能傾向を持っており、各種テストに用いられた。設計はゲルググに引き継がれなかったが、テストデータは新規設計に大きく寄与することになったと言われている。



◀テスト機ではあるが、ザク・マシンガンやヒート・ホークを装備しており、実戦での運用も可能であった。その機動力から、戦闘能力も高かったと思われる。



陸戦用の高機動仕様のザク

「高機動型」の名を冠されながらも、宇宙用であるMS-06R系の高機動型ザクとは直接関係がないザクも存在する。それが、陸戦での機動性向上を目的としたMS-06G 陸戦高機動型ザクである。

脚部にスラスターを追加された陸戦高機動型ザクは、その設計様式から高機動型ザクRタイプの系譜に属すると思われることも多いが、実際にはグフとの繋がりがあるが深いMSだった。これはグフと開発時期が重複するため、胸部や船尾部コクピットハッチ、左肩部スパイク・アーマーや脚部などの仕様や形状にグフとの共通点が見られる。脚部側面のスラスターも、グフが装備する脚部サブ・スラスター（ジャンプ補助兼格闘戦用）の影響と考えられる。

その一方で、グフや陸戦用ザクとは異なる機構も持っている。陸上における機動性の向上を狙ったと思われる足底スラスター、マシブなシルエットなどがそれであり、その点ではドムに近い性能傾向を持っていたとも言える。実際、機動性や運動性は陸戦用ザクを超えていたと報告されており、その性能は「高機動型」の名に相応しいものだった。

なおオーストラリアなどでホバー走行式のザクⅡが見られたという説があるが、これは現地改修機とされており、陸戦高機動型ザクとは異なる。





特殊化を極めた 異質、異形のザクたち

■ニュータイプ対応の試験用ザク■

機動性の向上のため、ランドセルや脚部だけでなく装甲材質やフレームといった基本構造すら変更した高機動型ザクに見られるように、いかに拡張性に優れるザクⅡでも著しい高性能化には大規模改修が必要だった。変更点が少ないように見えるザクⅡ改も、内部にはゲルググのパーツが多く用いられており、純正のF型とは大きく隔たっていた。このようにザクⅡバリエーションの中には、原型機とかけ離れた外見や内部構造を持った、異形かつ異質な派生型が散見される。その中でも「06 (ザクⅡ) シリーズ中、最も原型機と異なるタイプ」とまで言われるのがMS-06Z サイコミュ・システム試験用ザク、そしてそれをハイマニューバー化したMSN-01 サイコミュ・システム高機動試験機であった。

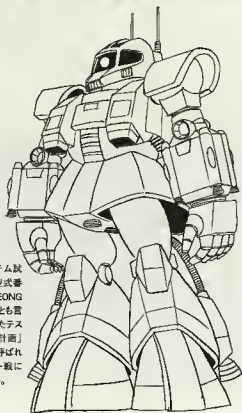
サイコミュ・システム試験用ザクとサイコミュ・システム高機動試験機は、その名の通りニュータイプ用マンマシン・インターフェイス「サイコミュ」を搭載した試験機で、サイコミュを介して制御される腕部有線誘導5連装メガ粒子砲も搭載された。

ニュータイプとは先読み能力や空間認識能力に著しく優れた人間のことで、緊張状態において「感応

波 (サイコウェーブ)」と呼ばれる精神波の一種を強く発信することが科学的な特徴である。特に高度なニュータイプ能力を持つ者は、亜光速で飛来するメガ粒子ビームや死角からの攻撃を回避したり、複数の敵機の位置を同時に把握して連続撃破したりするなど、超人的な活躍を見せたのだった。

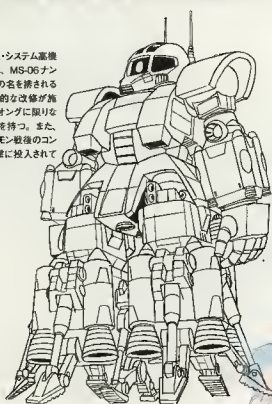
元々はジオニズムの中で出現が予言され、宇宙時代に適応した人類を指す言葉だったニュータイプだが、一年戦争の緒戦で上述のような能力を発揮したパイロットが確認されると、ジオン公国軍のキシリア・ザビ少将はニュータイプ存在を確信すると共に軍事利用するための研究を進めさせた。この結果、U.C.0079.06、サイド6にフラナガン機関が設立されたのだった。

フラナガン機関は、表向きは民間の囑託機関として設立されたが、戦力化を想定したニュータイプの研究や、その能力を利用した兵器の開発が進められた。そして同年10月、感応波によって機体や火器をコントロールするサイコミュ(サイコ・コミュニケーション)の試作機が完成。サイコミュは、ニュータイプが考えただけで機器を制御できるインターフェイスであり、情報伝達量、速度共に通常の操縦システムの比ではなかった。突出した情報伝達量と速度は、パイロットのニュータイプ能力によっては、搭乗機体以外の攻撃端末を選隔操作できる点も画期的だった。



▶サイコミュ・システム試験用ザク3号機。型式番号末尾の「Z」は「ZEONG (ジョング)」の漢字とも言われる。本機を用いたテストである「ビショップ計画」から、ビショップとも呼ばれる。ア・バオア・クー戦に投入されたと言われる。

▶サイコミュ・システム高機動試験機は、MS-06ナンパーとザクの名を継承されるほど、徹底的な改修が施された。ジョングに限りなく近い外見を持つ。また、本機はソロモン戦後のコンバット用機に投入されている。



た。

サイコミュ試作機の完成を受けたジオン公国軍は、即座にサイコミュ搭載型機動兵器の開発計画に着手した。そのひとつがサイコミュ搭載MS「MS-16X (後のMSN-02 ジョング)」である。MS-16Xの開発に際してジオン公国軍は、サイコミュとビーム兵器を中心としたデータ収集用として、3種類の実験機を試作した。それが中型の宇宙戦闘機、サイコミュと4基の有線誘導メガ粒子砲を搭載した大型モビルアーマーのMSN-03 スラウ・フロ、そしてサイコミュ・システム試験用ザクであった。

サイコミュ・システム試験用ザクはF型をベースとした改修機で、サイコミュの搭載や前腕部の有線メガ粒子砲化、ビーム兵器の稼働を目的としたジェネレーターの高出力化、大推力スラスター群の増設などが図られた。これに加えて、頭頂部まで拡張されたモノアイ走査レーザや胸部スラスターなど、MS-16Xで想定された機構はほとんどが搭載されることになった。ロールアウトはスラウ・フロが完成した10日後で、3機が製作されている。

ただしF型から流用されたのはメインフレーム程度で、ザクの面影は頭部の意匠や脚部の動力パイプ程度にしか見られない。また、メガ粒子砲の小型化が困難だったため前腕部が大型化したほか、脚部はランディングギアとしての性能のみが期待され、歩行機構やAMBACシステムの機能はほとんど無かった。つまり、ザクⅡの原型を留めないほどの大規模改修が施されており、機能・外見の双方で規格外のMSとなっていたのである。しかし、本機の変容はこれに止まらなかった。

1号機の時点で38万8,000kgものスラスター推力を得ていたサイコミュ・システム試験用ザクだが、それでも機動性が不足しており、サイコミュ使用時におけるゼロレンジ攻撃のデータ収集が難しいという問題を抱えていた。そこでジオン公国軍では、2号機の脚部を熱核ロケット・エンジンに換装、サイコミュ・システム高機動試験機を製作したのである(ジョングの脚部非搭載/高機動バーニア搭載型のデータ収集用とも言われる)。

脚部を集束式の熱核ロケット・エンジンユニットに換装したサイコミュ・システム高機動試験機は、確か

にMAに匹敵する機動性を獲得したが、その姿はMSへのカテゴライズに躊躇するほど異形化していた。型式番号がMS-06ZからMSN-01に変更されたのはニュータイプ用MSを示すためだが、名称から「ザク」の名が消されたように、ザクⅡという分類から外れてしまうほどの異質・異形化がなされた結果だと考えることもできる。

▼連邦系MSに近いザク▼

型式番号から「MS-06」を外されたザクⅡ系MSは、サイコミュ・システム高機動試験機だけではない。小惑星基地ベズンの極秘MS開発プロジェクト「ベズン計画」で開発された、高性能かつ高生産性のMS-11 アクト・ザクがそれである。

ベズン計画系では、型式番号が暫定的に割り振られたらしく、ドムをベースとしたベズン・ドワッジにMS-10の型式番号を与えられており、ザクを基に開発されたアクト・ザクがMS-11のナンバーを付されることに大きな疑問はない。それでもアクト・ザクは、型式番号の変更が妥当と思えるほど原型機と異なる仕様の機体となっていた。外見も頭部以外ザクの面影をほとんど残していないが、それ以上に搭載機器や根本的な駆動システムが、ザクⅡと大きく違っていたのである。

まず、ジェネレーター出力が強化された結果、ビーム兵器が装備可能となった点が画期的であった。アクト・ザク用火器として実体弾式のフルパップ・ガンと特殊形状のヒート・ホークも用意されていたが、ビーム・ライフルとビーム・サーベルを装備可能であり、その攻撃力は極めて高いレベルに達していた



▲グリプス戦役時に使用されていたアクト・ザクはハイザックとの真鍮の共用化と、SFSへの対応能力も付与されていた。

(アルバート社製のアクト・ザク用ビーム・ライフルは、地球連邦軍のハイザック/マラサイ用ビーム・ライフルに技術継承されたという説がある)。ビーム兵器の搭載はゲルググで実用化されたもので、その後継機のひとつとして開発されたためか、技術レベルと機体の完成度の高さがうかがえる。

しかしビーム兵器運用能力は、アクト・ザクの特長性の一端でしかない。真の意味でアクト・ザクがザクIIとかけ離れていた、否、ジオン公国軍系MSと違っていたのはその駆動システムだった。

アクト・ザクは機動・運動性やレスポンスを向上させるため、地球連邦軍のRX-78-3 G-3ガンダムなどで採用されたマグネット・コーティングを採り入れている。MSの関節部に施されるマグネット・コーティングは、電磁工学とミノフスキー物理学を応用することでモノポール（磁気単極子。N極かS極しか持たない磁石）を安定させた磁気塗膜で、関節部の機械的な干渉・抵抗を理論上ゼロにできる。つまり、関節部をコーティングするだけでMSの操縦追従性や反応速度、ひいては機動・運動性を向上させるのだが、そこにはある大前提は横たわっていた。



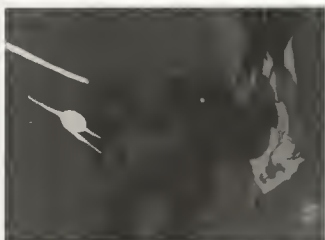
◀ グリプス戦役期には、地球連邦軍によって運用されていた。運用にあたっては、全天周モニターやリニアシートを装備するなど、近代化改修が施された。

▶ ランドセルは小型化しており、スラスターも上下になっているなど、本体と同様、ザクIIとの共通点は少ない。

マグネット・コーティングは、地球連邦軍系のMS用駆動システムであるフィールド・モーターにしか使用できない。つまり、ジオン公国軍系MSの流体内部バルス・システムには無意味な技術なのだ。

しかし、アクト・ザクはマグネット・コーティングが施された。これは明言こそされていないものの、アクト・ザクの駆動システムがMS-01以来の流体内部バルス・システムではなく、フィールド・モーターである証拠と考えられている。この結果、アクト・ザクの反応速度はリミッターを必要とするほど高くなり、ビーム兵器の装備もあってRX-78-5 ガンダム5号機と互角の戦闘を繰り広げたとと言われる。

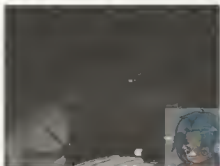
こうしてアクト・ザクはザクII系だけでなく、一年戦争時のMSの中でもトップクラスの性能を獲得した。結果、外見、機構の双方で著しい変化を遂げており、「異質、異形のザク」となっていたのだった。



▲ 元の兵装ではなく、ハイザックやマラサイなどが使用するビーム・ライフルを装備していた。



◀ 宇宙ではなく主に重力下で運用されていた。そのため、ベース・ジャバーといったSFSに搭載するケースが多く見られた。



▶ 北米のオーガスタ基地には相当数が配備されており、エウゴのアクムラ追撃時には、ギャプランと共に出撃している。

MS-06
REPORT

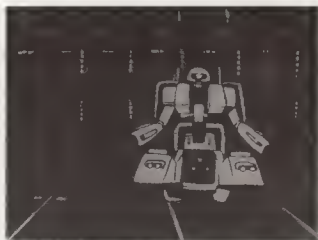
ザクのパーツを流用した機動兵器や特殊機器

ザクの部品を主とした再生MS

ザクⅡはシリーズ総生産が8,000機にも上ると言われるMSであり、予備部品や戦況の変化によって発生した余剰パーツ、そして様々な理由により修理不能となったザクⅡは膨大な数に達した。これを活用するためジオン公国軍では、大は軍技術部や兵器メーカー、小は前線レベルまで様々な形でザクⅡのユニットや部品を流用した機動兵器や特殊機器の開発、製造が進められることになった。

現地レベルで製造されたパーツ流用機として有名な機体を、マゼラ・ベースの砲塔接続部にザクⅡの上半身を載せたザク・タンクである。予備部品の不足や大規模な破損によって修理の目的がつかないザクⅡと、マゼラ・トップを失ったことで戦闘車両として使い難くなったマゼラ・ベースを組み合わせたという、リサイクル的発想に立った機体であった。基本的には戦闘用ではなく作業用として用いられたが、MSと装甲戦闘車両の組み合わせはハイパワーかつ作業性が高く、軍から正式にMS-06Vの型式番号を与えられることになった。

最初のザク・タンクはアフリカの現地工作部隊が製造した機体だったが、そのフォーマットは地球攻撃軍の各方面軍に提供されたようで、東南アジアやボルネオでも同様の基本構造を採用したザク・タンクが製作されている。戦力外となったザクを作業用として再生したザク・タンクは、戦闘部隊からMSを工作用として引き抜く必要性を低下させるため、MS自体が不足しがちな前線では歓迎されたようである。



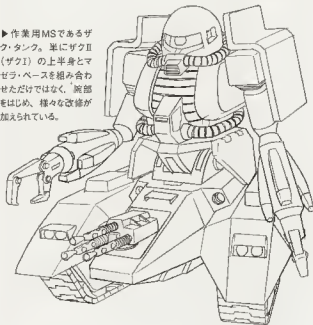
▲高い作業性能に魅了した地球連邦軍は、一年戦争後に接収した機体を作業用としてジャブローに配備していた。

一部の戦線では武装したザク・タンクが戦闘任務に就いたこともあったが、戦闘能力は甚だ低かった。ザク・タンクの亜種として、サムソンの荷台にザクⅡの上半身を接続したMS（MSと言えるかどうかとも疑わしいか）が存在したという説もあるが、これは戦闘用として使用されようだった。

ザク・タンクの他にも、使用不能となったザクを再利用した作業用MSが製作されている。それがMS-06W一般作業用ザクである（型式番号は現地で便宜上付けられたものだった）。

ザク・タンクと比べてマイナーだが、製作時期は一般

▶作業用MSであるザク・タンク。単にザクⅡ（ザクI）の上半身とマゼラ・ベースを組み合わせただけでなく、胴部をはじめ、様々な改修が加えられている。



▶ボルネオで製造されたバリエーションのひとつ。ザク・タンクは地域によって様々な形状があったようで、定まったフォーマットは存在しなかったようだ。

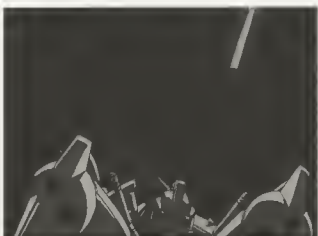


作業用ザクの方が早い。ザク・タンクとの違いは二足歩
行式のMSであること、ザクⅠやザクⅡ、グフといった
MSのパーツを寄せ集めて製造されたことなどであった。
背部に荷物デッキ、右腕にはスライド機構を持つスコッ
プ、左腕に関節ギアを利用したウインチを備えており、
様々な作業に対応できた。

作業用ではないが、一年戦争後にジオン公国軍残党デ
ラーズ・フリートが開発したMS-21C ドラッツェも、ザ
クのユニットを中核としたMSだった。ただし使用不能
になったザクを再利用したのではなく、新規に製造した
ザクⅡ F2型の胴体と腕部に、宇宙戦闘機ガトルの推進
器類と頭部やバーニアボッドなどの新ユニットを組み込
んだ簡易MSとなっていた。

射撃兵装の威力こそ低かったが、ビーム・サーベルを

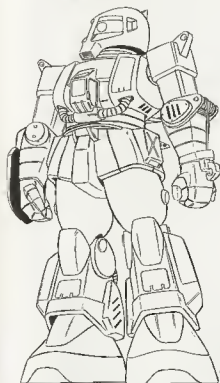
搭載したうえ、MS-09R-2 リック・ドムⅡ（ツヴァイ）に
匹敵する機動性を持っており、一撃離脱を駆使した戦闘
能力は侮れないものがあった。



▲高い機動性と格闘戦能力を持つドラッツェだが、実質は哨戒や偵察任務向けの機体であったとも言われている。



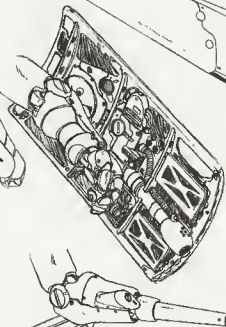
▼F2型の胴体をベースに宇宙戦闘機や新規パーツで構成された、宇宙用簡易MS。戦後にデラーズ・フリートによって開発された。



▲MS-06W 一般作業用ザク。ザクⅠをベースとしているが、腕部や脚部、脚部の形状が変更されていることが分かる。



▶一般作業用ザクの背部にはランドセルはなく、資材などを搭載すると思われるラックが設けられていた。



◀シールドの裏にはビーム・サーベルを装備する。ビーム・サーベルを稼働させるジェネレーターもここに搭載された。なお、発火器の両脇には放熱板を備える。



▲右腕には、3連40mmバルカンを固定装備している。下腕部全体がユニット化されており、照準システムも一体となっている。マガジンは外装式を採用。

MS-06 REROPT ザクのパーツを流用した機動兵器や特殊機器

内部レベルでザクの部品を採用した兵器

ザク・タンクやドラッツェは、それと分かる形でザクの部品を利用していった。つまり、あくまでザクを中核に据えており、そこに他のパーツを追加していたのである。その一方で、内部レベルあるいは補助的にザクの部品を使用することで、生産性の向上や開発期間の短縮を図った機体も存在した。

このケースに当てはまる分かりやすい例がグフである。外見上からもザクⅡの影響が伺えるグフは、60%以上を新設計パーツとしたが、一部はザクⅡJ型（ザク・デザートタイプとも言われる）から流用している。これはザクⅡ系部品の高い信頼性や開発期間の短縮が理由として考えられる。

外見からは流用が全く分からない例として、MSM-04 アッガイが挙げられる。アッガイはMSM-03 コッグやMSM-07 スゴックのコスト高騰を受けて開発された、簡易生産型の水陸両用MSだった。

▶ザクⅡJ型とザク・デザートタイプを経て開発された新設計の陸戦用MS。J型のパーツを流用しているが、流用率は意外に低く抑えられている。



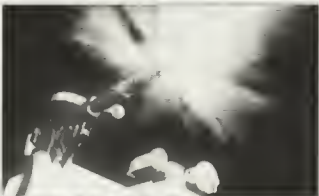
▲アッガイには、J型のジェネレーターが2基搭載されている。1基のみでも稼働できる。その際は排熱量も抑えられることから、防衛制が高くなっている。

アッガイの開発陣がコスト低減の手段として選んだのは、既存のMSの部品を流用することであった。この結果アッガイの胴体部基本フレームとジェネレーターは、ザクⅡJ型のもものが使用された。ジェネレーターに至ってはザクⅡJ型用を2基搭載したが、わずかにデチューンされたようである（他にもコッグ用アイアン・ネイルや航行用部材を流用）。

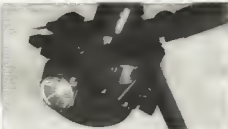
ザクⅡJ型用ジェネレーターを流用した機動兵器はアッガイだけではない。一年戦争末期に投入された簡易機動兵器、MP-02A オグがそれである。

オグは、連邦軍のRB-79 ボールに相当する駆逐モビルボッドで、MSの不足を補うための急造兵器に過ぎなかった。宇宙専用のオグに陸戦用のザクⅡJ型のジェネレーターが搭載されたのも、戦線後退によって陸戦兵器が不要になったこと、急造兵器に回せる熱核反応炉がそれしかなかったことなどが理由だった。兵装もザク・マシンガンやザク・バズーカ、シュトルム・ファウストなどで、ザクⅡからの転用品がほとんどであった。ただし、オグ自体が流用パーツを徹底的に利用した機体であり、パイロット以外のコストパフォーマンスは著しく高い。プロベラントタンクが極めて大きく、低練度パイロットでも燃料切れになり難い点も優れていた。

これらの機動兵器以外にも、観測ボッドOP-02cにザクⅡのモノアイが流用されており、ザク系MS用のパーツは様々な兵器や機器に流用されていたことが分かる。



▲J型のジェネレーターを流用したオグ。火器類がF型のもを使用するが、モニタレーターを持たないため、専用のアタッチメントで本体と接続された。

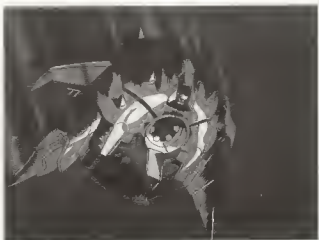


▲ミノフスキー粒子散布環境下での映像情報の収集には、モノアイのような光学センサーが最も適しており、ザク系MSのモノアイを使用した観測ボッドなどが開発された。

ザクⅡのパーツを露出させた大型機動兵器

ザクの部品を採り入れたのは、MS級の機動兵器だけではない。MAや大型陸戦兵器の中にもザクⅡのパーツを採用した機体、しかも一見して分かる機体が存在している。

その代表的な兵器が、ジャブロー攻略用MAアプサラス・シリーズである。アプサラスはⅠ～Ⅲの3タイプが確認されているが、いずれもザクⅡの頭部をそのままメインセンサーユニットとしていた。また、アプサラスⅠおよびⅡはランディングギアとしてザクⅡの足部を搭載している。これは、ミノフスキー・クラフトやメガ粒子砲といった中核部分以外は徹底して簡略化するという開発方針によるものと考えられる。なお未確認の機体ではあるが、アプサラスⅢはアプサラスⅠ、Ⅱで頭部が設置された位置に脱出機構兼用のザクⅡの上半身を搭載していたといわれる。



▲多数の精密機器を内蔵するため、脆弱性が指摘されるザクⅡの頭部だが、アプサラスの大気圏再突入には耐えられると計算されていた。

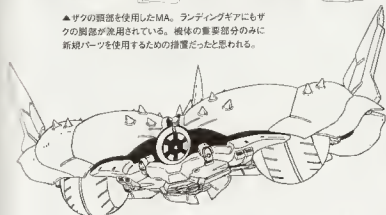
オーストラリアで運用されたという巨大MA、ライノサラスも中央部にザクⅡの上半身が設置されているが、これは主要区画と一体化したタイプであった。腕部ユニットも流用しているが、ザクⅡの胴体から離れた火器プラットフォームの両脇に配置されたうえ、マニピュレーター機能のないアームマシンガンとなっており、ライノサラスの陸上戦極的傾向を強化することになった。

ライノサラスに近い陸戦兵器に試作モビルタンクYMT-05 ヒルドルフがあるが、これにもザク系MSのパーツが採り入れられている。それがモビル形態で使用するマニピュレーターで、ザクⅠのものと思われる前腕部が取り付けられた。これによりヒルドルフは、ザク・マシンガンに代表されるザク用火器を使用可能であった。

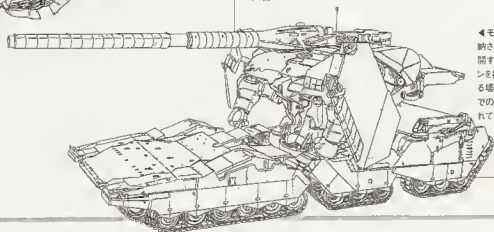


▲ヒルドルフにはザク用の全腕部が使用されている。接続位置の間隙上、前腕でひとつの火器を扱うことは出来ないが、2丁を装備することで、広い射界を確保していた。

▲ザクの頭部を使用したMA。ランディングギアにもザクの脚部が流用されている。機体の重要部分のみに新規パーツを使用するための措置だったと思われる。



▲アプサラスの完成形。ザクⅡの頭部がメインセンサーとなっている。機体各所のスライクもザクⅡの影響という説もあるようだ。



▲モビル形態では、格納されていた腕部が展開する。ザク・マシンガンを持ったまま格納される場合もあり、近距離での射撃能力も確保されていた。

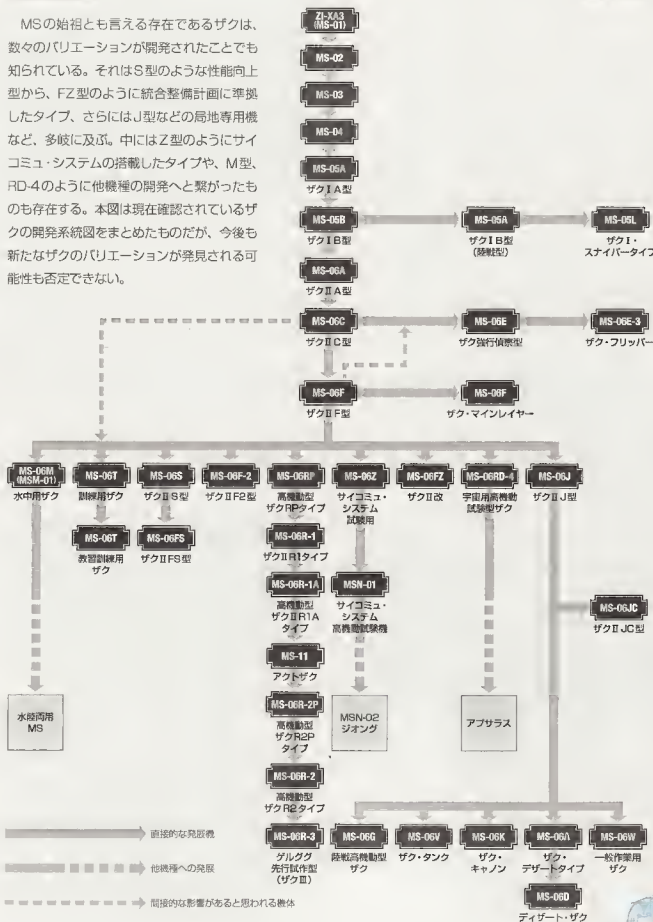


MS-06 REPORT

MS-06シリーズ開発系統図

COLUMN 16

MSの始祖とも言える存在であるザクは、数々のバリエーションが開発されたことでも知られている。それはS型のような性能向上型から、FZ型のように統合整備計画に準拠したタイプ、さらにはJ型などの局地専用機など、多岐に及ぶ。中にはZ型のようにサイコミュ・システムの搭載したタイプや、M型、RD-4のように他機種の開発へと繋がったものも存在する。本図は現在確認されているザクの開発系統図をまとめたものだが、今後新たなザクのバリエーションが発見される可能性も否定できない。





CHAPTER 04

一年戦争後のザク・シリーズ





一年戦争の終戦とザクの系譜に 属する新型MSの登場

▼ジオン公国軍残党によるザクⅡの改修▲

ザビ家の壊滅と公国制から共和制（ジオン公国からジオン共和国）への移行、そして一年戦争における敗戦はサイド3を独立国家と言う美名ながら、地球連邦の地方自治体レベルの組織へと転落させた。一年戦争の終戦協定となったグラナダ条約により、サイド3およびア・バオア・クー以外の領土を放棄させられたうえ、一時的ではあるが独自の軍事力すら解体されたジオン共和国に新型MSを開発する力はなく、サイド3でのザク・シリーズの発展は事実上不可能となった。その結果、ザクⅡシリーズの改修やその系譜に属する新型MSの開発は、アクシズに代表される旧ジオン公国軍残党勢力やアナハイム・エレクトロニクス社（以下AE）などの民間企業、そして一年戦争でザク・シリーズに苦しめられた地球連邦軍が担うことになった。

一年戦争後、ザクⅡシリーズの改修に最も積極的だったのは旧ジオン公国軍残党勢力である。確かにザクⅡはゲルググやドムと比べて絶対的な性能で劣っている。しかし、敗戦によってMSの新規受領ができなくなった旧ジオン公国軍残党が、希少な残存戦力の一部であるザクⅡの延命を図るのは当然のことだった。

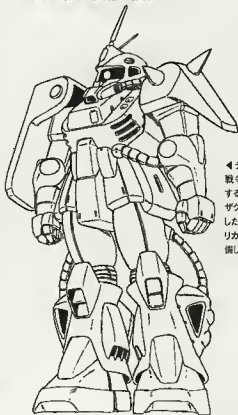
この結果誕生したザクⅡの中には、アクシズのF型系ザクⅡのように原型機をほぼそのままグレードアップしたタイプも存在した。だが、全面改装はアクシズのような大規模組織だからこそ可能だった。部隊規模や技術力が大幅に制限される小規模な旧ジオン公国軍残党の中に、過剰とも思える追加装備を施したMSが見られるのはこれが一因と言える。

このような規格外のデバイス群を増設した旧ジオン公国軍残党のザクⅡは、戦後のゲリラ活動で目撃されている。U.C.0081~0082.12.04、月面都市フォン・スラウンのAEリバモア工場を攻撃した長距離砲撃仕様のザクⅡ改修機2機が、初期の代表的な大規模機体として知られる。この2機は観測用（観測手仕様）のザクⅡF2型と砲手用（狙撃手仕様）のザクⅡF型で、680mmザメル砲を転用した分解式長距

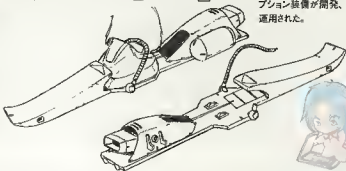
離固定砲台を用いて移動と砲撃を行っていた。

観測手仕様のザクⅡF2型はマルチスレードアンテナ付きで、観測用のカメラガンとそれと結線した頭部右側面ユニットを増設、さらにランドセルに緊急用のロケット・ブースター2基、左腕にはグフ系MS用のガトリング・シールドを装備していた。観測装置以外の改装箇所こそ少ないが、観測任務だけでなく砲撃中に無防備となる砲手を護衛するための装備が選ばれていたことが理解できる。

砲手用のザクⅡF型は、ザメル砲を運用するために徹底した改装が施された。まずシールドを排除した右肩には砲身固定用の支持架が増設され、スパイク・アーマーを撤去した左腕には支持架兼用の大型シールド（RX-79[G] 陸戦用ガンダムのシールドを大型化したようなモデル）を装備している。また砲撃時には右膝を着く姿勢となるため、右足の膝と足甲部に滑り止め付きギアが増設され、立て膝となる左足には防衛用と思われるフット・ミサイル・ポッドを外装した。メインセンサーもモノアイ走査レーンと長距離攻撃用に換装されており、この結果、砲手



▲ディザート・ザクは一年戦争後、アフリカに潜伏するジオン公国軍残党が、ザク・ディザートタイプを改修したと言われる機体。アフリカの悪地ゲリラ組織も装備した。



▼砂漠での機動性を向上させるために、ジェット・スキーなどのオプション装備が開発、運用された。

用は汎用性や近接戦闘能力を考慮しない砲撃専用機となっていた。

これは超長距離砲撃というミッションの都合上、仕方が無い部分もある。しかし、そこまでしなければ有効な攻撃を行えないのがテロリストに身をやつした旧ジオン公国軍残党の実情であった。それでも旧ジオン公国軍残党は、高性能化の一途を辿る地球連邦軍のMSに対抗するため、そして地球連邦軍の圧倒的物量が効果を減するゲリラ戦に対応するため、ザクⅡをはじめとする旧型MSを改修することが多かった。

U.C.0085.08、T3部隊（ティターンズ・テスト・チーム。連邦軍特殊部隊ティターンズ用の次世代MS開発が目的）が交戦した、ザク【シュトゥツァー】もこのような経緯で誕生したMSだった。ザクⅡ改造型——シュトゥツァー——とも呼ばれるザク【シュトゥツァー】はザクⅡF型の改造機で、胴体を中心に大規模な改修が加えられている。

具体的には胴体前面に長さ10mほどのパネル2枚を設置し、右パネルには増加ジェネレーターによって稼動可能となったゲルググ用ビーム・ライフルを固定装備し、左パネルには有線制御式のMS前腕部を撃ち出すウインチュユニットが設置されている。ウインチュユニットに接続されたMSの前腕は余剰となったザクⅡのもので、ザク【シュトゥツァー】は都合3本の腕部を持つことになった。

ウインチュユニットは簡易サイコミュに近い性能特性を持つほか、MS-07B-3 グフ・カスタムのヒート・ワイヤーのように電磁兵器としても使用可能である。【シュトゥツァー】仕様機部隊のウインチュユニットでワイヤートラップを形成して敵機を捕縛、高圧電流をかけて行動不能に陥らせるという戦法も可能だった。頭部と胸部にワイヤーカッターを装備するのは、必要に応じて自身のワイヤーを切断するためである。なお【シュトゥツァー】仕様機はゲルググやリック・ドムを改造したタイプもあったほか、エウゴでは【シュトゥツァー】の名を冠されたRMS-099 リック・ディアスのバリエーションが使用されたと言われている。

これらのザクⅡ改修機はU.C.0080年代の宇宙で見られたものであるが、地球で反地球連邦活動を継

続した旧ジオン公国軍残党も局地戦用ザクの独自改修を進めていた。その代表例がザク・デザートタイプの改修機、俗称ディザート・ザクである。

ディザート・ザクは原型機譲りの砂漠適性や潜砂機構を残しつつも、全天周モニターとリニア・シートの搭載、ジェネレーター出力の大幅な向上、活動時間を延長する背部プロペラントタンクの増設、高度な機動性を発揮する脚部オプションのジェット・スキーといった改修や新装備によって、U.C.0080年代後期でも通用する局地戦能力を獲得していた。ただしディザート・ザクのアドバンテージは戦場が砂漠地帯で、かつ敵MSが砂漠対応仕様や空戦タイプでないことが前提となる。また、運用者が一年戦争以来のベテランで占められた旧ジオン公国軍残党や、砂漠を知り尽くしたアフリカ・ゲリラであることも重要なファクターであった。

つまり、砲手用ザクⅡF型やザク【シュトゥツァー】のような過剰改修がされていないにも拘らず達成できた（ように見える）高性能化は、様々な制約下でのものだったのだ。これは旧ジオン公国軍残党の改修機全般に言えることだが、高練度パイロットの搭乗を前提としているケースが多く、MS自体は地球連邦軍やアクシズの新世代MSに対抗できるもので



▲地球連邦軍などから奪った資材で近代化改修を施され、ジェネレーター出力の向上。そのため、ディザート・ザクはビーム・ライフルの使用が可能であった。



▲アフリカ解放機構が使用した機体は、アクシズから供与されたものと推定される。この組織を通じて関連組織へと供給されたようだ。

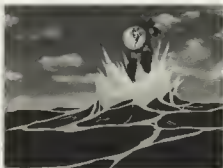
地球連邦軍による改修と再設計機の開発

旧ジオン公国軍残党が、少ないリソースを最大限に活用するため、残されたMSの改修に力を入れる一方で、地球連邦軍も鹵獲・接収した旧ジオン公国軍MSを自軍戦力として配備していった。この背景には、復興事業や連邦軍再建などによって生じた一年戦争直後の財政難があり、地球連邦軍に接収された旧ジオン公国軍のMSは、技術サンプルとしてだけでなく実戦力としても転用された。こうして地球連邦軍が配備したMSの中に、旧ジオン公国軍最多の生産数を誇ったザクⅡのバリエーション機が含まれるのは当然の成り行きだった。

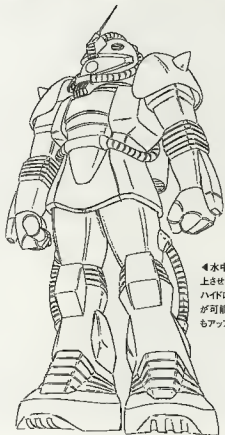
一年戦争後における地球連邦軍のザクⅡバリエーション配備は、U.C.0080年代に多く見られたものである。U.C.0083時のオーストラリア・トリントン基地で確認されているザクⅡF2型が比較的古い記録で、ほぼ無改造の機体がアグレッサ―や教習用として用いられていた。その後、ジム系新型機や新型主力MSの開発と増産に伴って旧ジオン公国軍系汎用MSの必要性は薄れていった。グリプス戦役期には、ザク・キャノンやザク・タンク、マリン・ハイザック（水中用ザク）やアクト・ザクといった特殊用途機や局地戦用機の運用が多かった。これらの機体は鹵獲・接収機だけでなく、戦後に旧ジオン公国軍の生産ラ

インで製造されたものも多数に上ったと考えられるほか、U.C.0080年代中期には近代化改修——全周囲モニターやリニア・シートへの換装——もされており、二線級ではあっても地球連邦軍の明確な意図の下で運用されていたことが伺える。ただし、新規増加装備による強化は施されておらず、旧ジオン公国軍残党機との相違点となっている。またそれ以上に旧ジオン公国軍残党と異なっていたのが、一部の局地戦用ザクⅡバリエーションを高く評価し、その改良発展型を新たに開発、生産したことだった。

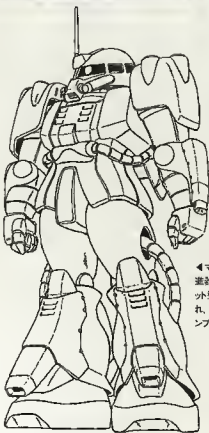
地球連邦軍から高評価を得たその機体こそ、旧ジオン公国軍では試験機としか見做されていなかった水中用ザクである。一年戦争時、地球連邦軍はRAG-79 アクア・ジムとその改修機であるRAG-79-G1 水中用ガンダム の2機種の水の中用MSを開発したと言われている。しかし評価は高くなかったように、戦後にはアクア・ジムと並行してマリン・ハイ



◀ティターンズのサンコン特務に配備されていた機体。ランドセルや大膝部の一部の形状が水中用ザクとは異なっている。



◀水中用での機動性を向上させるバックパックと腰のハイドロ・ジェットは切り離しが可能なため、陸戦能力もアップしている。



◀マリン・ハイザックの主推進器は、高出力のハイブリット型が使用されていたとされ、水中から空中へのジャンプなども可能であった。



ザックと改名された水中用ザックが配備されることになった。

マリン・ハイザックは、コクピットをRMS-106 ハイザック（ハイザックについては後述）のものに換装した水中用ザックとされているが、いくつかの異説もある。それによると、ハイザック量産仕様機用のタキム社製ジェネレーターを水冷化して搭載した水中用ザックとも、ハイザックの試作機（RX-106がYRMS-106と考えられる）に水中用ザックの装備を施した機体とも言われている。

マリン・ハイザックの実態はともかく、水中用ザックを高く評価していた地球連邦軍は、その再設計機を開発した。それがRMS-192M ザク・マリナーとRMS-188MD ザク・ダイバーであった。

ザク・マリナーはグリプス戦役期に配備された水陸両用MSで、固定火器を中心とした火力の増強、高出力ジェネレーターによる水中機動性の向上、ハイドロ・ジェット切り離し機能もたらす陸戦能力の強化といった総合的な性能アップが図られた。ほかにも視認性を向上させるモノアイ走査レールの拡大や、敵機的位置測定や測距、水中用MAや艦艇による曳航などに使用できる左前腕部の電磁石磁マグネット・ハーケンを備えており、単純性能だけでなく運用性も大きく向上している。これは、数年に亘って水中用MSを運用し続けた地球連邦軍の経験が活かされた設計だと言える。

ザク・ダイバーも水中用ザックをベースとしたMSと言われるが、全般的な性能と運用性を高めたザク・

マリナーとは方向性が決定的に異なる。ザク・ダイバーは深海での運用を想定した機体で、海中での回収作業が主任務とされた。その深海潜航能力は旧来の水陸両用MSを凌駕しており、広大かつ多様な水圏を抱える地球連邦軍ならではの機体となっていた。

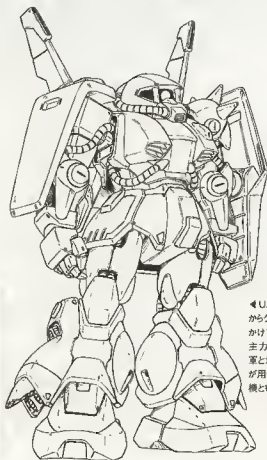


ザクⅡの血統を受け継いだ地球連邦軍の新型MS群

■地球連邦軍の新設計主力MS、ハイザックの開発■

一年戦争後初めてザクⅡの影響が色濃い新設計MS、つまり「広義のザク」を開発した組織は地球連邦軍であった。U.C.0080年代前期～中期には、旧ジオン公国軍残党の最大勢力アクシズも新型機動兵器の開発を進めていた。だが、小惑星基地アクシズの整備や居住区モウサの接続、新たな方向性の新型MSの開発を優先したことなどにより、ザクⅡ直系機の開発は実施されなかったようである。こうしてU.C.0085年、ジム直系のRGM-79R（RMS-179）ジムⅡと共に地球連邦軍の主力MSとなった機体が、RMS-106 ハイザックだった。

一年戦争後、地球連邦軍は「連邦軍再建計画」の一環として「ガンダム開発計画」を実施しており、その



◀ U.C.0080年代初期からグリプス戦役初期にかけての地球連邦軍の主力MS。ジオン公国軍と地球連邦軍の技術が用いられたハイブリット機とも言える。

◀ モノアイレールは全面型タイプで、アッガイに近い形状であった。頭頂部や後頭部にモノアイを移動させることも可能で、姿勢によって視界が変えられることはなかった。

▶ 第一次ネオ・ジオン戦争においては、接収したザク・マリナーをネオ・ジオンが使用している。同軍の将兵も本機を好んで使用するものがいたとされる。



中で連邦系と公国系の技術融合が進められた。「ガンダム開発計画」で試作されたガンダム・タイプMS群には技術融合によって誕生した新テクノロジーが惜しみなく投入され、グリップス戦役期の機体をも超えるカタログスペックを獲得していた。

しかし、U.C.0083の「デラーズ紛争」とティターンズ結成を巡る政治的混乱の中で「ガンダム開発計画」関連機の記録は抹消されたうえ、その技術も封印されてしまった。このため、連邦系と公国系の技術融合はまったく新たな形で再スタートしなければならなかったのである。

こうした状況の中で、一年戦争後初の新設計主力MSとしてハイザックは開発された。地球連邦軍の要求は、連邦・公国系の技術融合を果たした新設計の主力汎用MSで、絶対性能よりも生産性を重視し、

コクピットには全天周モニターとリニア・シートを採用するというものだったようである。こうして始まったハイザックの開発だが、そこには地球連邦軍や企業の思惑、デラーズ紛争後の政治状況などが作用しており、少なからぬ混乱が見られた。

まず、開発を行った組織が明確ではない。一般にハイザックは地球連邦軍が開発した戦後初の新設計MSとされており、開発拠点はグラナダ基地のMS開発工場となっている。だがその一方で、AE社がグラナダで開発したという説も存在する。

勿論、二者択一の問題ではなく、「RX計画」のよう

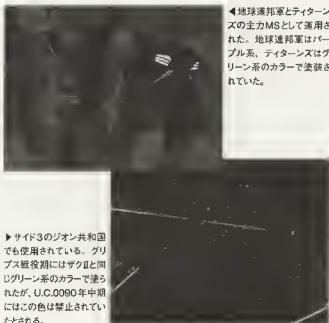


有力議員から疎まれてすらいた。関係者の言葉を借りるなら、AE社は「政治の世界でいう『ラジオアオクティス（放射性）』な存在だった」のである。この状態はグリプス戦役開戦頃まで続くもので、ハイザック開発期のAE社の立場は決して良くはなかったのである。

しかし、一年戦争後のAEが多数のMS関連企業を傘下に収めていた以上、地球連邦軍が同社の協力を受けることなく新型MSを開発するのは難しかった。実際、ハイザックのジェネレーターはAEグループ企業のタキム重工、ビーム・ライフルはAE傘下のボウワ社、ザク・マシンガン改はAE・ZEONIC事業部（旧ZEONIC社）が担当した。ハイザックAE開発説でも、旧公国系技術者が多数在籍していたAEグラナダの第1開発局が担当したと言われており、AEは様々な形でハイザックの開発に関与していたことは間違いない。また、T3部隊で試験運用されたYRMS-106 ハイザック先行量産型は、AEが開発した機体とされている。

これらを総合すると、地球連邦軍のイニシヤティスの下、AEは積極的な意思表示を避けつつ開発に関与したというのが、ハイザック開発の実態と考えられる。これなら「一年戦争後、地球連邦軍が初めて開発した新設計MS」という文脈は崩れない。

しかし、このような複雑な開発環境や軍および企業の政治力、そして「ガンダム開発計画」系テクノロジーの喪失は、ハイザックの性能を中途半端なものとする要因となった。



◀地球連邦軍とティターンズの主力MSとして運用された。地球連邦軍はバーブル系、ティターンズはグリーン系のカラーで塗装されていた。

▶サイド3のジオン共和国でも使用されている。グリプス戦役期にはザクⅡと同じグリーン系のカラーで塗られたが、U.C.0090年中期にはこの色は禁止されていたとされる。

■連邦・公国系技術が「混在」した構造と問題点■

ハイザックのロールアウトはU.C.0084.07のことであった。その姿——頭部形状や機体各部に露出した動力パイプ、右肩の懸架式シールドおよび左肩のスパイク・アーマーなど——はザクⅡに酷似している。しかし、胸部エアインテークに連邦系MSの影響が見受けられるほか、大型化したバックパックにはサスセンサーを備えた放熱板が2枚設置されるなど、様々な技術様式を垣間見ることができた。

ハイザックがザクⅡに似た外見を与えられたのは、開発担当部局が旧公国系技術者を多く抱えていたためと、旧ジオン公国の生産ラインでも製造可能なためとも言われているが、少なくともザクⅡがベースだったことは間違いない。また大型のバックパックと脚部スラスターは高機動型ザクを彷彿とさせるもので、実際の性能も高機動型ザク・シリーズのR-2タイプに匹敵したとされる。

しかも、全天周視認モニターによる優れた視認性やリニア・シートがもたらす画期的な耐G能力を持ち、ザクⅡF型のように操縦性に優れているのである。これに加えてビーム兵器を携行可能で、宇宙・地上を問わず運用可能であれば、その総合性能は極めて高く評価されるはずであった。

しかし、ハイザックの実際の評価は「凡庸」「中途半端」「ザクの皮を被ったジム」といったもので、お世辞にも高いとは言えなかった。同時期に地球連邦軍の主力MSを務めたジムⅡと比べても性能上の差はなく、部分的には劣っていた。その原因には技術的なものと政治的なものがあり、しかもそれらが相互に影響し作用してしまったのである。

技術的な問題として、技術融合期の序盤に開発されたため、連邦系と公国系の融合が不完全だったことが挙げられる。技術融合ではなく、両系統の技術が混在したのだ（「ガンダム開発計画」系技術の封印も不利に働いている）。

具体的には、駆動方式に公国系の流体内部パルスシステムと連邦系のフィールド・モーターを併用したため、異なる種類のエネルギー経路が複雑化してしまったのである。これは必要に応じて駆動方式を使い分けるためだったが、消費エネルギーやロスが大きくなるばかりでメリットは薄かった。しかも本機の

エネルギー問題はこれだけではない。

消費エネルギーを増大させることになった装備が、主力MSとしては初めて標準搭載された全天周囲モニターとリニア・シートだった。ハイザックのモデルは最初期の量産仕様だったこともあって完成度が高いとは言えず、下方に死角が存在していた。しかし、それ以上に問題だったのが膨大な消費エネルギーだった。コクピットハッチにメインの動力パイプが接続されているのは、その善後策だったとまで言われている。

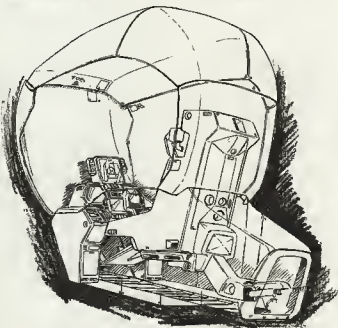
もっとも開発陣は莫大な消費エネルギーをやり込んで設計しており、問題になるとは考えられていなかった。しかし、ここで政治的な問題が発生する。軍部が搭載ジェネレーターを変更するよう指示したのだ。開発陣が想定していたAE製ではなく、タキム重工のジェネレーターがハイザックに搭載されたのは、これが理由とされている。タキム重工は「RX計画」以来、連邦系MS用ジェネレーターを開発、製造してきた企業であり、あらゆる意味での「信頼性」が高かったということであろう。

この結果、ハイザックの胸部はタキム重工製ジェネレーターに合わせて改装され、形状もガンダムやジムに近くなった。しかし、ジェネレーター変更に伴う変化はこれに止まらなかった。まず、パルスコンバーターが予想以上に大型化してしまった。これは、タキム重工製ジェネレーターが流体内パルスシステムを想定していないことが原因と考えられる。ハイザックの腕部に複数の動力パイプが露出しているのは、パルスコンバーターの大型化に伴い胴体内

スペースが減少した厳密せだった。

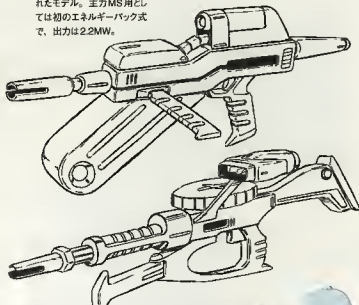
技術的制約にしろ、政治的問題にしろ、ジェネレーター変更によって性能が向上したのであれば問題はなかった。しかし、ジェネレーターと機体の相性が悪かったのか、出力そのものが低かったのかは不明だが、ハイザックは大きな問題を抱えてしまう。ロールアウトしたハイザックは、ふたつ以上のビーム兵器を同時に使用することができなかったのだ。

このためハイザックは、ビーム・ライフルを装備する時は格闘兵装にビート・ホークを、ビーム・サーベルを搭載するなら射撃兵装はザク・マシンガン改を選ぶ必要があった。しかし、これは同時にハイザッ



▲ハイザックと一部のMSに採用された最初期型のリニア・シートと全天周囲モニター。脱出用インジェクションボッドとしての機能もこの時点で有していた。

▼ビーム・ライフルは、ボウワ社製のBR 87Aを使用した。ハイザック開発後に実用化されたモデル。主力MS用としては初のエネルギーバック式で、出力は2.2MW。



▲実体弾兵装はハイザック用としてAEのZEONIC事業部が開発した。ザク・マシンガンのマイナーチェンジ版とも言える。マガジンとつづに装弾数は100発とされる。

■ハイザック各部の技術系列■

技術系列	ハイザックへの投入技術
公設系	<ul style="list-style-type: none"> ▶基本構造および基本形態(ザクII) ▶モノアイ ▶胸部スラスターシステムの構造 ▶流体内パルスシステム※ ▶兵装類
連邦系	<ul style="list-style-type: none"> ▶熱核反応炉/ジェネレーター ▶胸部構造(エアインテーク) ▶モノアイ用消耗品、ドライバ/ソフト ▶脚部駆動系の基本構造(当時のジムに類似) ▶フィールド・モーター※ ▶背面構造(バックパック換装機構の統合) ▶バックパックとの接合規格 ▶全天周囲モニター ▶リニア・シート
新技術	▶インジェクションボッド

※駆動方式は2種類を併用

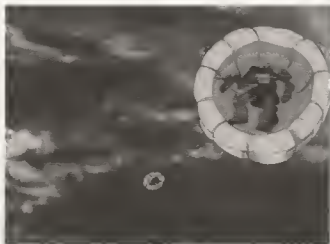
クが多様な兵装を用意された証でもあった。この4つの兵装以外にも、ビーム・ライフルの弾倉であるエネルギー・バックをふたつ収納可能なオプション・シールドや、腰部ラッチに搭載可能なミサイルポッドが開発されており（他にもバズーカ・タイプの火器が開発されたと言われる）、フル装備時の火力は同時代のMSの中では最高レベルに達していた。それに加えて、エネルギー供給用に他のMS1機を必要とするが、極めて大出力かつ長射程のメガ・ランチャーまでも実用化されるなど、兵装の充実ぶりには目を見張るものがあつた。

また後頭部や腰部、両腕や右肩シールドにはオプション・マウントラッチが設けられたほか、バックパックが換装前提の構造となっているなど、ハイザック自体も拡張性を意識したMSとなっていた。

こうした兵装面や拡張機能面での冗長性、前述のザクⅡ譲りの操縦性や大気圏内外運用能力、これらの機能から来る優れた汎用性により、ハイザックの性能は決して低くなかった。特に優れた操縦性と必要十分な総合性能を評価するパイロットは多く、ティターンズが採用したことからも分かるように、費用対効果にも秀でていたのである。戦闘能力も制式化当時はトップクラスであり、旧ジオン公国軍残党

の旧式MSを圧倒できるものだった。

これは「凡庸」とされる一般的な評価と異なっているが、現場でハイザックの悪評はあまり聞かれない（ザクⅡに似た形状を、一部パイロットが嫌った程度である）。機械にはカタログスペックや単純な仕様では計りきれない特性があるという好例と言える。グリプス戦役が勃発すると、エウーゴやアクシズの新型主力MSに対する性能面での優位性はなくなったが、それでもハイザックを愛用するパイロットは多く、終戦まで使用され続けた。



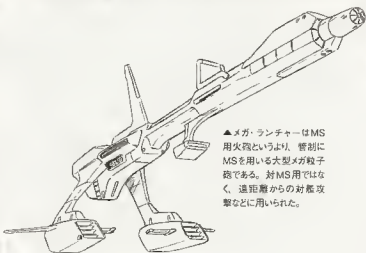
▲サブ・フライト・システムやバリエーション・システムに対応するなど、U.C.0080年代後期のMSの標準的な機能は備えており、高い運用性を持つ機体として知られる。



◀一年戦争後、MSの標準的な格闘兵装となったビーム・サーベル。ハイザックにも装備されており、非使用時には腰部ラッチに搭載する。



▲腰部ラッチに懸架するタイプのミサイル・ポッド。ザクⅡⅢ型用のアポロ・ミサイル・ポッドに近い兵器で、両腕を塞がずに火力の増強が可能であった。



▲メガ・ランチャーはMS用火砲というより、管制にMSを用いる大型メガ粒子砲である。対MS用ではなく、遠距離からの対艦攻撃などに用いられた。



▶初期型の場合は、図のようにMS2機分のエネルギー供給を必要としたが、後にこの問題は解決した。機身下部には開閉機構を備えている。

■ハイザックの欠点を改めた、AEの新型MSマラサイ■

ハイザックは傑作とまでは言えなくても、佳作には充分該当するMSだった。しかし、政治的な問題からジェネレーターの交換を強要された結果、低出力化やビーム兵器の同時使用が不可能になるなどの欠点を抱えていることも事実だった。

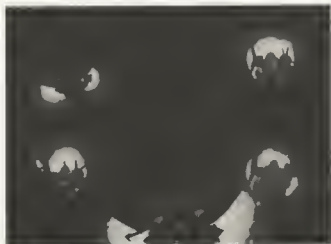
そこでAEはハイザックが制式化されたU.C.0085、その欠点を改善した試作MS、RX-107【ロゼット】を独自に開発した(【ロゼット】はT3部隊が付けた通称)。【ロゼット】は四肢ユニットとバックパックこそハイザック系のものを流用していたが、頭部や胴体は新造されていた。ハイザックの諸問題を引き起こした胴体は重点的に再設計されたようで、地球連邦軍やティターンズに制式採用こそされなかったが、性能は高い水準に達していたのだった。

その形状から【ロゼット】を基に開発されたと思われるのがRMS-108 マラサイである。ティターンズとの軍事衝突を決定した反地球連邦組織エウゴの求めに応じて、AEが開発したMSの1機種だった。開発拠点はハイザックと同じグラナダである。

基本的にはハイザックの発展型で、横一列のモノ

アイ走査レーンや動力パイプが接続された口吻部、胴体の大型動力パイプ、右肩の懸架式シールドや左肩のスバイク・アーマーなど、ザクⅡ独特のシルエットを色濃く残している。頭部に標準装備された長大なマルチスレッドアンテナも、ザク・シリーズの影響であることは間違いない。

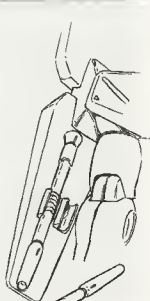
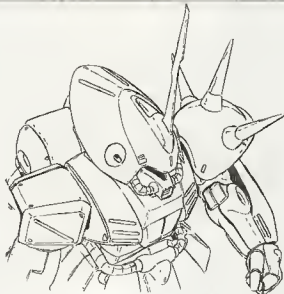
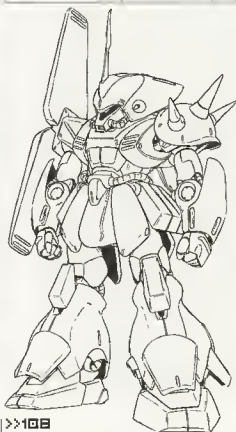
ハイザックからの主な変更点としては、高出力ジェネレーターの搭載によってビーム兵器の同時使用が可能になったほか、新型の全天周閉モニターおよびリニア・シートの搭載、アクシズとの技術交換によ



▲リアス戦後序盤でAEからティターンズへと譲渡された。その後、生産数の増加に伴いティターンズの戦力の中核となっていた。

■ハイザックとマラサイの比較■

型式番号、機体名	頭頂高/全高	本体重量/全機重量	ジェネレーター出力	スラスター総推力	装甲材質	ビーム兵種の同時使用
RMS-108 ハイザック	18.0m/21.2m	38.7t/59.6t	1428kW	64,800kg	チタン合金セラミック複合材	不可
RMS-108 マラサイ	17.5m/20.5m	33.1t/59.4t	1790kW	74,800kg	ガンダリウム合金	可能



▲ハイザックに比べ、動力パイプの露出が減ったほか、胸部エアインテークが小型化されるなど、耐弾性を考慮した設計の下に開発されている。

▲後ろに張り出した頭部や、最大のアンテナ、左肩のスバイク・アーマーなど、開発陣にそういた意図がなかったにせよ、ザクの意匠が見受けられる点が特徴と言える。

▲ビーム・サーベルはシールドの裏に設置する。通常のビーム・サーベルと比べ、発生音が大きい点が特徴である。

って入手したガンダリウム・Yの採用が挙げられる。この結果得られた性能はハイザックを凌駕するもので、カタログスペックでも同時期にAE社が開発していたMSA-003 ネモを僅かながら上回り、エウーゴ用の上位機種だったRMS-099 リック・ディアスと同等だった。当然ながら宇宙・地上を問わない運用性や、サス・フライング・システムおよび大気圏突入用バリュート・システムへの対応など、U.C.0080年代後半以降のMSの標準的な機能も盛り込まれている。こうした高度な性能は、地球連邦軍の恩恵に左右されないAE社だけの開発体制にも因っている。

武装は同時並行的に開発されていたネモ同様、シンプルかつ信頼性が高いものが選ばれ、他機種からの流用も見られた。主兵装のビーム・ライフルは、ハイザックと同じポウパ社製BR-87A（出力2.2MW）、ビーム・サーベルは新規の大型モデル（出力0.4MW）を2基シールドの裏に装備している。他にもバルカン2門を頭部に固定装備しており、兵器形態には地球連邦系MSの影響も見受けられた。

ビーム・ライフルをハイザックと共用していることから分かるように、マラサイとハイザックの間にはある程度の互換性が確保されていた。その互換性はパーツレベルにも及んでいたようで、腕部に初期不良が発生したマラサイの中には、ハイザックの腕部を搭載した機体が見られたとも言われる。もっともマラサイの試作機と見られる「ロゼット」は、ハイ



▲右肩のシールドは中央から折り畳むことが可能。表面には耐ビーム・コーティングが施され、ビーム兵器に對しても十分な防衛力を発揮した。



▲リニア・シートと全天周モニターは以降のスタンダードとなったタイプである。脱出用のインジェクションボッドとして機能する点はハイザック用と同じであった。

ザックの四肢を持つマラサイといった外見をしたおり、互換性には何の不思議もない。

こうしてハイザックを超える主力MS、MSA-002としてエウーゴに供与されるはずだったマラサイだが、グリプス戦役の勃発がその運命を変えた。マラサイはRMS-108としてティターンズに譲渡されたのである。これはエウーゴとの繋がりを疑われたAE社が、それを回避するための政治的判断で行ったことであった。

エウーゴはリック・ディアスとネモの配備を進めていたため、マラサイの喪失自体に緊急性はなかった。しかし、ガンダリウム・Yを含めた新技術がティターンズの手に渡ってしまったのは打撃だった。この結果、ティターンズのMS開発が加速されたのは皮肉であり、マラサイもハイザックとは違う意味で政治に翻弄されたMSとなったのである。



▲マラサイを模したダミーバルーンなども開発された。モニター越しでは本物と区別が付きにくいため、敵の目を欺く効果があった。



▲バリュート・パックを装備したマラサイ。胸部にも追加ブースターが接続されている。ハイザックも同じタイプを使用している。



▲ポウパ社BR-87A以外に、RX-110 ガブスレイ用として開発されたアル・バート社製のフェザーイン・ライフル（出力は6.6MW）を装備した機体も見られた。

MS-06
REPORT

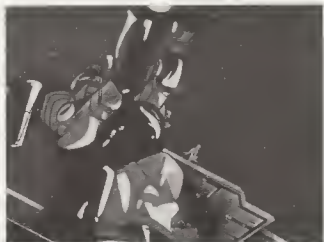
ハイザックとマラサイのパリエーション機

COLUMN 17

多彩なハイザックの改修機

ザクⅡほどパリエーションが多いわけではないが、ハイザックをベースとした改修派生型が数タイプ開発されている。その代表的な機体が、狙撃仕様／総合性能向上型のRMS-106CS ハイザック・カスタムと偵察タイプのRMS-119 アイザックである。

出力2.1MWの狙撃用ビーム・ランチャーを主戦力とするハイザック・カスタムは、その任務から「かくれハイザック」とも呼ばれる局地戦用MSである（ティターンズの現地改修機とも言われる）。ただしザクI・スナイパータイプのような狙撃特化型ではなく、ビーム兵器の同時使用を可能としたほか、一部装甲へのガンダリウム合金採用、T3部隊の試験運用データを反映したという高機動型バックパックの搭載などによって、マラサイに匹敵する基本性能を獲得している。グリプス戦役ではティ



▲ハイザック・カスタムは、原型機に比べ、センサー能力や火器管制能力に優れていたとされ、数十km先のMSを狙撃可能であった。

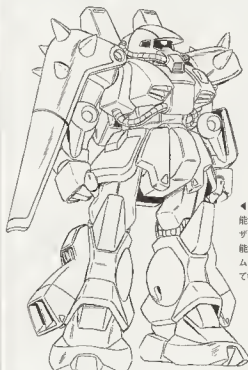


▲ティターンズで使用されていた機体はグリーンやグレーで塗られていたが、アフリカの反地球連邦組織に奪取された機体は、ブルー系で塗装された。

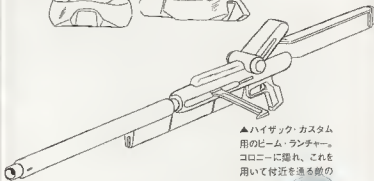
ターンズによって運用され、U.C.0090年代中期にはジオン共和国軍にも配備されていた。

全面改装机に近いハイザック・カスタムと異なり、センサー系を重点的に改修した機体が偵察用MSのアイザックだった。開発はグラナダではなく、ルナツーで行われた。主な改修点は巨大なレドームを持つ専用頭部への換装、股間部やバックパックへのセンサー増設などで、ミノフスキー粒子散布環境でも遠距離からの偵察が可能となった。得られた情報はバックパックの通信用ディスクアンテナで送信するか、情報を記録したデータ・ポッドを射出するようになっていた。当然、地球連邦軍の機体だが、第一次ネオ・ジオン戦争でネオ・ジオンやアフリカ・ゲリラの手に渡り、U.C.0090年代中期には「袖付き」と俗称されるネオ・ジオン残党が使用した。

他にも制式採用されなかったパリエーションとして、ハイザック先行量産型に実体弾式キャノン・バックを搭



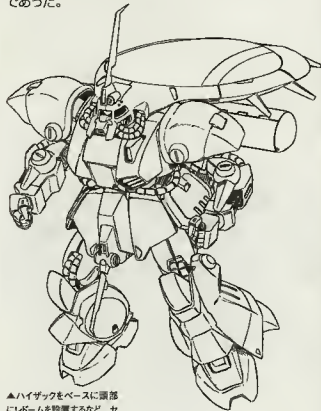
▲ハイザックの総合性能向上型とも言えるハイザック・カスタム。狙撃能力も高く、専用のビーム・ランチャーを装備していた。



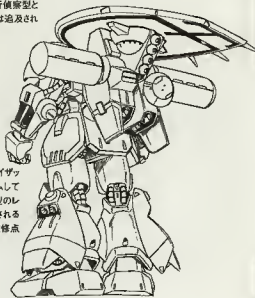
▲ハイザック・カスタム用のビーム・ランチャー。コロニーに隠れ、これを用いて付近を巡る敵のMSを狙撃する部隊なども存在した。

載したRMS-106C ハイザック・キャノン、試作型高出力ロングレンジ・ビーム・キャノンや簡易MA的ユニットと合体したYRMS-106+BL-B5X ハイザックTR-2 [ビッグウィグ] があり、T3部隊で試験運用されたと言われている。

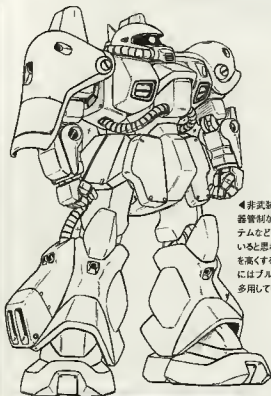
なお、T3部隊の試験運用機RX-124 ガンダムTR6に「ハイザックII」と呼ばれる装備形態が提案されていたが、腕部のみハイザックのものを流用したプランであり、技術系譜上の繋がりは皆無だった。RMS-116H ホビー・ハイザックも制式採用機ではないが、これは非武装化して民間に払い下げられた機体で、スポーツ機に近いMSであった。



▲ハイザックをベースに頭部にレドームを設置するなど、センサー性能を徹底的に強化したタイプ。ザク強行偵察型とは異なり、機動性は追及されていなかったようだ。



▶バックパックもハイザックのものをカスタムしていたようだが、小型のレドームなどが追加されるなど、いくつかの改修点が見られる。



◀非武装の民間機。火器管制などに必要なシステムなども取り除かれていると思われる。視認性を高めるために、機体色にはブルーやホワイトを多用している。



◀戦闘用の装備などが排除されているためか、原型機よりも運動性は高かったとされる。本機はU.C.0093頃に使用されており、購入を希望する者も多かったと言われる。

数少ないマラサイの派生機

マラサイは戦時故のMS開発競争の激化や、装備組織だったティターンズが消滅したこともあって、短命な機体となった（グリプス戦役と第一次ネオ・ジオン戦争の一時期に見られた程度）。このためマラサイのバリエーションは極端に少なく、前述のハイザック用腕部に換装した機体や一部装備が異なる小改裝機が存在した程度だったようである。

それでもマラサイの直接的原型機と思われる[ロゼット]は、T3部隊での試験運用時にふたつのバリエーションが試されたという。ひとつが大気圏突入機構兼サブ・フライト・システムの増加変形システムを搭載したRX-107 TR-4[ダンディライアン]、もうひとつが熱核ジェット式のホバリング・スカート・ユニットを搭載したRX-107[ロゼット]強化陸戦形態である。他にも熱核ロケット式の強化陸戦形態が提案されていたが、プランのみに終わっている。



ネオ・ジオン系の 新世代型ザク・シリーズ

■ザクⅡを継ぐMS、ザクⅢ■

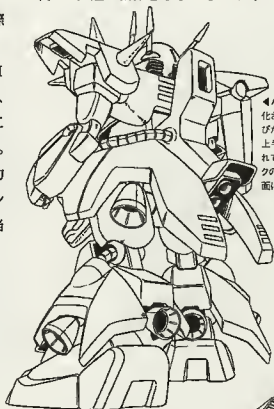
U.C.0085に地球連邦軍が主力MSとして採用したハイザックは「ザク」に酷似した外見が特徴で、ティターンズ機に至ってはグリーン系で塗装されていたため見た目はザクⅡ以外の何物でもなかった。こうしたハイザックの外見は、名機ザクⅡに誇りを抱く旧ジオン公国軍残党を刺激したが、中でも強い衝撃を受けたのは残党最大勢力アクシズの技術者たちであった。アクシズはアステロイドベルトの小惑星基地アクシズに落ち延びた旧ジオン公国軍残党最大勢力で、ザビ家皇女ミネバ・ラオ・ザビを頂くことからジオン公国の正統後継組織を自認しており、実際にジオン公国を名乗るだけの力を蓄えつつあった。

こうした事情から、ハイザックを新世代のザクⅡと認めるわけにはいかないアクシズの技術者たちは、威信をかけてザクⅡの後継機の開発に着手した。この結果、誕生したMSが、AMX-011 ザクⅢである。生産は一年戦争後にアクシズ（ネオ・ジオン）に協力したMS関連企業で、旧ZEONIC社系MSやガザ・シリーズの製造も請け負っていたヘクタ・ドナ社が担当

したと言われている。

ハイザックへの対抗上、ザクⅢの開発コンセプトは「ザクⅡ直系の後継機」という抽象的なものだったが、具体的な指針も提示されていた。本体はザクⅡだけでなく、ドムやゲルググなどの公国系MSの集大成となる高性能かつ汎用性に秀でる機体として開発され、さらに固定火器による火力と戦闘能力も重視された。ザクⅡの特長だった高度な汎用・拡張性は、バックパックやスカートの換装および増設機能で実現された。

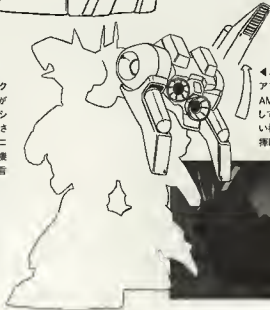
高いポテンシャルを持つ機体に様々なバックパックを組み合わせる発想はゲルググに近いが、火力重視は第一次ネオ・ジオン戦争期の傾向であり、第4世代MSに近い機体ともなっていた（一年戦争型のMS



◀バックパックはオプション化されており、重部から伸びた支持棒に接続される。上半身の自由度が確保されているほか、バックパックの換装によって様々な局面に対応する。



◀頭部や右肩のスパイクアーマーにザクⅡの意匠が見受けられるが、全体のシルエットは僅MSを彷彿とさせる。ダブリンへのコロニー落しの際に投入された機体で、重力圏使用とも言われる。



◀バックパックのバーニアアームは可動式で、AMBAC技の補助用として、大気圏内でも高い機動性と運動性を発揮した。

が第1世代MS、全天周モニターとリニア・シート、ガンダリム合金やムーバプル・フレームなどを採用したMSが第2世代MS、変形機構にムーバプル・フレームを取り入れた可変MSが第3世代MS、高出力メガ粒子砲とサイコミュを搭載したMSが第4世代MSと呼ばれている。第一次ネオ・ジオン戦争時に投入されたザクⅢは、ザクⅡの欠点だった装甲防御力を改善しつつ、高度な火力と機動性を併せ持つハイスペックマシンとして完成していた。

兵装はビーム・サーベル兼用の腰アーマー部ビーム砲（出力2.8MW）を2門、口吻部ビーム砲（出力1.6MW）を固定装備しており、これだけでも地球連邦軍やエウーゴのMSを圧倒する火力を有していた。手持ち火器として専用ビーム・ライフルが開発されていたが完成せず、AMX-104 R・ジャジャ用の銃剣付きビーム・ライフル（出力3.1MW）を装備することになった。またザクⅡ系特有の右肩部懸架式シールドには、予備のビーム・サーベルやクラッカー（手榴弾）が搭載されていたようである。



▲MS本体の高いポテンシャルや機動性だけでなく、固定火器による高火力など、総合性能に秀でる機体であった。しかし、生産数は少なかった。

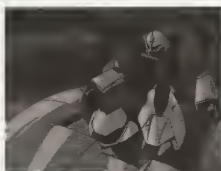


▲機体の出力も高く、ダブリンでの戦闘ではエウーゴのZZガンダムとも互角の格闘戦を繰り広げることがあった。

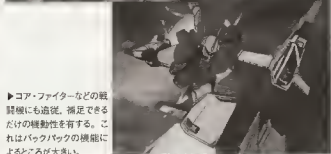
機動性はハイザックの3倍近い172,600kgものスラスター総推力や、ベクターズスラスターおよびAMBACシステム補助機として機能するバックバック部バーニアアームなどが冴っており、大気圏内でも恐るべき機動・運動能力を発揮した。

こうした高スペックを与えられたザクⅢは、エウーゴの旗艦シップマシンMSZ-010 ZZガンダムを追い詰めるほどの戦闘能力を発揮した。しかし、火力や機動性に勝ると共に一般パイロットでも使用できる準サイコミュを搭載した第4世代MS、AMX-014 ドーベン・ウルフの量産が優先された結果、ザクⅢは数機分のメインフレームといくつかのオプションがロールアウトしただけであった。

これは単なる性能差以前に、ネオ・ジオン（アクシズが標榜した変名）が決戦兵器たる第4世代MSや地球侵攻用の局地戦用MSなどの戦略意図に沿ったMS開発を優先していたことが理由であり、その余波を受けたザクⅢの開発自体が遅延していたのである。こうした見地に立てば、ザクⅢは開発意図からしてプロバガンダ的なMSに過ぎず、戦力としては期待されていなかったのかもしれない。



▲大気圏内では、サブ・フライト・システムを使用することもあった。長距離移動時の推進剤の節約のためと思われる。



▶コア・ファイターなどの戦闘機にも追従、補足できるだけの機動性を有する。これはバック・バックの機能によるところが大きい。



▲ZZガンダムを押し込めようとするザクⅢ。変MSならではの出力と高い機動性を有する本機ならではの戦法といえる。

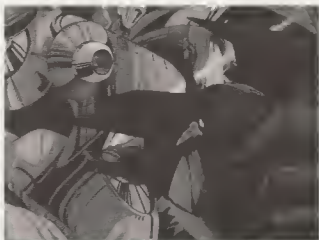
MS-06
REPORT

原型機以上の高性能を達成したザクⅢのバリエーション機

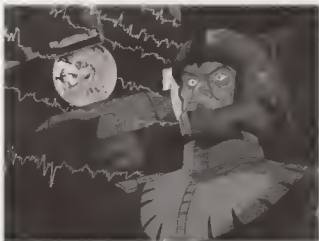
COLUMN 18

強化人間用MS、ザクⅢ改

強化人間マシュマー・セロ用としてサイココミュ、または準サイココミュのバイオ・センサーを搭載したとされる機体が総合性能強化型のAMX-011S ザクⅢ改である。背部接続式に改められた高推力バックパック、標準型と比べて約8倍の燃料を積載可能な大容量プロペラントタンク、バーニアスタビライザーとして機能する延長式リアスカートなどにより、機動・運動性が著しく向上している（ロールアウトしていた数少ないザクⅢ用オプションの内、高機動戦闘用のみを実装したとも言われる）。武装面では口吻部ビーム砲が取り除かれたが、頭部バルカンやハイドポンプ投下器が追加されたほか、手持ち火器として専用ビーム・ライフルが装備されており、総合火力は原型機を上回ることになった。ジェネレーター出力も強化され、この結果、第4世代MSに比肩する戦闘



▲第4世代MSのような大型火器は装備しないが、対MS戦闘能力に秀でており、サイココミュを搭載した巨大MS、NZ-000 クイン・マンサと互角の戦いを見せた。



▲ドーベン・ウルフを装備するスペース・ウルフ隊との戦いで撃破されたが、その際はサイココミュのオーバーロードと思われる状態に陥っていた。

能力を獲得、型式番号末尾の「S」に相応しい高性能機となっている。



◀原型機を改良したザクⅢ改。ザクⅢを凌ぐ性能を持つ重MSであり、強化人間のマシュマー・セロが操縦することで絶大な戦闘能力を発揮した。



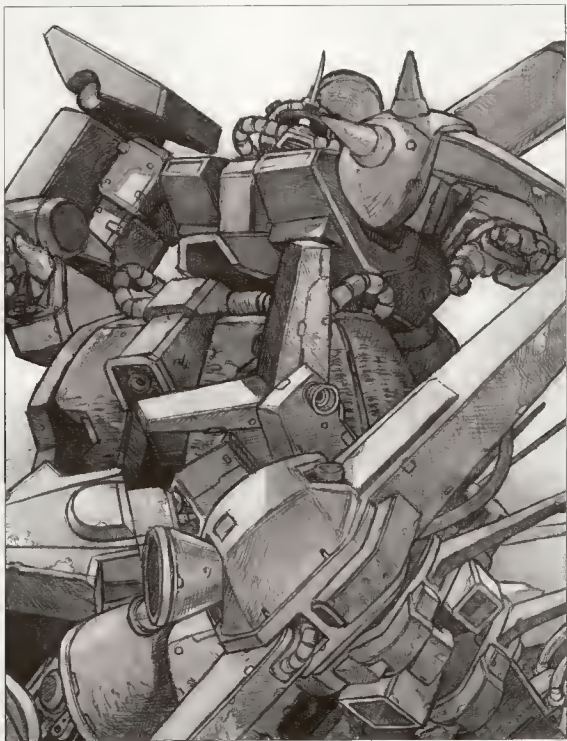
▶大型バックパックをはじめ、背面には多数のバーニアやスラスタが設置されている。これにより、同時代のMSの中でも最高クラスの機動性を有する機体として知られる。



◀ザクⅢを複製とさせる頭部。ザクⅢに装備されていた口吻部ビーム砲は排され、30mmバルカン砲が装備された。前後2本のアンテナも併設である。

▼長砲身を持つ専用のビーム・ライフル。ただし、マシュマーは未装備で出撃したため、使用されることはなかった。





新型機への過渡期的存在となったザクⅡ後期型

第一次ネオ・ジオン戦争でネオ・ジオンは敗北したが、シャア・アズナブルの復帰を受けた残党組織は活動を活性化させており、秘匿された開発基地でザクⅡの改良が行われていた。こうして誕生した派生機が、AMX-011C ザクⅡ後期型である。

ザクⅡ後期型は原型機の特徴であった機動性と火力を強化しているが、オプションとして燃料タンクを大容量化した長時間作戦用バックパックが開発されており、特に機動性が向上していると言える。また、バックパック

接続方式が原型機の腰部支持架接続型から背部接続型に改められたほか、頭部も口吻部ビーム砲なしの新型モデルが採用されるなど、ザクⅡ改の影響が見受けられる。

こうした改良によって、ザクⅡ改は高性能機でありながらMSの原点たる「白兵戦用機動歩兵」に近付いており、ネオ・ジオンの新型MS、ドーガ・シリーズへの過渡期的存在になったと考えられている。またザクⅡ後期型の派生機として、スモークディスチャージャーや砂中スコープ、増加装甲を装備した陸戦仕様が開発されたとも言われている。

..



■ 新生ネオ・ジオンの汎用主力機、ギラ・ドーガ ■

内部分裂と指導者ハマーン・カーンの死、組織の象徴であったミネバ・ラオ・ザビの失踪により、第一次ネオ・ジオン戦争に敗れたネオ・ジオンだったが、グリプス戦役終結時に行方不明となっていたシャア・アズナブルの帰還により求心力を取り戻した。地球連邦との軍事衝突を決意していたシャアは、軍備拡充のため新型MSの開発と生産を進めた。この中でネオ・ジオンの新型主力機として採用された機体がAMS-119 ギラ・ドーガであった。

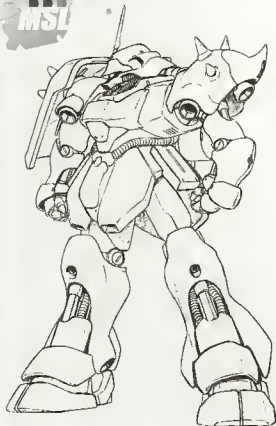
グリプス戦役での可変MSの出現と火力増大傾向、続く第一次ネオ・ジオン戦争における更なる火力増強やサイコミュの搭載といった高性能化は、「恐竜的」と呼ばれるほどの進化をMSにもたらした。しかしこれはMSが進化の袋小路に入りつつあることを意味していたおり、整備・運用を含めた総合コストの高騰も招いていたのである。

こうした状況の中、MSは一年戦争〜グリプス戦役初期の「白兵戦用機動歩兵」に原点回帰すべきという風潮が強まり、第一次ネオ・ジオン戦争後の新型MSはシンプルかつ低コストであった第2世代タイプが好まれるようになった。その代表的な機体がジム系発展機の連邦軍主力MS、RGM-89 ジェガンであった。

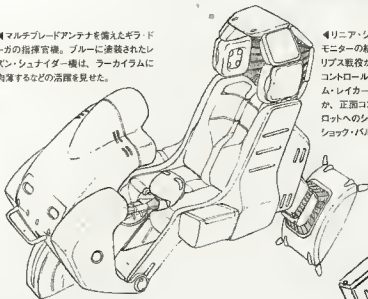
ネオ・ジオンでも強襲用MA——NZ-333 α・アジール——開発による資金不足も手伝って、MSの原点回帰に肯定的だった。そこで第一次ネオ・ジオン戦争時、ザクⅡをベースとして開発されていたシンプルな新設計機を主力MSとして採用することにした。そこに操縦・管制系などの改修を加えたのがギラ・ドーガである（ザクⅢ後期型やそれ以前のドーガ系MSのデータも反映されていると思われる）

第一次ネオ・ジオン戦争時に設計されたとはいえ、ザクⅡがベースとなっていたギラ・ドーガは過剰な火



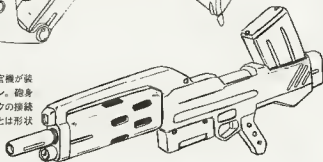


▲マルチブレードアンテナを備えたギラ・ドーガの指揮官機。ブルーに塗装されたレンジ・シュナイダー機は、ラーカイラムに肉薄するなどの活躍を見た。



▲リアア・シートと全天周モニターを組み合わせた、グリップス駆役から変わらないが、コントロールスティックがアーム・レイカーに変更されたほか、正面コンソールにはパイロットへのショックを軽減するショック・バルーンを搭載。

▶ギラ・ドーガの指揮官機が装備したビーム・マシンガン。砲身の数やエネルギーバックの接続位置など、一般機用とは形状が異なっている。



力や特殊機能を求めないスタンダードなMSであり、U.C.0090年代の戦略環境にマッチした機体だった。ザクⅡのスタイルをほぼそのまま踏襲しているのも、当時の主力MSとして相応しいことの証明と言える。

ギラ・ドーガの基本構造は第2世代MSのそれで、非変形型のムーバブル・フレームを中心にジェネレーターや推進器、機器類や装甲などを搭載し、内装火器は装備しない。ただし、これはギラ・ドーガがグリプス戦役期のMSレベルの性能しか持たないということではなく、駆動性や出力などの基本性能は総じて向上している。特徴的なのは長距離航行用のバックパックを標準装備している点で、長時間ミッションを前提としていたことが伺える。

兵装形態はビーム・ライフル系火器とビーム・サーベル系格闘兵装を中心に、補助火器を搭載したシールドを装備している。これはU.C.0090年代のスタンダードな構成であった。

メインウェポンはMIP社製のビーム・マシンガンX-119NZ-D1で、エネルギー・バックひとつあたりの発射回数は60発、出力は6MWである。砲口は上下にふたつ存在しており、ベレット状のビームを交互に発射することで砲身の加熱を低減させるほか、連射性能を向上させているようである。単発の威力を重視するビーム・ライフルと異なり、弾薬による制

圧などに適しているほか、集弾効果による大威力も期待できる。これに加えて通常のビーム・ライフルとしても使用できるうえ、砲身の下にはグレネード・ランチャーを搭載、ストックが伸縮式であるなど、多機能火器となっている。なお指揮官機用は単砲口型で形状も異なるが、基本的な機能は同じである。

ビーム・ソード・アックスは、複数のタイプのビーム刃を展開できる多用途な格闘兵装である。刀身が長いビーム・サーベルや至近距離での大威力攻撃に適したビーム・アックス、貫通力が高く作業用トーチとしても使用できるビーム・ピックの3形態に使い分けることが可能だ。なおビーム刃は目標が効果範囲に入った時のみ展開される閂式で、刃の形状は最適なものが自動で選択される。

左肘に接続される折り畳み式シールドの裏には、主にグレネード・ランチャーとして用いられる多目的



▲シンブルだが信頼性の高い設計と、ビーム・マシンガンをはじめとするスタンダードな兵装によって、ギラ・ドーガは極めて高い総合性能を獲得していた。

発射機が4基固定装備されているほか、シュツルム・ファウストを4基搭載可能である。

こうして低コストながら充実した性能を持ったギラ・ドーガは、AEグラナダ工場で100機あまりが生産され、82機（内10機が指揮官機）が「シャアの反

乱」こと第二次ネオ・ジオン戦争に投入された。結果的にネオ・ジオンは敗れたものの、一連の戦いにおいて地球連邦軍の主力MSであるジェガンと互角の性能を見せており、U.C.0090年代の名機であることは間違いない。

MS-06
REPORT

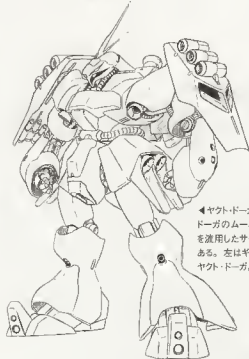
ギラ・ドーガのバリエーションと後継の新型主力MS

COLUMN 19

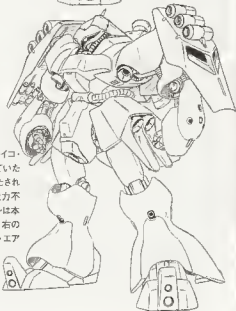
不調に終わったギラ・ドーガの派生機

シャア・アズナブル総帥のネオ・ジオンの主力MSとして採用されたギラ・ドーガは、特殊用途機や新型機の開発ベースとしても利用された。

簡単な改修機としては、20cmランゲ・ブルーノ砲



◀ヤクト・ドーガは2機ともギラ・ドーガのムーバブル・フレームを流用したサイコミュ搭載機である。左はギュネイ・ガス用のヤクト・ドーガ。



▶ヤクト・ドーガにはサイコミュフレームが採用されていたが、要求性能は満たされなかった。しかし、戦力不足であったネオ・ジオンは本機も戦力化している。右のヤクト・ドーガはクェス・エア用である。

を搭載のバックパックを備えたギラ・ドーガ（重武装仕様）がある。これは陸戦タイプのバリエーションで、腕部メガ・ビーム・キャノンやシュツルム・ブースターも追加装備したとも言われる。

重武装仕様は成功例と言っている機体だが、他の派生機は様々な困難に見舞われた。指揮官機として設計されたAMS-119S ギラ・ドーガ改は、装甲材にガンダリウム合金を採用することで装甲強度が40%も向上したほか、アビオニクスを更新によって追従性や探知能力もノーマル機を超えている。しかし、α・アジール開発に伴う資金難によって開発は中断され、試作に止まったようである。

ギラ・ドーガ改とほぼ同時期に開発されていたAMS-120X ギラ・ドーガ（サイコミュ試験タイプ）も不遇に終わったMSだった。これはギラ・ドーガにサイコミュとファンネルを搭載すると共に火力を強化した改修機で、少数勢力ゆえに一騎当千の機体を必要としたネオ・ジオンには必要不可欠な兵器と言えた。しかし、サイコミュ・フレームの実用化以前だったためサイコミュの小型化に失敗。サイコミュ試験タイプ自体も日の目を見なかった。なお、サイコミュ試験タイプをベースにAE社で開発されたサイコミュ・フレーム搭載機がMSN-03 ヤクト・ドーガであるが、こちらも性能不足と判断され、MSN-04 サザビーが開発されることになる。



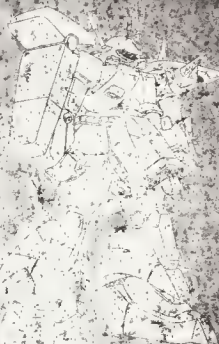
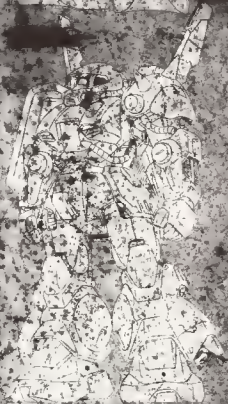
▲要求性能は満たさなかったが、強化人間であるギュネイが搭乗することで、ファンネルの使用も可能であった。アウクス攻防戦では多数のミサイルをファンネルで撃墜している。



MSL

CATALOG

サケ・シリーズカタログ



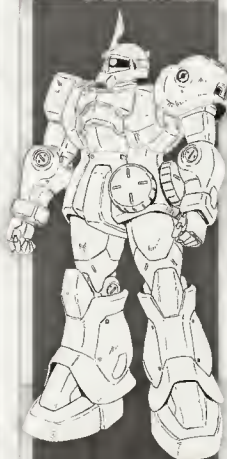
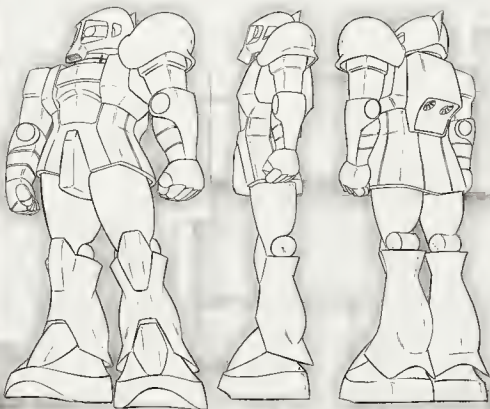
MS-05B

ザクI

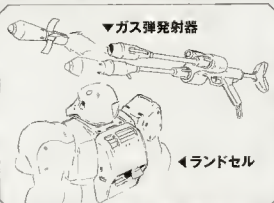
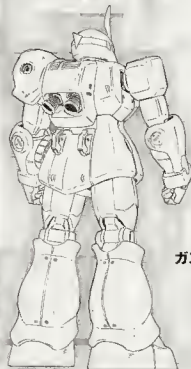
ZEONIC社が開発した史上初の実戦用MS。超小型熱核反応炉の搭載や腕部マニピュレーターによる柔軟な兵装携行など、MSの基礎となるシステムと性能を実現し、MS-06ザクIIの原型となった。

スペック

全高:17.5m / 本体重量:50.3t (全機重量:65.0t) / ジェネレーター出力:899kW
スラスター推力:40,700kg / 装甲材質:
超硬スチール合金 / 武装:ザクマシンガン、
ザクバズーカ、ヒートホーク、ガス弾発
射器他



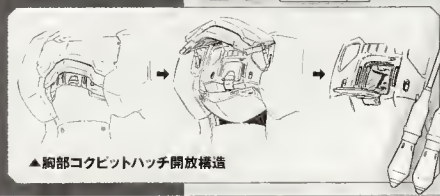
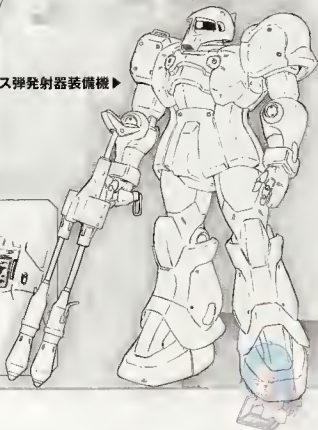
◀トップ小隊所属 トップ機



▼ガス弾発射器

◀ランドセル

ガス弾発射器装備機▶



▲胸部コクピットハッチ開放構造

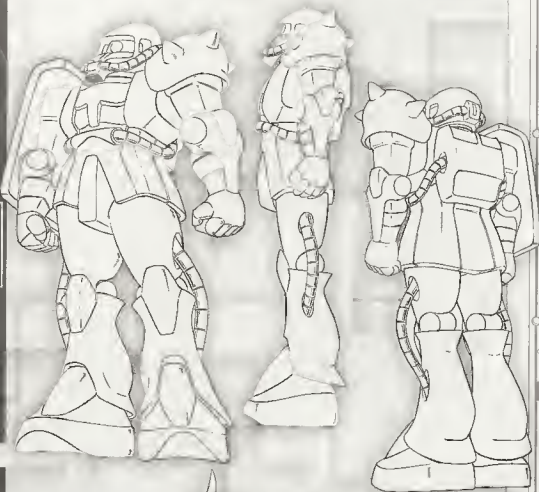
MS-06F

ザクⅡF型

MS-05 ザクIを元にZEONIC社が開発したMS。優れた汎用性と拡張性を有し、ザク系列機のみならずジオン公国軍のMS開発全般に影響を与えた一年戦争を代表する名機。

SPEC

全高:17.5m / 本体重量:56.2t (全備重量:74.5t) / ジェネレーター出力:976kW / スラスター推力:43,300kg / 装甲材質:超硬スチール合金 / 武装:ザクマシンガン、ザク・バズーカ、ヒート・ホーク、シールド他



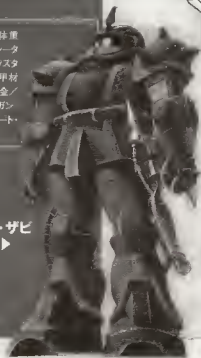
MS-06S

ザクⅡS型

総合性能を向上させたF型の派生機種で、頭部にマルチブレードアンテナを装備する。主に指揮官機として運用され、『赤い彗星』シャア・アズナブルの愛機としても名を馳せた。

SPEC

全高:17.5m / 本体重量:56.2t / ジェネレーター出力:不明 / スラスター推力:不明 / 装甲材質:超硬スチール合金 / 武装:ザク・マシンガン、ザク・バズーカ、ヒート・ホーク、シールド他



ドズル・ザビ
専用機▶



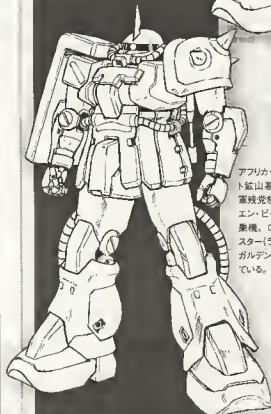
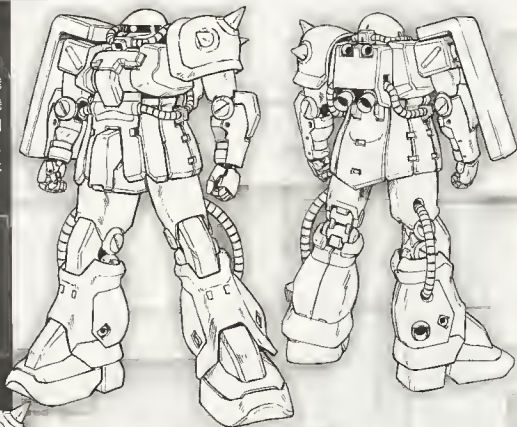
MS-06F-2

ザクⅡF2型

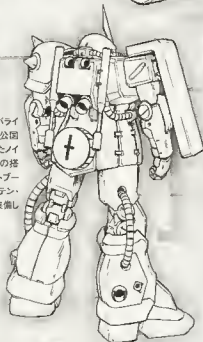
統合整備計画に準拠して開発されたF型の後期生産型。機動性の強化による対MS戦闘能力の向上が図られており、戦後もジオン公国軍残党によって運用された。

スペック

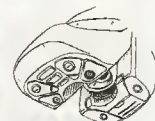
全高:17.5m 本体重量:49.9t (全備重量:70.3t) ジェネレーター出力:986kW / スラスター推力 53,400Kg (20,500Kg x 2 + 3,100Kg x 4) 180度姿勢交換:1.7sec 装甲材質:超硬スチール合金
武装:ザク・マシンガン、MMP-80マシンガン、シュバルム・ファウスト、腕部3連装ミサイル・ポッド、ハンド・グレナード、ヒートホーク、シールド他



アフリカ・キンバライト鉱山基地の公国軍残党を率いたノイエ・ビッターの搭乗機。ロケットブラスター(ラケーデン・ガルデン)を装備している。



◀ノイエ・ビッター機

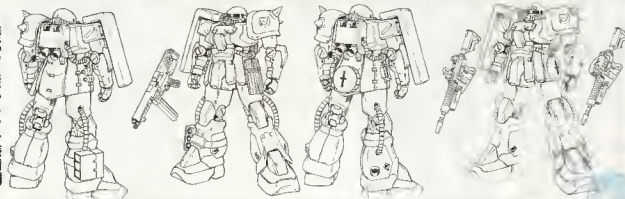


▲足裏構造



▲アッブリケアーマー
装備頭部

▶腰部ウェポンラッチ装備例



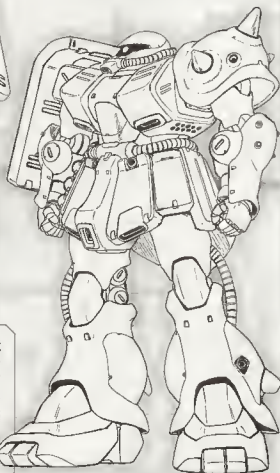
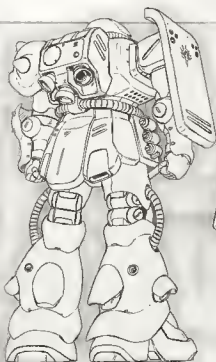
MS-06FZ

ザクⅡ改

統合整備計画に基づいたF型直系の最終生産型で、FZ型とも呼ばれる。スラスターの強化などによる機動性向上に重点を置いているが、その反面、作戦継続時間は短くなっている。

SPEC

全高:17.5m/本体重量:56.2t (全備重量:74.5t) ジェネレーター出力:976kW
スラスター推力:79,500kg (24,500kg×3+3,000kg×2) アギシモーター数:14/装甲材質:チタン・セブミック複合材
武装:MMP-80マシンガン、ハンド・グレネード、シュールド・ファウスト、ヒート・ホーク、シールド砲



▼コクピットハッチ開放構造



▶Bタイプ頭部



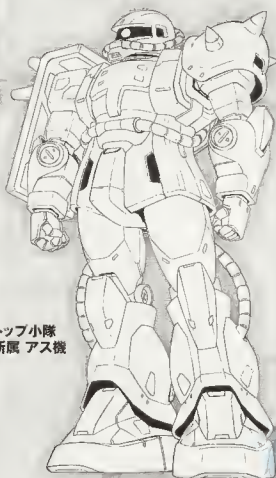
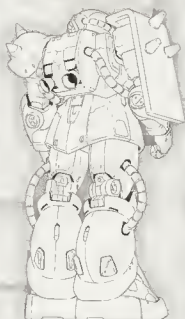
MS-06J

ザクⅡJ型

地上戦を想定してF型を重力下仕様に変更した陸戦用MS。陸戦型ザクⅡとも呼ばれ、運用地域によって小改裝を施したバリエーションも存在する。図はそのひとつであるMS-06JC (JC型)。

SPEC

全高:17.5m 本体重量:56.2t (全備重量:74.5t) / ジェネレーター出力:976kW
スラスター推力:43,300kg / 装甲材質:超硬スチール合金 武装:ザクマシンガン、ザク・バズーカ、ヒート・ホーク、3連装ミサイルポッド、クラッカー、マゼラトップ弾、シールド

◀トップ小隊
所属 アス機トップ小隊
所属 デル機▶

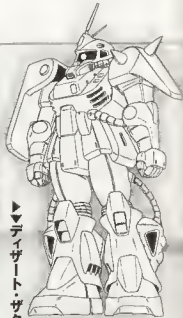
MS-06D

ザク・デザート タイプ

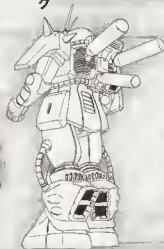
防塵仕様を施して砂漠戦に特化したJ型の派生機。シングル・アンテナタイプとダブル・アンテナタイプの2種、さらに同系列機としてディザート・ザクが存在する。

スペック

全高:19.6m (頭頂高:18.5m) 本体重量:44.7t (全重量:69.5t) / ジェネレーター出力:1,440kW / 移動用ジェット推力:8,400kg (4,200kg×2) / 装甲材質:超硬スチール合金 / 武装:ヒートマホーク、クワッサー・ボグド、シールド、シャットスキャー×2、腕部バルカン砲×2、マシンガン、ロケットランチャー他
※デザートはディザート・ザクのもの



▶ディザートザク



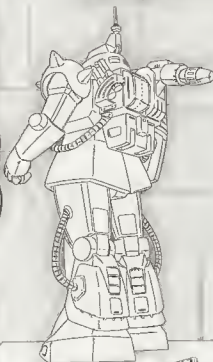
MS-06K

ザクキャノン

中距離砲撃支援を運用目的としてJ型を改修した陸戦用MS。ランドセルの換装機構を利用して兵装を追加した機体で、のちに地球連邦軍が宇宙戦仕様に改装して運用した。

スペック

頭頂高:17.7m 本体重量:59.1t / ジェネレーター出力:976kW スラスター推力:41,000kg 装甲材質:超硬スチール合金 / 武装:180mmキャノン砲、2連装ロケット弾ボグド×2、2連装スモークディスチャージャー他



ダブルアンテナ仕様機
(ラビットタイプ)▶

◀極東戦線で運用されたザクキャノン



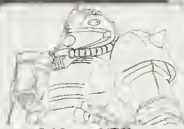
MS-06M (MSM-01)

水中用ザク

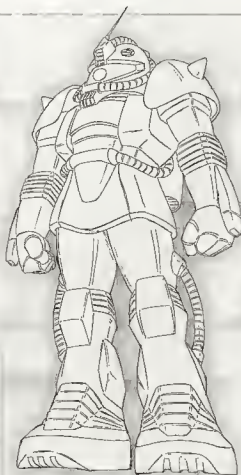
宇宙戦仕様のザクⅡを元に水中戦への対応を図った派生機。性能面に問題が多く、水陸両用MS開発のためのデータ収集機として運用された。戦後は地球連邦軍が接収した。

SPEC

全高:17.5m / 本体重量:43.3t / ジェネレーター出力:951kW / スラスター推力:66,000kg / 装甲材質:高硬スチール合金 / 武装:頭部バルカン砲x2、サブロケットガン、240mm4連装ロケット・ポッド



▲240mm4連装
ロケット・ポッド



▼サブロケットガン



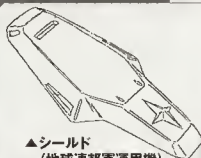
MS-06E

ザク強行偵察型

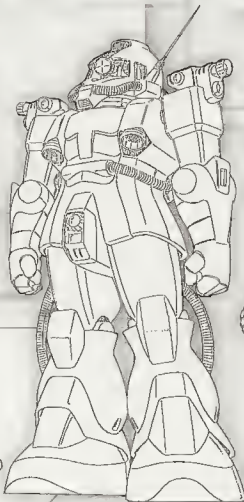
光学カメラの増設などによって索敵能力を強化したザクⅡの偵察用派生機。非武装だが一年戦争期のザク系列機の中でも高い機動性を誇り、戦後は地球連邦軍が運用している。

SPEC

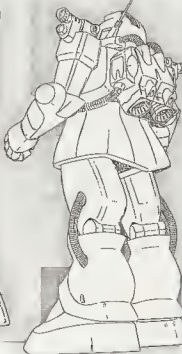
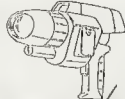
全高:18.0m (頭頂高:17.7m) / 本体重量:60.4t (全備重量:76.2t) / ジェネレーター出力:951kW / スラスター推力:63,750kg / 装甲材質:高硬スチール合金 / 武装:カメラガン、シールド



▲シールド
(地球連邦軍運用機)



▼カメラガン



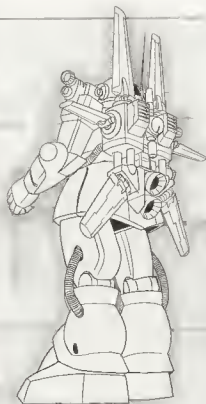
MS-06E-3

ザク・フリッパー

ザク強行偵察型に改良を施して偵察能力をより向上させた機体。頭部が3連カメラに換装されているほか、ランドセルに複合的な探査システムを搭載してセンサー性能の強化を図っている。

スペック

全高:16.7m / 本体重量:61.5t / ジェネレーター出力:不明 / スラスター推力:不明 / 武装:なし



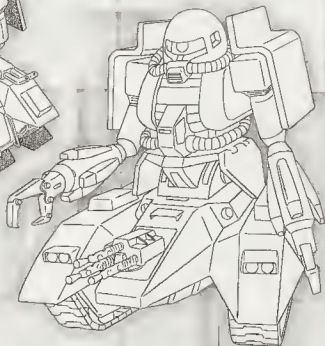
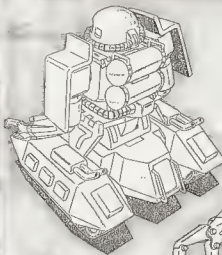
MS-06V

ザク・タンク

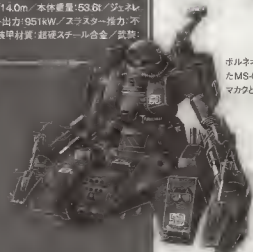
ザクⅡの上半身とマゼラ・ベースを流用して製造された作業用MS。現地改修機の性質が強く、運用地域によって異なる仕様の機体が存在し、中にはザクⅠのパーツを流用したものもある。

スペック

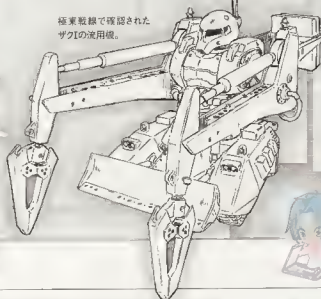
全高:14.0m / 本体重量:53.6t / ジェネレーター出力:951kW / スラスター推力:不明 / 装甲材質:超硬スチール合金 / 武装:機銃



ホルネオ戦線で運用されたMS-06V-6。グリーンマカクと呼ばれる。



極東戦線で確認されたザクⅠの運用機。



MS-06R

高機動型ザク

RP型のデータを基にF型の設計を全面的に見直し、宇宙戦への特化を図った高機動仕様機。このR (R-1) 型は初期生産型にあたり、推進剤消費率やクオリティに問題を残していた。

SPEC

全高:17.5m / 本体重量:61.8t (全備重量:76.8t) / ジェネレーター出力:1,012kW
スラスター推力:62,000kg。装甲材質:
超硬スチール合金 / 武装:ザクマシンガン、
ザク・バズーカ 他

▶ MS-06R-1A
シン・マツナガ専用機(左)

▶ MS-06R-1A
黒い三連星専用機(右)

R型の問題点を解消すべく改修を施した後期生産機。コストや燃費の制約から主力化は見送られたが、高い機動性が評価されて多くのエースパイロットに愛用された。

SPEC

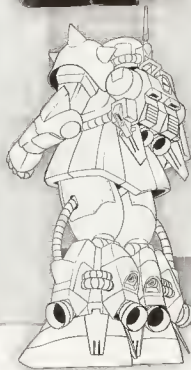
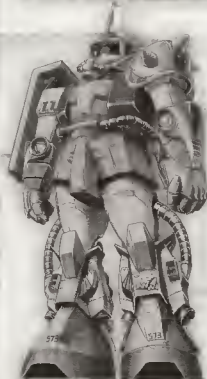
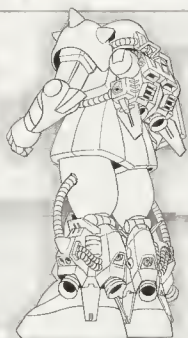
全高:17.5m / 本体重量:61.8t (全備重量:76.8t) / ジェネレーター出力:1,012kW
スラスター推力:52,000kg。装甲材質:
超硬スチール合金 / 武装:ザクマシンガン、
ザク・バズーカ、ヒートホーク、シールド

▶ MS-06RP 高機動型
ザク・プロトタイプ

ザクIIの高機動化に際してF型をベースに製造された試験機。脚部大型スラスターの装備やランドセルの大推力化などが試みられ、R型系列機の基本設計を確立させた。

SPEC

全高:17.5m。本体重量:不明 / ジェネレーター出力:不明 / スラスター推力:不明
装甲材質:不明。武装:試作420mmロケット・バズーカ



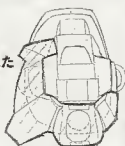
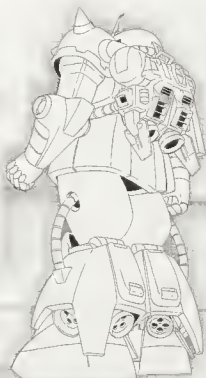
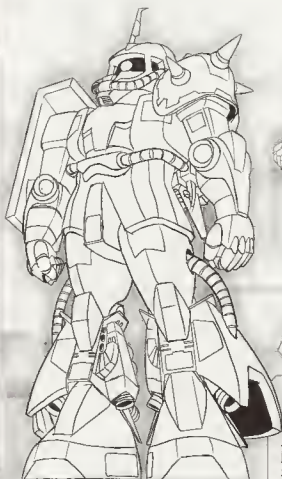
MS-06R-2

高機動型ザク R-2タイプ

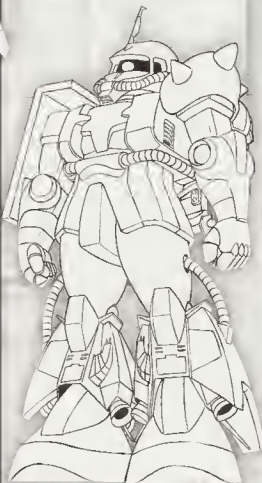
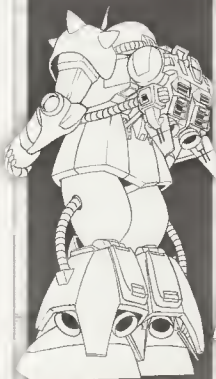
R-1Aタイプを改良した高機動型ザクの最終生産型。技術的にはMS-14 ゲルググに通じる機体で優れた性能を有していたが、高コストから主力化されることはなく4機が生産されるにとどまった。

基本仕様

全高:18.0m (頭頂高:17.5m) 本体重量:49.5t (全機重量:75.0t) ジェネレーター出力:1,340kW / スラスタ推力:60,000kg / 装甲材質:超硬スチール合金
武装:ザク・マシンガン、ザク・バスター、ビート・ホーク、シールド、ジャイアント・バズ



上面から見た
脚部装甲
概念図▶



▶▶ MS-06R-2P

高機動型 ザク・ビーム兵器搭載型

4機製造されたR-2型のうち、試作1号機に相当する機体。ビーム兵器の搭載が試みられた。ジェネレーターの換装で胸部が大型化している点が、通常のR-2型との違いである。

▲ MS-06R-2
キャビー・ハザード専用機



MS-06RD-4

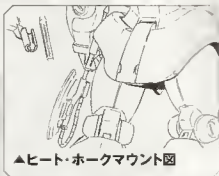
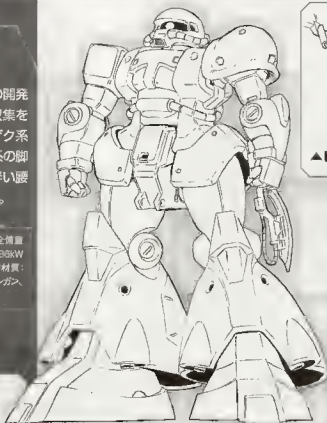
宇宙用高機動
試験型ザク

MS-09R リック・ドムの開発
において、そのデータ収集を
行うために試作されたザク系
列のテスト機。MS-09系の脚
部が装備され、それに伴い腰
部構造も変更されている。

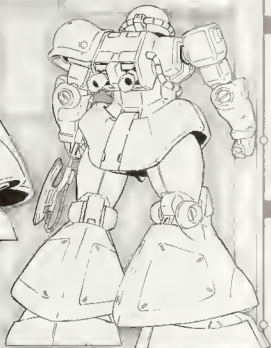
51.4t

全高:18.0m / 本体重量:60.3t (全機重
量:77.5t) / ジェネレーター出力:999kW
スラスター推力:53,000kg / 装甲材質:
超硬スチール合金 / 武装:ザク・マシンガン、
ヒート・ホーク

▼足裏構造



▲ヒート・ホークマウント図



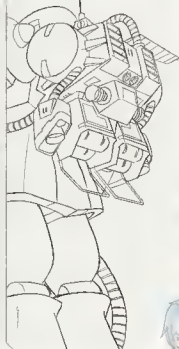
MS-06F

ザク・
マインレイヤー

宇宙空間での機雷敷設を目的
とするF型の特殊仕様機。ラ
ンドセルが機雷散布ボッドを
装備した大型のものに換装さ
れている点が特徴。その他に
も機体各所に細かな改修が施
されている。

51.4t

全高:17.5m / 本体重量:不明 / ジェネレ
ーター出力:不明 / スラスター推力:不明
装甲材質:不明 / 武装:機雷散布ボッド

▼ザク・マインレイヤー
ランドセル

MS-06Z-3

サイコミュ・システム 試験用ザク

サイコミュ・システムを搭載したF型の改修機で、MS-16X (MSN-02) 開発のデータ収集に用いられた。「ビショップ」のコードネームを持ち、Z-3型は3機製作されたうちの1機。

5.5F

頭頂高:17.7m / 本体重量:60.4t
ジェネレーター出力:不明 / スラスター推力:888,000kg / 装甲材質:不明 / 武装:有線制御式5連装メガ粒子砲×2



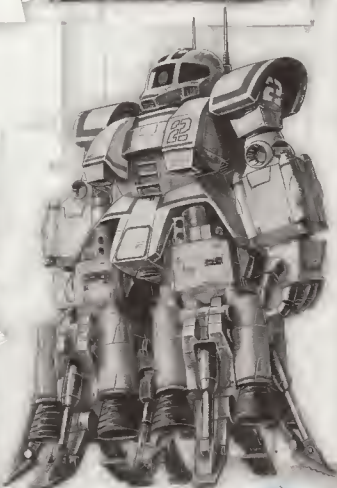
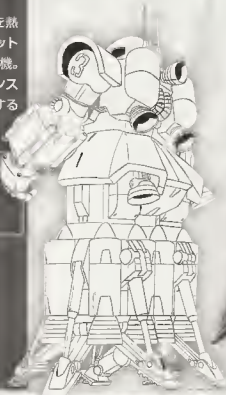
MSN-01

サイコミュ・システム 高機動試験機

Z型をベースとして脚部を熱核ロケット・エンジンユニットに換装した高機動性仕様機。高機動時のサイコミュ・システムの運用データを収集するために運用された。

5.5F

頭頂高:17.2m / 本体重量:65.4t
ジェネレーター出力:不明 / スラスター推力:不明 / 装甲材質:不明 / 武装:有線制御式5連装メガ粒子砲×2



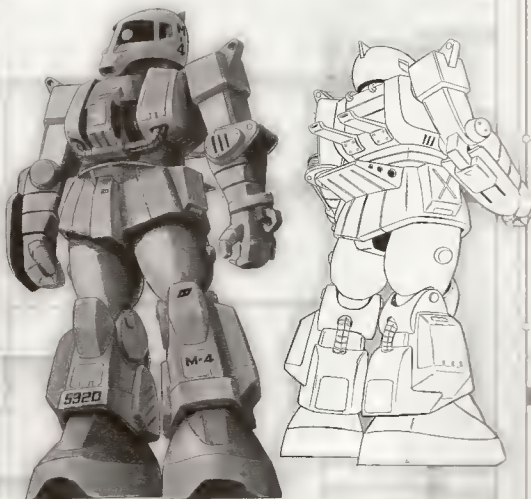
MS-06W

一般作業用ザク

ザクIやザクIIのパーツを流用して製造された作業用MS。武装は有していないが、機体各部に貨物デッキやスコップ、ウィンチといった機材を備え、高い作業性を発揮した。

SPEC

頭頂高:17.7m / 本体重量:51.8t / ジェネレーター出力:不明 / スラスター推力:不明 / 装甲材質:不明 / 武装:なし



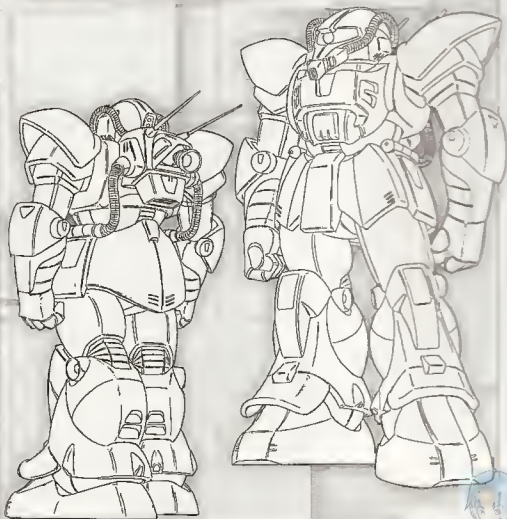
MS-11

アクト・ザク

ベズン計画において開発された、ザクIIをベースとする機体。ビーム兵器の運用が可能で、マグネット・コーティングも導入されている。戦後は接収した地球連邦軍に運用された。

SPEC

全高:18.2m / 本体重量:59.1t / ジェネレーター出力:1,440kW / スラスター推力:64,800kg / 装甲材質:超硬スチール合金 / 武装:ビーム・ライフル、ビーム・サッパル、ザク・マシンガン改、専用ブルバップ・ガン、専用ヒート・ホーク



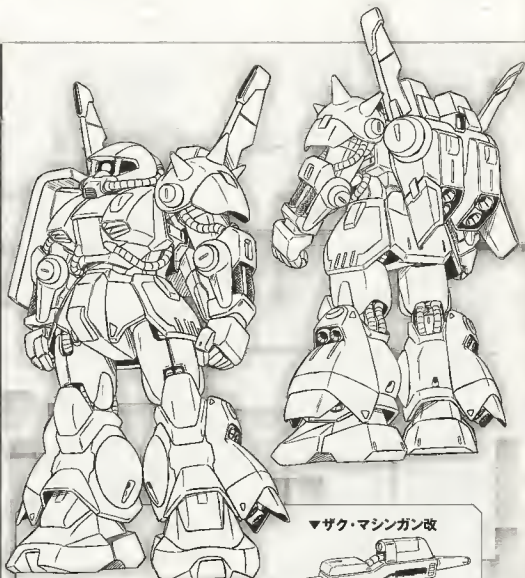
RMS-106

ハイザック

ザクⅡを設計のベースにして、地球連邦軍系の技術を導入して開発された汎用MS。主力機としては初めてリニア・シートと全天周四モニターを標準装備している。

SPEC

全高:18.0m / 本体重量:38.7t (全備重量:59.6t) / ジェネレーター出力:1,426kW
スラスター推力:64,800kg (16,200kg × 4) / 装甲材質:チタン合金セラミック複合材 / 武装:ビーム・サーベル、シールド、ザク・マシンガン改、ビーム・ライフル、ヒートホーク、腰部ミサイル・ボッド、メガ・ランチャー、バリエーションシステム



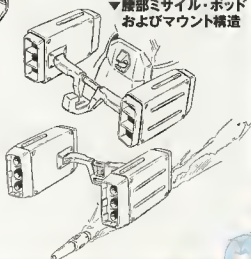
▼ザク・マシンガン改



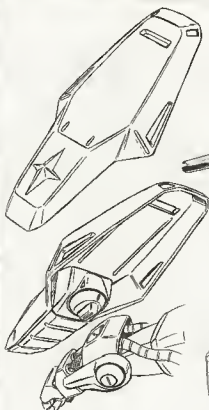
▼ビーム・ライフル



▼腰部ミサイル・ボッドおよびマウント構造



▲シールドおよびマウント構造



▲コクピットハッチ開放構造



RMS-106CS

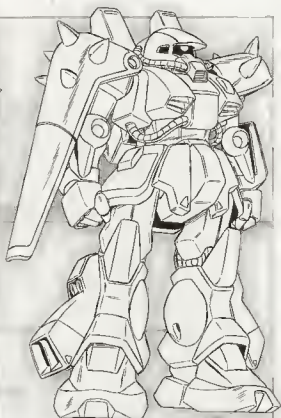
ハイザック・カスタム

ビーム兵器の同時運用を可能としたハイザックの改修機で、バックパックの換装や装甲材質の一部変更なども施されている。任務の性質から「かくれハイザック」とも呼ばれた。

5+EC

全高:18.0m / 本体重量:35.6t / ジェネレーター出力:1,430kW / スラスター推力:74,000kg / 装甲材質:チタン合金+セラミック合金+ガンダリウム合金 / 武装:ビーム・サーベル、3連装用ビーム・ランチャー

▼狙撃用ビーム・ランチャー



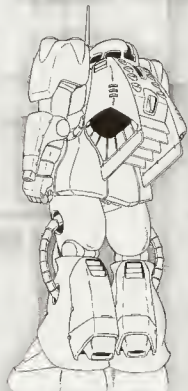
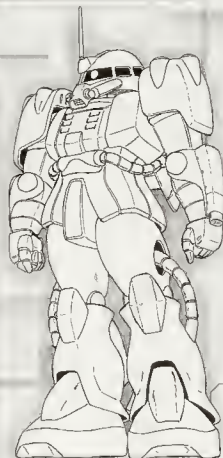
RMS-192M

ザク・マリナー

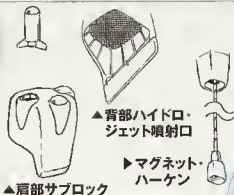
地球連邦軍が水中用ザクを再設計して開発した水陸両用MS。ハイドロ・ジェットのオプション化や武装の強化などによって、総合性能の向上が図られている。

5+EC

全高:19.4m (頭頂高:17.5m) / 本体重量:48.8t (全備重量:63.3t) / ジェネレーター出力:1,440kW / ハイドロ・ジェット推力:8,800kg / 装甲材質:チタン合金+ガンダリウム合金 / 武装:胸部3連サブロック×2、バックパック4連サブブロック、マグネット・ハーケン、フロントレックハイドロ・ジェット、スプレミサイルガン、マシンガン

▲フロントレック
ハイドロ・ジェット

▼指揮官機頭部



▲肩部サブロック

▲背部ハイドロ・
ジェット噴射口▼マグネット・
ハーケン

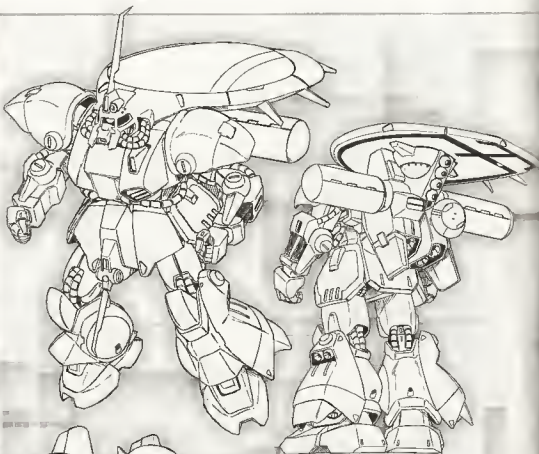
RMS-119

アイザック

ハイザックを元にして開発された地球連邦軍の偵察用MS。大型のレドームと一体化した頭部が特徴で、ミノフスキー粒子散布下でも優れた索敵能力を発揮した。

SPEC

全高:19.2m (頭頂高:16.3m) / 本体重量:41.6t (全備重量:73.5t) / ジェネレーター出力:1,430kW / スラスター推力:61,800kg (16,200kg×4) / 装甲材質:チタン合金セラミック複合材 / 武装:なし



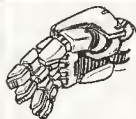
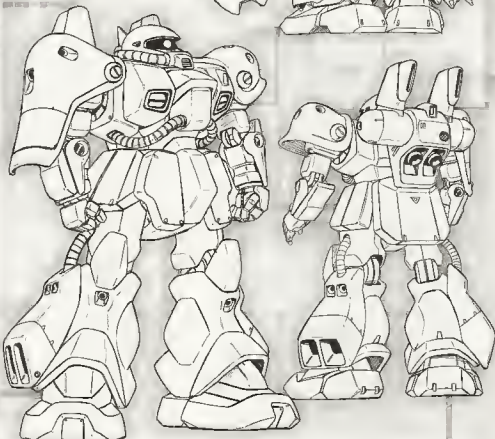
RMS-106H

ホビー・ハイザック

武装を取り外して民間に払い下げられたハイザックをホビー機として改造した民間用の機体。軽快な運動性を有しており、「シャアの反乱」においてネオ・ジオンが偽装して運用した。

SPEC

全高:不明 / 本体重量:不明 / ジェネレーター出力:不明 / スラスター推力:不明 / 装甲材質:チタン合金セラミック複合材 / 武装:なし



▲マニビュレーター



◀コクピットハッチ開放構造



AMX-011

ザクⅢ

アクシズ（ネオ・ジオン）がザクⅡの直系後継機として開発した汎用MS。バックバックなどの換装機能による幅広い汎用性を有していたが、主力化することはなかった。

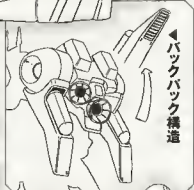
SPEC

全高：23.9m（頭頂高：21.0m） 本体重量：44.2t（全備重量：69.3t）
ジェネレーター出力：2,150kW / スラスター推力：172,600kg（28,400kg×2+19,300kg×6）
装甲材質：ガンダリウム・コンポジット / 武装：口角部ビーム砲、シールド、腕アーマー部ビーム砲（ビーム・サーベル兼用）×2

▼後頭部



↑バックバック構造



AMX-011S

ザクⅢ改

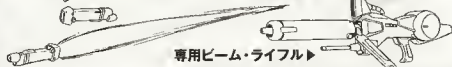
ザクⅢの換装機能を用いて総合性能の向上を図った改修機で、バイオ・センサーを搭載していたとも言われる。優れた機動性を有し、ネオ・ジオンの内乱で高い戦果を残した。

SPEC

全高：25.3m（頭頂高：21.0m） 本体重量：44.3t（全備重量：71.4t）
ジェネレーター出力：2,660kW / スラスター推力：211,500kg（34,200kg×2+28,400kg×3+19,300kg×3）
装甲材質：ガンダリウム・コンポジット / 武装：頭部30mmバルカン×2、シールド、ハイガンブ投下部、腕アーマー部ビーム砲（ビーム・サーベル兼用）×2、ビーム・ライフル



◀▼ビーム・サーベルおよび展開構造



専用ビーム・ライフル▶



▲足裏構造



機動戦士ガンダム MS-06 アーカイブ 新・MS-06 解体新書 ザクⅡの発展とその軌跡

2009年11月2日 初版発行

発行者 農村 偉

発行所 ジャイブ株式会社

〒160-8565 東京都新宿区大京町22-1

TEL 03-5367-2744 (編集) 03-5367-2725 (営業)

FAX 03-3357-3516 (営業)

URL <http://www.jive-ltd.co.jp/>

企画 ジャイブ第一編集部

編集 有明社メカロマニア

原稿 杉山和繁 / 坂口徳仁

カバーデザイン 井上雅允 (Flightlab)

本文デザイン 安川純史 (Thee morning bell)

カバーイラスト 木下ともたけ

イラスト 大本海園 和田淳 / 今井研 (Twin bell)

印刷所 国書印刷株式会社

※乱丁本、落丁本は、購入された書店名を明記して、本社までお送りください。送料、本社負担にてお取替いたします。

※本書の無断複写 (コピー) は、法律で定められた場合を除き、著作権の侵害となります。

※アニメの内容に関する質問には、一切お答えすることが出来ません。

※定価はカバーに記載してあります。

© 創通・サンライズ

ISBN978-4-86176-704-3

Printed in Japan

※本書は2000年8月にティーツー出版より発行された「機動戦士ガンダム MS-06 解体新書」に加筆・訂正したものです。



MS-06 ARCHIVES

新・MS・06 解体新書

ザクIIの発展とその軌跡

JIVE

新・MS-06解体新書ザクIIの発展とその軌跡

MS-06 ARCHIVES



JIVE



機動戦士ガンダム



MS-06 ARCHIVES





9784861767043

ISBN978-4-86176-704-3
C0076 ¥2380E



1920076023804

シャイブ

定価 本体2,380円 + 税

© 創通・サンライズ

機動戦士ガンダム



MS-06 ARCHIVES